愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第91集

川原（かわはら）遺跡

第二分冊

2001

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

目　次

第1分冊

Ⅰ　発掘調査の概要

調査の経緯と経過(服部信博) …… 1

調査の概要(服部信博) …… 2

地形・地質の概観(鬼頭　剛・小野映介) …… 4

歴史的環境(服部信博) …… 6

遺跡の層位と時期区分(服部信博) …… 10

Ⅱ　弥生時代中期

Ⅰ・Ⅱ期の遺構 …… 12

Ⅰ期の遺構(服部信博) …… 12

Ⅱ期の遺構(服部信博) …… 22

Ⅰ・Ⅱ期の遺構の変遷(服部信博) …… 38

土器

縄文晩期から弥生前期(石黒立人) …… 40

弥生中期(石黒立人) …… 40

土製品(田口雄一) …… 52

石器

旧石器・縄文草創期(斎藤基生) …… 54

弥生時代の石器(原田　幹・服部信博) …… 57

木製品(樋上　昇) …… 75

付論

1　矢作川流域における弥生中期土器編年の再検討 …… 77
石黒立人(愛知県埋蔵文化財センター)

2　凹線文土器の波及をめぐって …… 104
鈴木とよ江(西尾市教育委員会)

3　川原遺跡出土の石製舌について …… 115
服部信博(愛知県埋蔵文化財センター)

4　剥片石器の技術分析と使用痕分析 …… 120
原田　幹(愛知県教育委員会)
角張淳一・池谷勝典(株式会社アルカ)

図版

第２分冊

Ⅲ　弥生時代後期から古墳時代初頭

Ⅲ期の遺構 …… 1

墓域の概要（赤塚次郎） …… 1

墳丘墓（赤塚次郎） …… 4

主体部（赤塚次郎） …… 11

土器集積（赤塚次郎） …… 19

配石遺構（赤塚次郎） …… 29

竪穴状遺構ほか（赤塚次郎） …… 30

Ⅲ期の遺物 …… 34

土器（赤塚次郎） …… 34

石製品・金属製品・土製品等（赤塚次郎） …… 36

木製品（樋上昇） …… 38

Ⅳ　古墳時代中期

Ⅳ期の遺構（鉾谷　一） …… 45

Ⅳ期の土器（田口雄一） …… 51

Ⅴ　古代・中世

Ⅴ期の遺構（鉾谷　一） …… 55

Ⅵ期の遺構（鉾谷　一） …… 55

Ⅶ期の遺構（鉾谷　一） …… 57

Ⅴ～Ⅶ期の遺物（中野良法） …… 59

Ⅵ　まとめ（服部信博・赤塚次郎） …… 69

付論

5　川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定 …… 71

赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）

6　墳丘墓と槽形木棺墓について …… 93

赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）

7　川原遺跡出土の木製品群について …… 100

樋上　昇（愛知県埋蔵文化財センター）

図版

第3分冊

自然科学分析

1 矢作川沖積低地北部、川原遺跡における古環境の復元 …… 1
鬼頭　剛・尾崎　和美(愛知県埋蔵文化財センター)
小野　映介(名古屋大学)

2 川原遺跡のプラント・オパール分析 …… 17
鈴木　茂(株式会社パレオ・ラボ)

3 川原遺跡から産出した昆虫化石 …… 19
森　勇一(愛知県立明和高等学校)

4 川原遺跡出土の植物遺体 …… 23
新山　雅広(株式会社パレオ・ラボ)
藤山　誠一(愛知県埋蔵文化財センター)

5 川原遺跡の焼失家屋 97BCD区 SB201 および
SB211 から出土した炭化材樹種同定 …… 27
植田　弥生(株式会社パレオ・ラボ)

6 川原遺跡から出土した墓壙に残存する脂肪の分析 …… 33
中野　益男(帯広畜産大学生物資源科学科)
中野　寛子・門　利恵・長田　正宏(株式会社ズコーシャ・総合科学研究所)

7 川原遺跡出土土器の胎土材料 …… 39
藤根　久・今村　美智子(株式会社パレオ・ラボ)

8 川原遺跡、叩き甕の胎土材料 …… 47
藤根　久・今村　美智子(株式会社パレオ・ラボ)

9 川原遺跡出土土器の胎土分析 …… 55
矢作　健二(パリノ・サーヴェイ株式会社)

10 川原遺跡出土弥生中期土器の胎土分析とその考古学的評価 …… 61
永草　康次(神塾)・藤山　誠一(愛知県埋蔵文化財センター)

11 川原遺跡、遺構内粘土の粘土鉱物分析 …… 71
パリノ・サーヴェイ株式会社

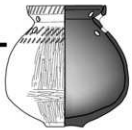
12 墨書土器の墨材料 …… 73
藤根　久(株式会社パレオ・ラボ)

13 銅鏃・管状銅製品・ガラス玉の蛍光X線分析 …… 76
藤根　久(株式会社パレオ・ラボ)

写真図版

Ⅲ

弥生時代後期から古墳時代初頭



Ⅲ期の遺構（川原上層式）

弥生時代後期から弥生時代終末期・古墳時代初頭を川原上層式期として設定できる。川原上層Ⅰ式期は弥生時代後期前葉を中心とし、川原上層Ⅱ式期を弥生時代後期後半に、上層Ⅲ式期はおおむね弥生時代終末期・古墳時代初頭に該当する時期と考える[1]。ただし、ここで言う「川原上層式」とは川原上層Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式を総称するものであり、記述上においてのみ便宜的に使用する。

墓域の概要

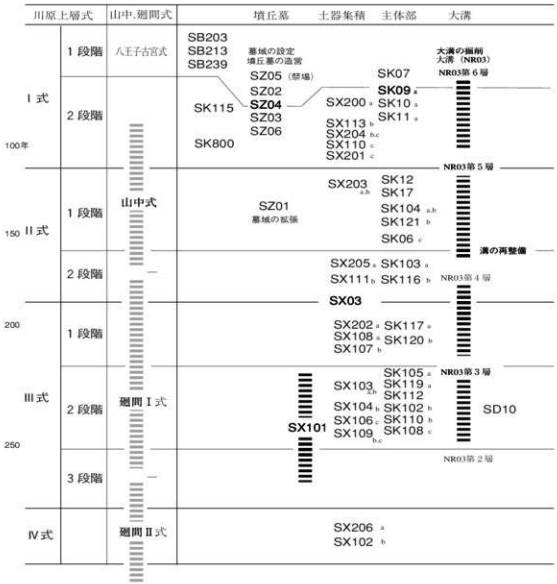
川原遺跡では弥生時代後期になると、再び微高地上が墓域化する。弥生時代中期に引き続いて、微高地南側では崖状に落ち込む旧河道（SD102・103）が見られ、調査区北側には緩やかに傾斜する湿地状の地形が存在した。この旧河道と湿地状の地形に挟まれた東西約120m、南北80mの微高地上では、新たに墓域が設定された。さらに興味深い遺構として、微高地西側に幅20m深さ3mほどの大溝が掘削される。大溝（NR03）は、人工的な構築物であった可能性が高いが、一部に自然の小河川を再利用した形跡も認められる。また墓域全体の西側を画する区画溝の役割があったのかもしれない。いずれにしろ、弥生時代後期初頭段階に巨大な大溝が掘削された点は注目に値しよう。

微高地上に設定された墓域は、まずはじめに大溝NR03の掘削・整備と、微高地中央部南端に大型墳丘墓SZ02が造営される。SZ02は墳丘部の大きさが東西26m、南北23mを測り、周囲には箱掘り状の溝が幅10mにわたって巡る。そしてほぼ同時期にSZ04が造営され、引き続いてSZ03・SZ06の造営が開始されることになる。弥生後期前葉段階では主要な墳丘墓の造営は終了していたものと思われる。なおSZ02と旧河道との間には複数の竪穴状遺構が展開した。これら同一の方向性を持つ遺構群は、日常的な生活空間としての機能がほとんど認められない点から、墓域にともなう何らかの施設であった可能性が高い。そしてこの竪穴状遺構が展開した空間には、その後の弥生時代後期中ごろになって、SZ01が営まれることになる。SZ01の造営は、いわば当初予定していない場所への墓域の拡大にほかならない。SZ01は唯一墳丘墓の溝を重複する状況が確認でき、周溝の大きさや形が従来の墳丘墓と大きく異なる点が指摘できる。さらにSX101とした大型の土器処置場をもつことなどから、新たに設定された特殊な墳墓である可能性が高い。

さて、墳丘墓内には複数の主体部が展開し、弥生後期前葉から後葉、さらに弥生時代終末期（古墳時代初頭）前半期にかけて継続的に営まれたことが、出土遺物等から推測できる。また主体部上やその周辺には、墓前祭に使用したと考えられる土器が配置され、あるいはまとめて処置された場所が、各所に点在する[2]。主体部上に土器を配置した行為の最初の事例はSX204（川原上層Ⅰ式2c段階）で想定できるが、こうした行為が一般化したのは弥生時代終末期初頭段階まで待たねばならないようである。それ以前においては、祭祀に使用した道具の処置は、墳丘墓周辺に適宜設定されていた

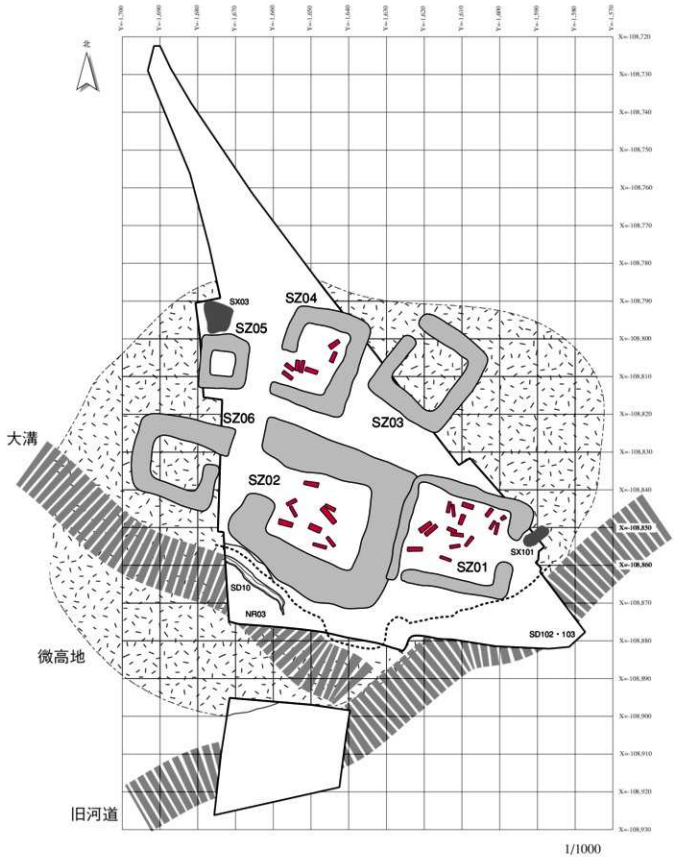
1）ここでは弥生時代後期と、近畿地域の庄内式併行期（おおむね廻間Ⅰ・Ⅱ式）を区別し、後者を弥生時代終末期・古墳時代初頭ないしは早期として取り扱う。
2）墳丘墓に関連する祭祀行為に伴う土器集積を、ここでは廃棄ではなく処置として取り扱う。

第5表　主要遺構時期区分表



墳丘墓	長軸	短軸	溝幅	型式	主体部	造営開始時期
SZ01	26.5m	22m	3～4m	B1型	16	Ⅱ-1b
SZ02	26m	23m	10m前後	コ字型	9	Ⅰ-1
SZ03	-	-	7m以上	-	-	Ⅰ-2
SZ04	19m	14m	4～6m	コ字型	7	Ⅰ-1
SZ06	-	-	7m	-	-	Ⅰ-2a
SZ05（方形墳）	7m	7m	3.5～4.5m	全周型	無	Ⅰ-1

＊主体部SK番号の後にくるアルファベット小文字は、様式編年の1a・1b・・という小段階を示す。



第46図　主要遺構配置図（1/1000）

点が、遺構の配置状況から推測できる。

ところで、今一つ興味深い遺構が存在する。それは墓域の北西に位置するSZ05である。SZ05は、他の墳丘墓とはその在り方が大きく異なる。まず墳丘部と周溝の比率が大きく異なり、さらに正方形で、周溝が幅広く全周する点もSZ05のみに認められる特徴である。主体部も確認されておらず、土器集積も認められない。かわってSZ05北側には近接して大型の落ち込み状遺構であるSX03が存在する。各墳丘墓の主軸は、おおむね北に傾斜した東西方向を基本とするのに比べて、SZ05のみは、ほぼ真北方向に軸線をもつ。こうした諸点から、SZ05が埋葬空間としての墳丘墓の機能をもつとは考えにくい。むしろ墓域にとって必要であった、何らかの特殊な施設を想定する必要がある。墓域内に設定された「祭場」としての方形壇状遺構と呼ぶべきものと思われる。

以上の遺構配置状況から、微高地上に設定された墓域を綜合すると、まず弥生時代後期前葉に、SZ02を中心とした4基の大型墳丘墓が造営される。そして後期中葉まで継続的に埋葬と墓前祭が繰り返し実施された。地域共同体内に存在する4つの特定集団が、繰り返し実施した埋葬行為であった可能性を想定しておきたい。その後、弥生時代後期中葉になり、墓域内では唯一の墳丘墓として、あらたにSZ01が造営されることになる。この時点において集落内に存在した複数の特定集団がより分化し、川原遺跡を指導する唯一の特定集団が排出されていったことがSZ01の造営によって類推できる。このように川原遺跡における墓域の動向は、特定集団のさらなる階層化が進んだことを物語る大変重要な資料と考える。

なお墳丘規模の26m前後という数値は、弥生時代後期において他の遺跡と比較しても最大規模を誇る墳丘墓といえよう。

●●墳丘墓●●

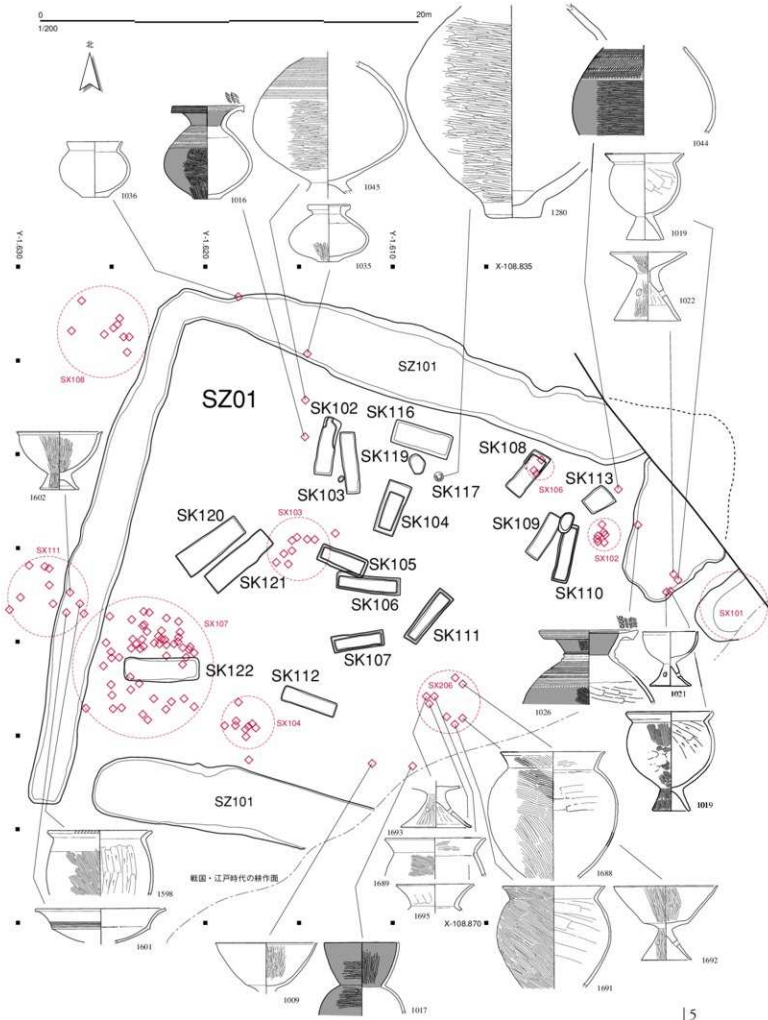
調査区内には5基の墳丘墓を確認できたが、微高地の広がりから推察すると、SZ01北側にも他に1基造営されていた可能性もある。

SZ01

川原上層Ⅱ式1b段階に造営を開始した墳丘墓で、墳丘内の大きさは、東西26.5m南北22mを測る。溝で区画された墳丘部の大きさとしては、最大規模を誇る。区画する溝は3～4mと幅狭く、深さは場所により不安定であるが、約0.2～0.3m前後の箱掘り状に掘削される。幾分内側が急斜面で、外側が緩やかな傾斜を保つ。墳丘の南東部は戦国時代から江戸時代の耕作面により大きく破壊されている。おそらく東側に開口部をもつB1型の形状を備えた墳丘墓と推測できよう[3]。また、南西隅では溝が途切れ、北西隅は溝幅が狭く、深さが浅い。西側ではSZ02の東溝と大きく重複し、東側は旧河道により地形的な制約を受けているためか、南溝が若干北に偏る傾向が読み取れる。墳丘内には16の埋葬主体が営まれ、ほぼ中央部には中心的な主体部と考えられるSK106が存在する。SZ01周辺には土器集積が3ヶ所認められ、西側にはSX108とSX111、東側にはSX101が存在した。土器の型式学的な検討から、SX111からSX108へ、そしてSX101へと土器の処置場が移動したことがわかる。SX101からは大量の完形土器が集積された状況で発見できた。開口部の状況などから推測すれば、SZ01上で執り行われた祭祀用土器を、一括して処置した場所と推測できよう。川原上層Ⅲ式2段階に所属する。また主体部上には数ヶ所にわたって土器集積が見つかった。その内の最大のものがSX107である。

さて、調査段階の所見に基づき墳丘の構築法に言及しておきたい。墳丘墓には僅かな盛り土が想定できるが、こうした盛り土は、実は埋葬行為の繰り返しによって結果的にでき上がったものと思われる。つまり、墳丘墓の区画が設定され、その

3）赤塚1992「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第6号



第47図　SZ01主要遺構配置・遺物出土地点（1/200）

内部に継起的に埋葬および墓前祭が繰り返され、そのつど周辺に若干の盛り土・整地が施された。結果的に主体部はもちろん、供献土器の土器集積そのものが墳丘内に封じ込められることになる。土器は特別な土坑を掘削することなく全てその場において、盛り土の中に埋められ、封じ込められる。

さて、東側開口部から墳丘内にかけては広場的な空間として活用された可能性があり、人頭大の河原石の配石が周辺に展開する。なおSK117は土器棺である。主体部の埋葬はまず中央部から開始され、しだいに周辺部に拡張されていったことがうかがい知れる。墳丘墓内への埋葬は、川原上層Ⅲ式2段階内でほぼ終焉したものと思われる。

SZ02

川原上層Ⅰ式1段階に造営を開始した墳丘墓で、墳丘内の大きさは東西26m南北23mを測る。区画する溝はおおむね10m前後と幅広で、深さ0.3m～0.5mでやはり箱掘り状を呈する。周溝は大きく、西側には10mほどの開口部が存在する。南周溝の南端は大溝(NR03)上層によって破壊されている。墳丘部の平面形は西側がやや狭い台形状を呈する。区画内には9基の埋葬主体が存在し、中央部には大型の土壙墓SK09が営まれる。SZ02周辺にはSX200・SX201の土器集積が2ヶ所認められ、いずれも北溝の北端周辺に位置する。SX200周辺からは銅鐸型土製品が、SX201周辺からは筒状銅製品が出土している。埋葬は区画内中央部から開始され、開口部に向かって拡張し、しだいに周辺部に広がっていく傾向が見られる。主要な埋葬行為は川原上層Ⅰ式段階で終焉したものと思われる。なおSX204はおそらく主体部SK10に伴う土器配置と考えられ、こうした配置方法が確認できるのは、川原遺跡では最古の事例である。川原上層Ⅰ式2c段階に所属する。

SZ03

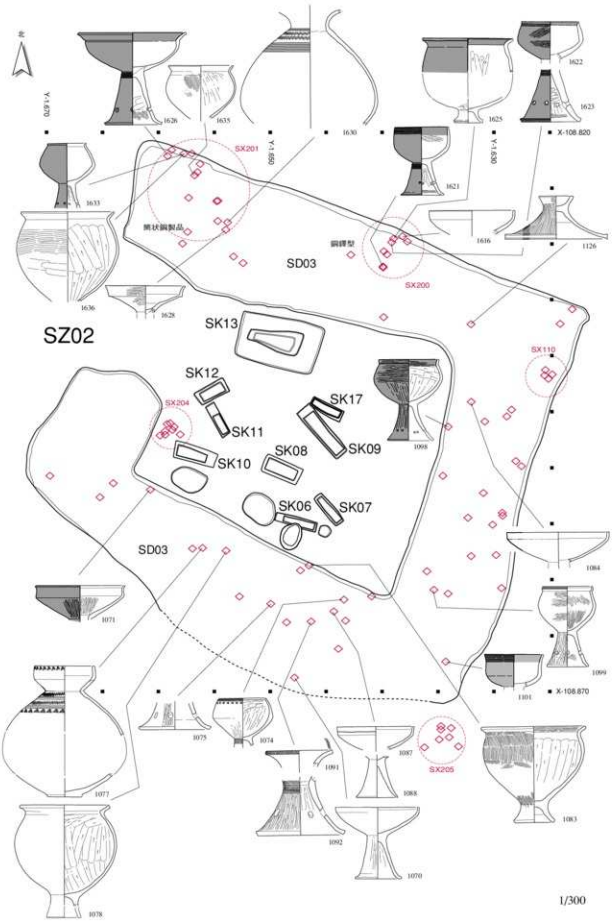
調査区中央東端部に位置し、検出できたのは、南側周溝に相当する部分と思われる。溝内に見られるSX113、あるいは周溝付近から出土した土器は、甕が主体を占める。これらは川原上層Ⅰ式2段階に所属する資料であり、SZ03の造営がⅠ式2段階には始まっていたことが推測できる。規模は推定できないが、南溝は約20m以上を測り、溝幅は7m以上となる。深さは0.2m前後と浅い。微高地北端に築かれたSZ04相当規模の墳丘墓を想定したい。

SZ04

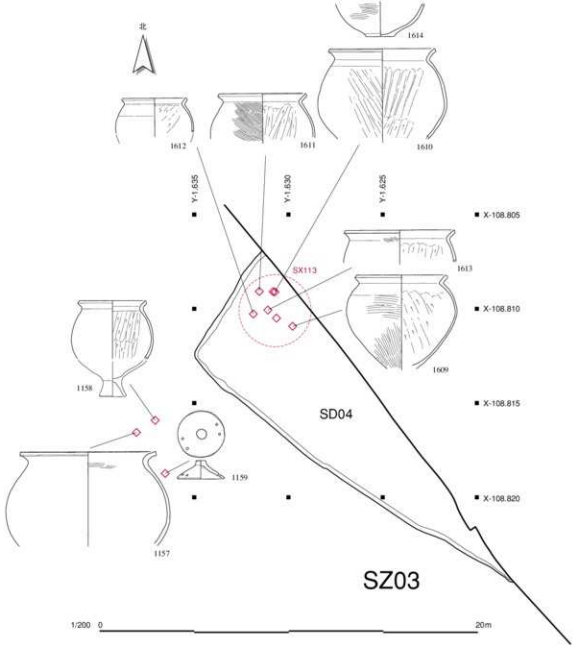
川原上層Ⅰ式1段階に造営を開始した墳丘墓で、墳丘内の大きさは東西19m南北14mを測る。区画する溝は約4m～6m前後で、深さ0.2～0.3mと比較的均一である。周溝は南西部に10mほどの開口部をもつ。墳丘内の大きさは南北19m東西14mを測る。北東隅部は調査区外となる。墳丘軸線はおおむねSZ02と平行し、SZ02北溝とSZ04南溝は意識的に平行しつつ近接して(幅5.5m)設定されたものと考えられる。区画内には7基の土壙墓が存在し、まず開口部周辺の東西方向に軸線を置く墓壙が営まれ、続いて北東側へ埋葬場所が移動したものと思われる。主体部内からは明瞭な供献土器や副葬品は発見できていない。なおⅢ式1段階にあらためて墳丘墓が活用された痕跡が見られ、南北方向に軸線を置く土壙墓(SK20・SK21)とSX202に見られる土器集積が存在する。なおこの土器集積には小型の直口鉢が多量に出土するという特徴が見られる。

SZ05

前記したように他の墳丘墓とその在り方が大きく異なるSZ05は、いわゆる墳丘墓の範疇ではなく、特殊な方形壇状遺構として位置づけておきたい。墓域の北西に位置するSZ05は、墳丘部と周溝の比率が他の墳丘墓と大きく異なり、さらに区画が正方形で、周溝が幅広く全周する。こうした特徴は明らかにSZ05のみに認められる。さらに主体部は確認されておらず、土器集積も認められない。かわってSZ05北側には大型の落ち込み状遺構SX03が設定されている。また、他の墳丘墓群の主軸が、やや北に傾斜した東西方向を基本とする点に比べて、SZ05のみはほぼ真北を軸線にもつ。こうした諸点からもSZ05を、他の墳丘墓と同様な性格とするには問題が多いと思われる。したがって



第48図　SZ02主要遺構配置・遺物出土地点（1/300）



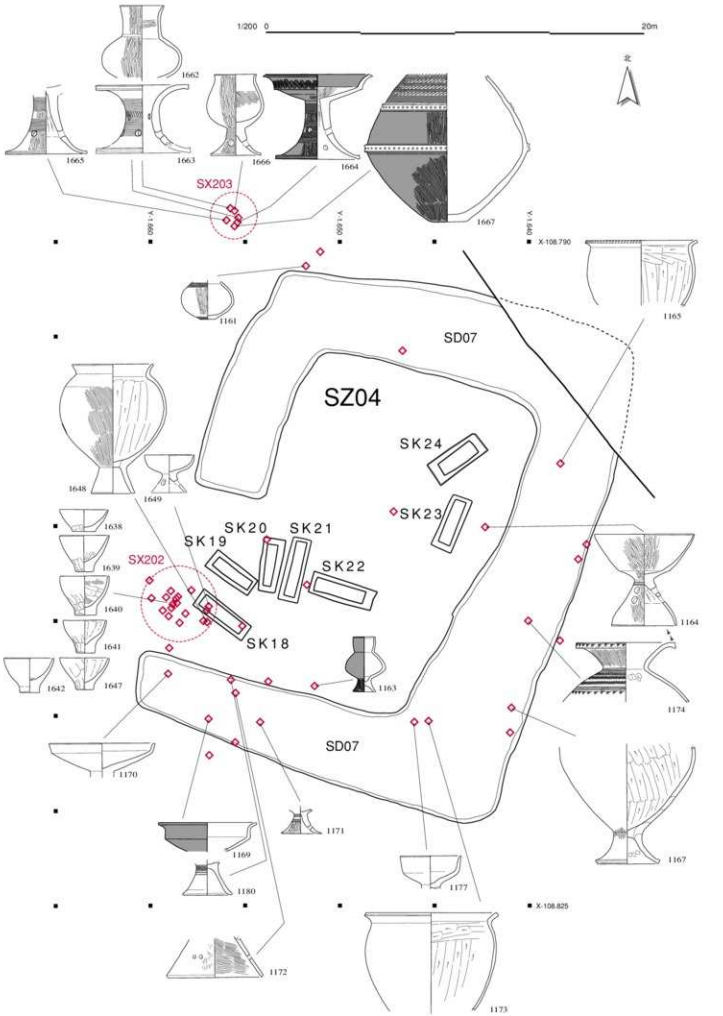
第49図　SZ03遺物出土地点（1/200）

墓域内の特殊な施設を想定する必要があり、祭場とし常時活用された施設と考えておきたい。方形壇状遺構と呼ぶべきものと思われる。周溝内から出土した土器からは、川原上層Ⅰ式1段階に遡る可能性が高く、おそらく墓域の設定とほぼ同時に設営された祭場であったと推察しておきたい。

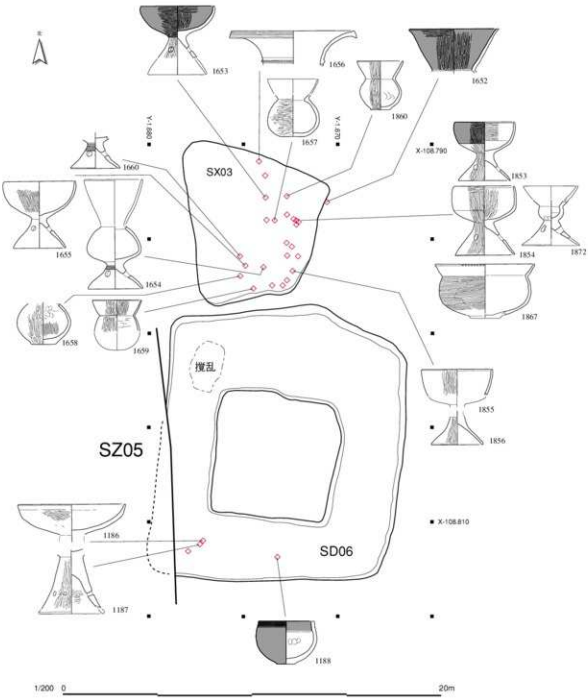
方形壇状遺構の区画内の大きさは、7m×7mで、溝幅は約3.5m～4.5mを測る。深さ0.2mと浅く、溝は他の墳丘墓に比べて幾分緩やかな傾斜を持ち掘削されている。

SZ06

調査時点では竪穴状遺構としていたもので、箱掘り状の掘削や0.6mの深さをもつ点などから微高地西端に位置する墳丘墓SZ06を想定した。出土した土器からは川原上層Ⅰ式2段階に所属するものと思われる。開口部をSZ02に向けた、SZ04相当規模の墳丘墓が想定できよう。



第50図　SZ04主要遺構配置・遺物出土地点（1/200）



第51図　SZ05・SX03遺物出土地点（1/200）

SZ01・SZ02・SZ04にて、主体部と考えられる墓壙を合計32基検出した。さらにその墓壙内にて棺痕跡と思われる遺構を確認することができた。ここでは、墓壙と棺についてまとめて整理することにしたい。

墓壙

長軸と短軸の差が大きい長方形を呈し、小口部の長さに偏りが見られる形状のものが多い。墓壙内には棺痕跡が見られ、墓壙の大きさと棺の大きさは相対的に相似形になる場が一般的である。ただしSK11やSK10・SK104などのように、棺の設置個所が一方に偏り、墓壙内に一定の空間が存在する事例もある。

墓壙の大きさを概観すると、まず長軸と短軸の規模の比率において、2種類が存在することがわかる。すなわち長軸(主に長さ)に対し短軸(主に幅)が狭く、細長く墓壙を掘削するものと、短軸を比較的大きく取り、幅広の墓壙を掘削するものである。おおむね棺の形状に規制されていると思われるが、前者をA型とし後者をB型とする。墓壙の大きさはこの二者において、それぞれ大小(a・b)に区分できる。大きな規模をもつAa型の墓壙はSK09・SK121で、Ba型はSK08・SK10・SK120に限られる。最も大きな墓壙をもつものはSZ02の中心的な主体部であるSK09であり、長軸4.4m短軸1.25mを測る。その他のAb型は長軸が3m～3.5mに短軸が、1m前後に集中する。Bb型は長軸が2.5m～2.8mで短軸が1m前後に集中する傾向がある。棺の大きさに規制されて、幅1mというのが墓壙幅の最小単位といえよう。墓壙の掘削は各四側面がすべて傾斜をもつ緩斜面となる。墓壙底部は平坦面をもつものと若干彎曲する場合とがある。後者は墓壙掘削後に、棺底部を設置するための整地層が見られる。弥生時代後期中葉(川原上層Ⅱ式期)以降は墓壙底部に平坦面を作り、その上に直接、棺底部を置く方法に変化していく傾向が読み取れる。また、SZ01に伴う墓壙では棺の大きさと墓壙がほぼ同じ大きさに造られ、墓壙の掘削が、むしろ棺を組み立てるのに都合の良い大きさを保つような、機能性を重視する傾向も認められる。

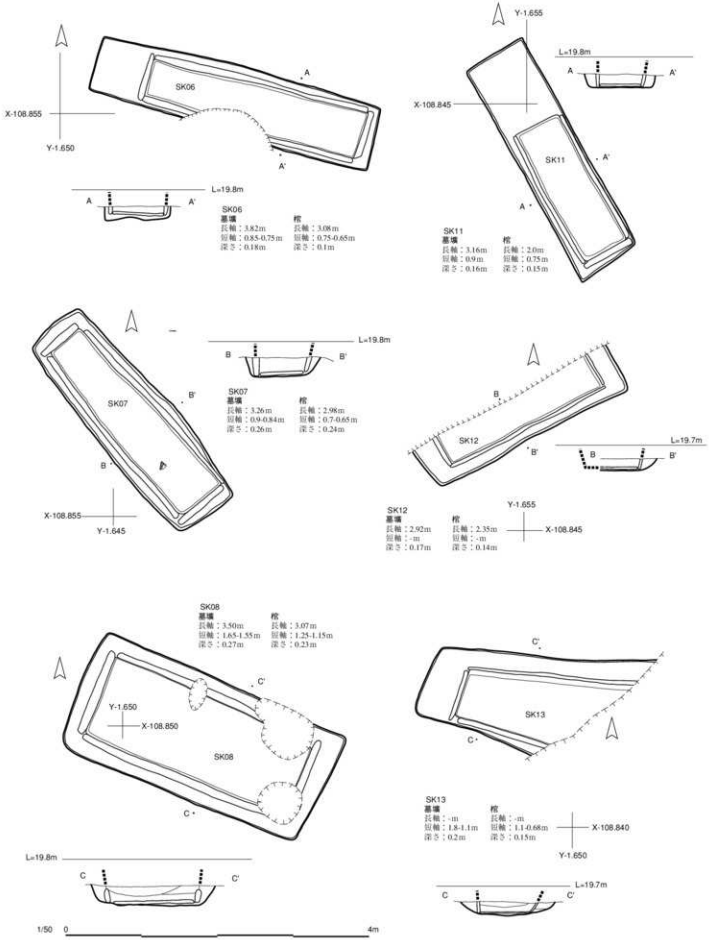
棺

墓壙と同様に内部に設置された棺痕跡は、その規模からおおむね2つに大きく分類できる。ただし幅広のSK08と長大なSK09をここでは例外的に扱う。すると長軸(棺の長さ)が3m前後のものと2.4m前後のもの二者に区分できる。棺の幅である短軸は、0.7m～1m前後に集中する。こうした点からは棺の大きさには大小が存在し、したがって墓壙の形状とその大きさは「棺の大きさとプラスα」によって決定されたことになる。プラスαには棺の組立方や副葬品等の設置が考えられよう。

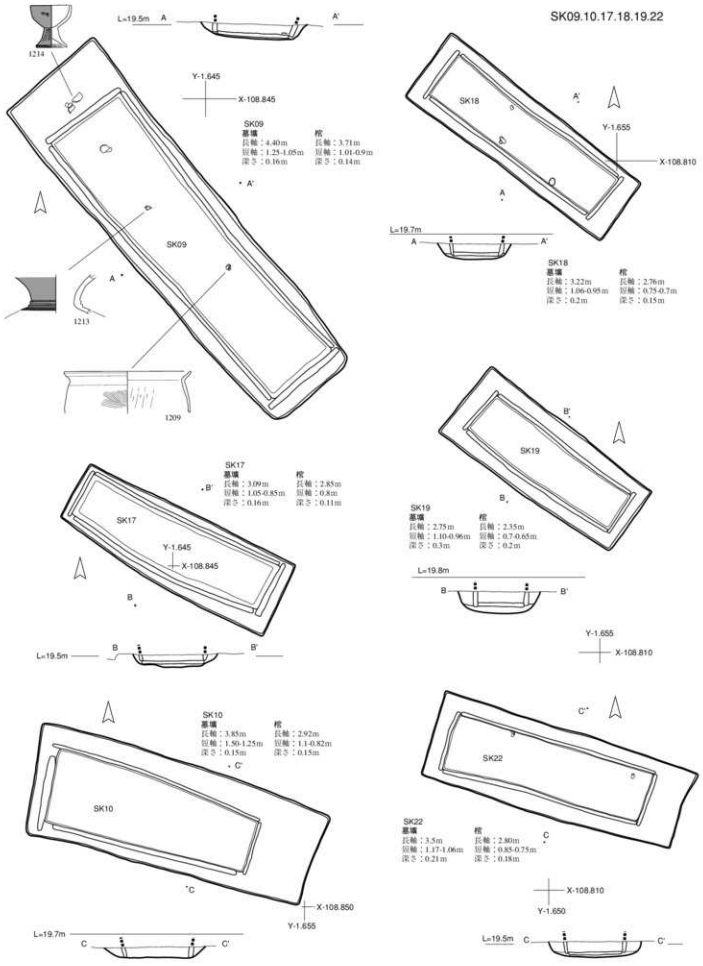
さて、例外としたSK09は墳丘墓SZ02の中心的な主体部であり、その大きさにおいてやや突出する。またSK08も同様にSZ02の中心的な主体部であり、この二者は特殊な棺を用意していた可能性が高い。

棺の形状であるが、これについては後述するためその概要をまとめておくに留めたい。まず棺側面であるが、ほとんどの場合、傾斜をもち外傾する。底部は平らで、棺底部と思われる痕跡が、棺側板の内側に位置する。小口部においても基本的には同様であり、外傾する小口板を有していたものと推測できる。したがってこうした棺痕跡を基に復原すると、底板を挟んで側板と小口板がともに外傾する形状が想定できる。小口板は側板の外側に押し当てられたような形をとる。したがって付論にて後述するような「槽形木棺」であった可能性が高い。平面形は一方の幅が広い長方形を呈するものが基本である。こうした槽形木棺がどのような構造であったのかは、明確には判断しにくいが、刳貫き式であった可能性は棺痕跡からは窺えない。したがって組合式あるいは組立式の木棺墓であったと想定したい。なおSK102・SK103では、棺痕跡と墓壙の間に粘土混在土を意図的に使用している。

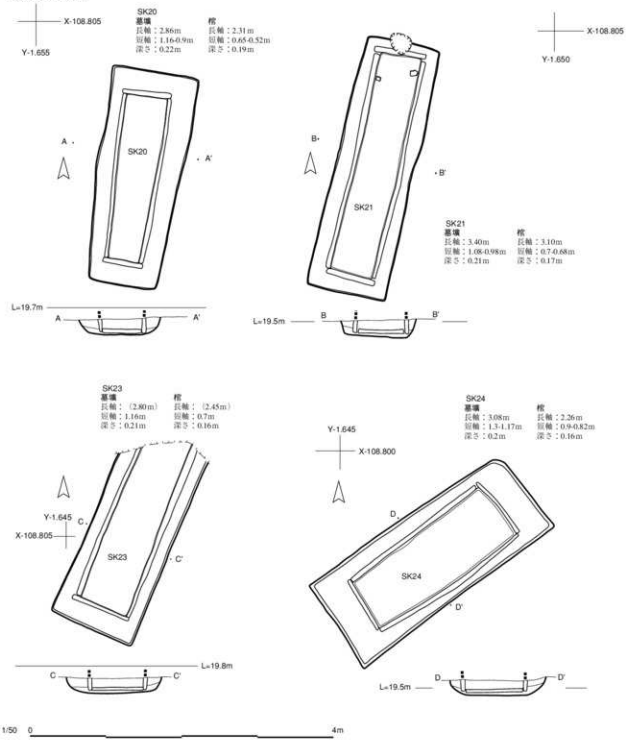
SK06.07.08.11.12.13.



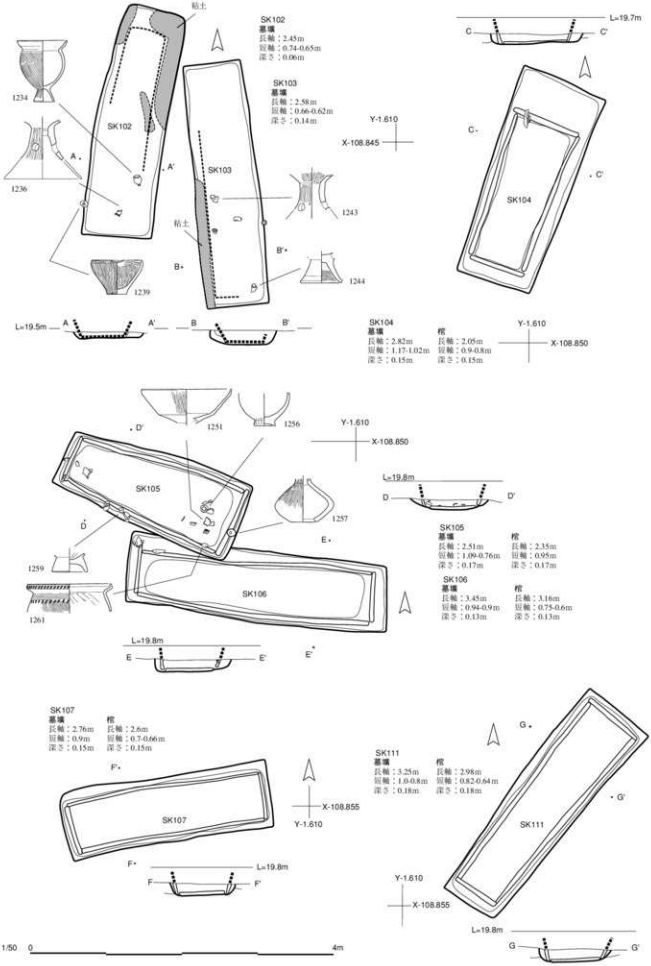
第52図　墓壙1（1/50）


SK09.10.17.18.19.22
1214
L=19.5m
A
A'
Y-1.645
X-108.845
SK09
墓壙
長軸：4.40m
短軸：1.25-1.05m
深さ：0.16m
棺
長軸：3.71m
短軸：1.01-0.9m
深さ：0.14m
SK09
1213
1209
SK18
墓壙
長軸：3.22m
短軸：1.06-0.95m
深さ：0.2m
棺
長軸：2.76m
短軸：0.75-0.7m
深さ：0.15m
L=19.7m
SK17
墓壙
長軸：3.09m
短軸：1.05-0.85m
深さ：0.16m
棺
長軸：2.85m
短軸：0.8m
深さ：0.11m
B'
B
L=19.5m
SK19
墓壙
長軸：2.75m
短軸：1.10-0.96m
深さ：0.3m
棺
長軸：2.35m
短軸：0.7-0.65m
深さ：0.2m
L=19.8m
Y-1.655
X-108.810
SK10
墓壙
長軸：3.85m
短軸：1.50-1.25m
深さ：0.15m
棺
長軸：2.92m
短軸：1.1-0.82m
深さ：0.15m
C'
C
X-108.850
Y-1.655
L=19.7m
SK22
墓壙
長軸：2.5m
短軸：1.17-1.06m
深さ：0.21m
棺
長軸：2.80m
短軸：0.85-0.75m
深さ：0.18m
X-108.810
Y-1.650
L=19.5m
1/50
0
4m

第53図　墓壙2（1/50）

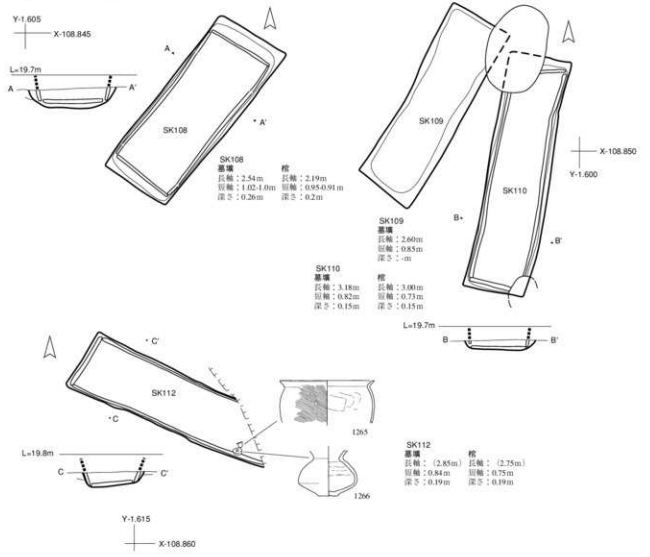

SK20.21.23.24
X-108.805
Y-1.655
SK20
墓壙
長軸：2.86m
短軸：1.16-0.9m
深さ：0.22m
棺
長軸：2.31m
短軸：0.65-0.52m
深さ：0.19m
A
A'
SK20
L=19.7m
X-108.805
Y-1.650
B
B'
SK21
SK21
墓壙
長軸：3.40m
短軸：1.08-0.98m
深さ：0.21m
棺
長軸：3.10m
短軸：0.7-0.68m
深さ：0.17m
L=19.5m
SK23
墓壙
長軸：（2.80m）
短軸：1.16m
深さ：0.21m
棺
長軸：（2.45m）
短軸：0.7m
深さ：0.16m
Y-1.645
X-108.805
C
C'
SK23
L=19.8m
SK24
墓壙
長軸：3.08m
短軸：1.3-1.17m
深さ：0.2m
棺
長軸：2.26m
短軸：0.9-0.82m
深さ：0.16m
Y-1.645
X-108.800
D
D'
SK24
L=19.5m
1/50
0
4m

第54図　墓壙3（1/50）

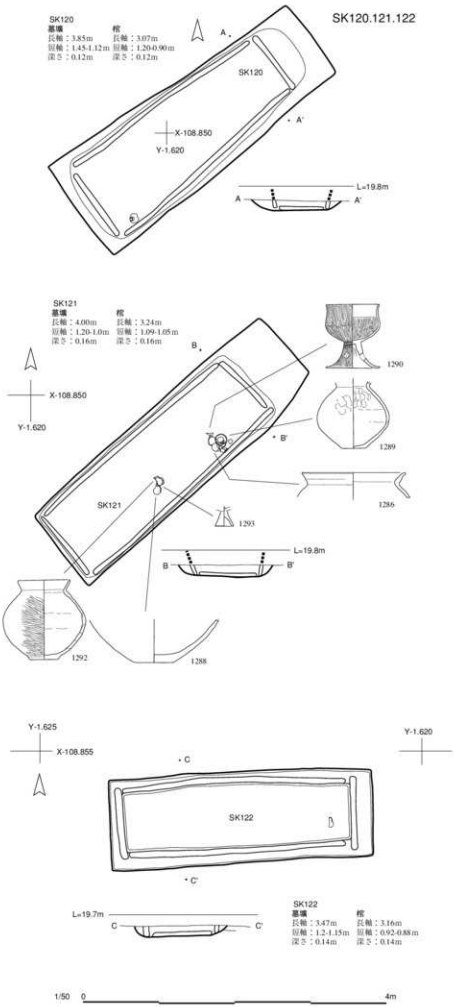

SK102.103.104.105.106.107.111
SK102
基壙
長軸：2.45m
短軸：0.74-0.65m
深さ：0.06m
SK103
基壙
長軸：2.58m
短軸：0.66-0.62m
深さ：0.14m
SK104
基壙
長軸：2.82m
短軸：1.17-1.02m
深さ：0.15m
棺
長軸：2.05m
短軸：0.9-0.8m
深さ：0.15m
SK105
基壙
長軸：2.51m
短軸：1.09-0.76m
深さ：0.17m
棺
長軸：2.35m
短軸：0.95m
深さ：0.17m
SK106
基壙
長軸：3.45m
短軸：0.94-0.9m
深さ：0.13m
棺
長軸：3.16m
短軸：0.75-0.6m
深さ：0.13m
SK107
基壙
長軸：2.76m
短軸：0.9m
深さ：0.15m
棺
長軸：2.6m
短軸：0.7-0.66m
深さ：0.15m
SK111
基壙
長軸：3.25m
短軸：1.0-0.8m
深さ：0.18m
棺
長軸：2.98m
短軸：0.82-0.64m
深さ：0.18m
粘土
Y-1.610
X-108.845
X-108.850
X-108.855
L=19.5m
L=19.7m
L=19.8m
1/50
0
4m

第55図　墓壙4（1/50）

SK108.110.112.116



第56図 墓壙5（1/50）


SK120.121.122
SK120
墓壙
長軸：3.85m
短軸：1.45-1.12m
深さ：0.12m
棺
長軸：3.07m
短軸：1.20-0.90m
深さ：0.12m
A
A'
X-108.850
Y-1.620
L=19.8m
SK121
墓壙
長軸：4.00m
短軸：1.20-1.0m
深さ：0.16m
棺
長軸：3.24m
短軸：1.09-1.05m
深さ：0.16m
B
B'
1290
1289
1286
1293
1292
1288
Y-1.625
X-108.855
Y-1.620
C
C'
SK122
L=19.7m
SK122
墓壙
長軸：3.47m
短軸：1.2-1.15m
深さ：0.14m
棺
長軸：3.16m
短軸：0.92-0.88m
深さ：0.14m
1/50
0
4m

第57図　墓壙6（1/50）

副葬品

棺内より明瞭な副葬品は発見できていない。わずかに土器および土器片が出土した。なお墓壙上および周辺からは、多量な土器を伴う土器集積が存在する場合が見られる。棺内あるいは墓壙内出土の土器にはSK09やSK10などのような小型品を伴うものがあり、祭事用の専用土器である可能性が高い。壺や高杯類が多く、小型品を除くそのほとんどが検出面付近で出土し、明瞭に棺内に据え置かれた状況のものは見られない。

墓壙との関係で、特に注目したのは、墓壙直上付近に据え置かれた土器群の在り方である。この状況を明瞭に留めるものが、SX106やSX107である。SX106は高杯が3点、同一レベルで出土し、SX107は高杯・甕を中心としてやはり直線上に配置されたような状況を留めている。さらにSX102やSX103の在り方を加えると、棺の埋葬後に、高杯や甕類を墓壙の上ないし付近に直線的に配置することが、比較的普遍的に行われていた可能性が指摘できるようである。なおSX102は高杯の上に壺を乗せた状況で検出でき、ここでは器台としての機能が認められる。

第6表　墓壙一覧表

	墓壙 長軸	短軸	深さ(m)	棺 長軸	短軸	深さ(m)	時期
SK06	3.82	0.85-0.75	0.18	3.08	0.75-0.65	0.1	Ⅱ-1c
SK07	3.26	0.9-0.84	0.26	2.98	0.7-0.65	0.24	Ⅰ-1
SK08	3.50	1.65-1.55	0.27	3.07	1.25-1.15	0.23	Ⅰ-1
SK09	4.40	1.25-1.05	0.16	3.71	1.01-0.9	0.14	Ⅰ-2a
SK10	3.85	1.50-1.25	0.15	2.92	1.1-0.82	0.15	Ⅰ-2a
SK11	3.16	0.9	0.16	2.0	0.75	0.15	Ⅰ-2a
SK12	2.92	-	0.17	2.35	-	0.14	Ⅱ-1
SK13	-	1.8-1.1	0.2	-	1.1-0.68	0.15	Ⅰ-2
SK17	3.09	1.05-0.85	0.16	2.85	0.8	0.11	Ⅱ-1
SK18	3.22	1.06-0.95	0.2	2.76	0.75-0.7	0.15	Ⅰ-1
SK19	2.75	1.10-0.96	0.3	2.35	0.7-0.65	0.2	Ⅰ-1
SK20	2.86	1.16-0.9	0.22	2.31	0.65-0.52	0.19	Ⅲ-1
SK21	3.40	1.08-0.98	0.21	3.10	0.7-0.68	0.17	Ⅲ-1
SK22	3.5	1.17-1.06	0.21	2.80	0.85-0.75	0.18	Ⅰ-1
SK23	(2.8)	1.16	0.21	(2.45)	0.7	0.16	Ⅱ-1
SK24	3.08	1.3-1.17	0.2	2.26	0.9-0.82	0.16	Ⅱ-1
SK102	2.45	0.74-0.65	0.06				Ⅲ-2b
SK103	2.58	0.66-0.62	0.14				Ⅱ-2a
SK104	2.82	1.17-1.02	0.15	2.05	0.9-0.8	0.15	Ⅱ-1ab
SK105	2.51	1.09-0.76	0.17	2.35	0.95	0.17	Ⅲ-2a
SK106	3.45	0.94-0.9	0.13	3.16	0.75-0.6	0.13	Ⅱ-1
SK107	2.76	0.9	0.15	2.6	0.7-0.66	0.15	Ⅱ-1
SK108	2.54	1.02-1.0	0.26	2.19	0.95-0.91	0.2	Ⅲ-2c
SK109	2.60	0.85	-				Ⅱ-2
SK110	3.18	0.82	0.15	3.00	0.73	0.15	Ⅲ-2b
SK111	3.25	1.0-0.8	0.18	2.98	0.82-0.64	0.18	Ⅱ-2
SK112	(2.85)	0.84	0.19	(2.75)	0.75	0.19	Ⅲ-2
SK116	3.15	1.06-0.88	0.15	2.95	0.86-0.77	0.15	Ⅱ-2a
SK120	3.85	1.45-1.12	0.12	3.07	1.20-0.90	0.12	Ⅲ-1b
SK121	4.00	1.20-1.0	0.16	3.24	1.09-1.05	0.16	Ⅱ-1b
SK122	3.47	1.2-1.15	0.14	3.16	0.92-0.88	0.14	Ⅲ-1

土器集積

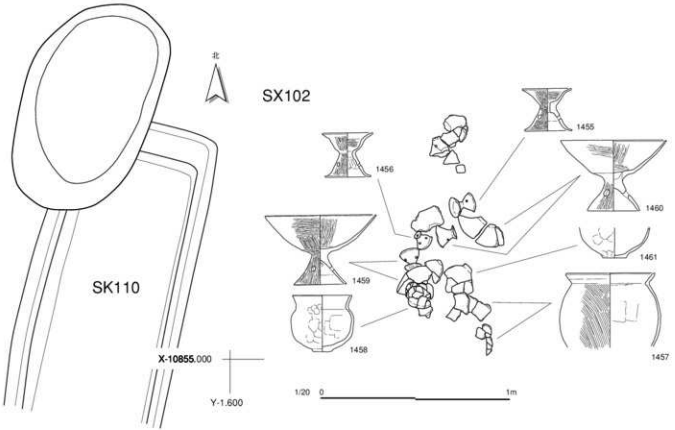
微高地上に展開する墳丘墓上とその周辺で、多量の土器集積が確認できた。19地点の土器集積遺構は大きくA・B・Cの3つに区分できる。

A群（墓壙上集積）

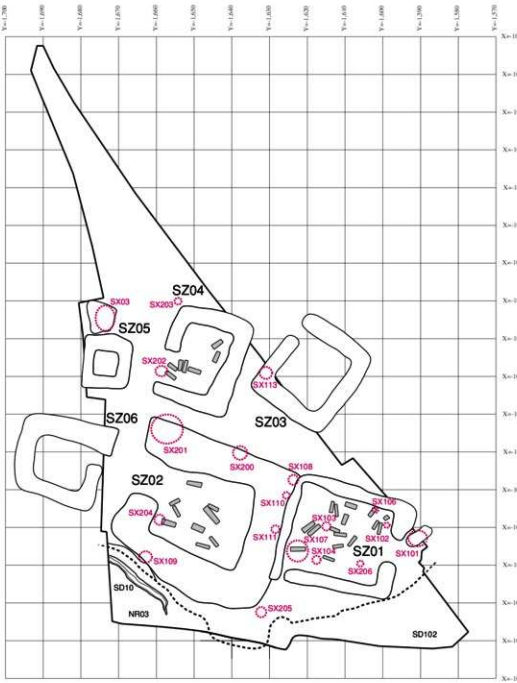
A群としてまとめられるものは、墳丘墓上の主体部と考えられる墓壙上ないしその周辺に集積した土器群である。SX102・SX103・SX104・SX106・SX107・SX202・SX204の7ヶ所。もっとも古く遡る資料としてはSX204が考えられる。総じてSZ01の造営時期と相前後して増加する傾向があり、基本的には川原上層Ⅲ式期に集中して認められる土器集積と考えたい。SX106は明らかにSK108上に配置された高杯群であり、供献土器としての性格が強いが、その他のものは、墓壙周辺に据え置かれた土器群とも考えられる。墓壙と供献土器は、区画内で繰り返し実施された墓前祭の様子を伝えるものでもあるが、前述したようにこれらはその都度、若干の盛り土により墳丘内に埋め込まれたものと推測している。もっとも規模が大きいものはSX107で、これらはその直下に位置するSK122の埋葬に伴って使用された土器である可能性が高い。多くの土器が完全な形のまま出土し、そのまま据え置かれた土器の状況が復原できる。器種には様々なものがあるが、高杯と甕が主体的である。

B群（墳丘内の土器処置場）

B群として整理できるのは、墓壙と直接関係ない場所で、かつ墳丘周辺部に集積された土器群である。SX108・SX110・SX111・SX113・SX200・SX201・SX203・SX205の8ヶ所。A群と比較すると、土器の残存状況が低く、かつ集積度も低い。おそらく墓前祭などに使用した土器を集中して処置した場所と考えられる。したがって集積には型式的にある程度の時間幅が認められる。墳丘墓SZ02周辺に集中する特徴がある。川原上層Ⅰ式期に多くⅡ式期まで存続する。川原上層Ⅲ式をもって土器集積B群からA群への変化が認められる。なおSX206は、墳丘墓SZ01に伴う最終的な祭祀行為に



第58図　SX102

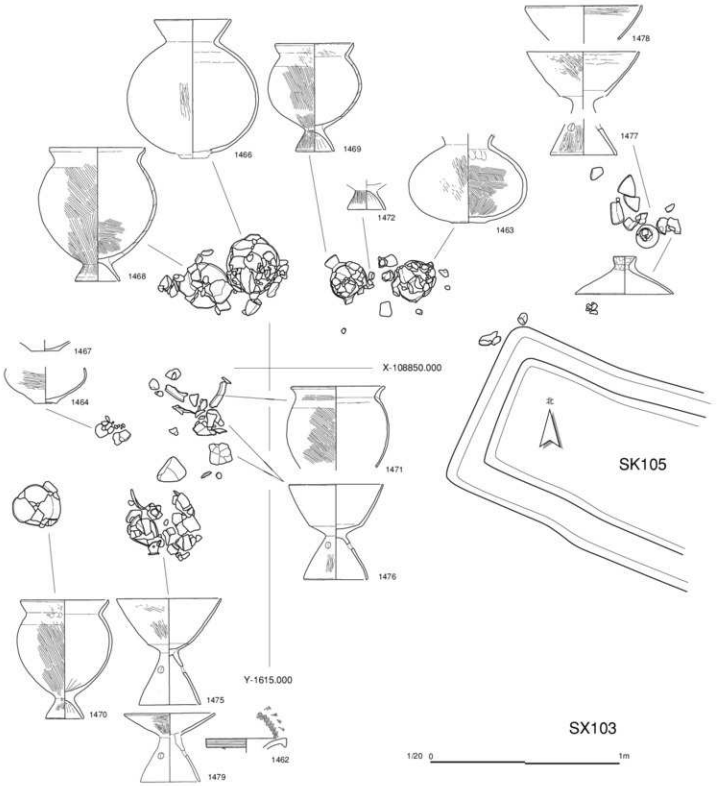


第59図　土器集積位置図（1/1000）

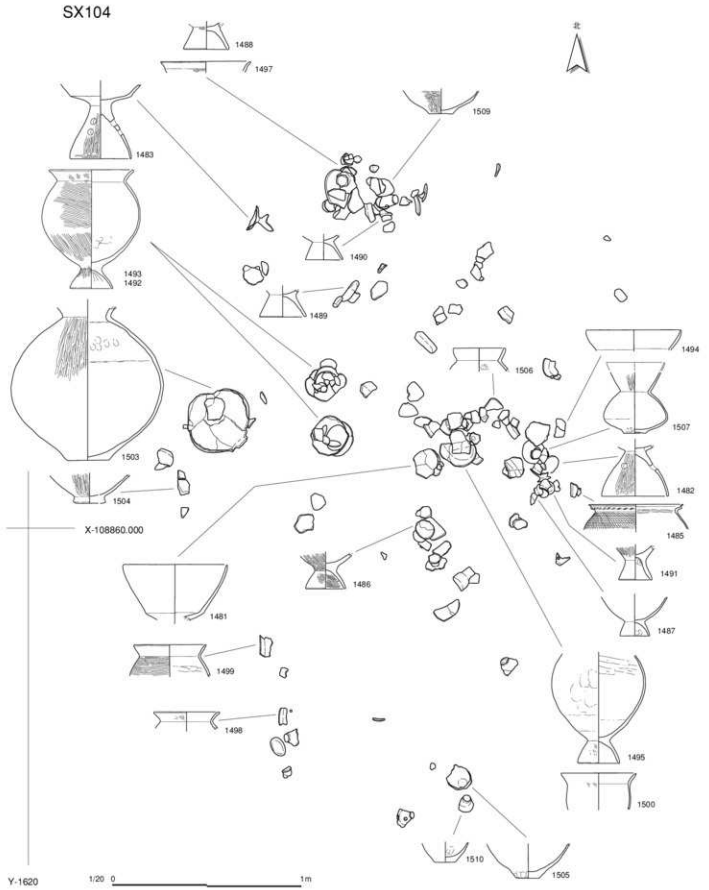
伴って処置された土器群と考えられ、この時期（Ⅳ式期）以降の土器配置はまったく見られない。

C群（特定の土器処置場）

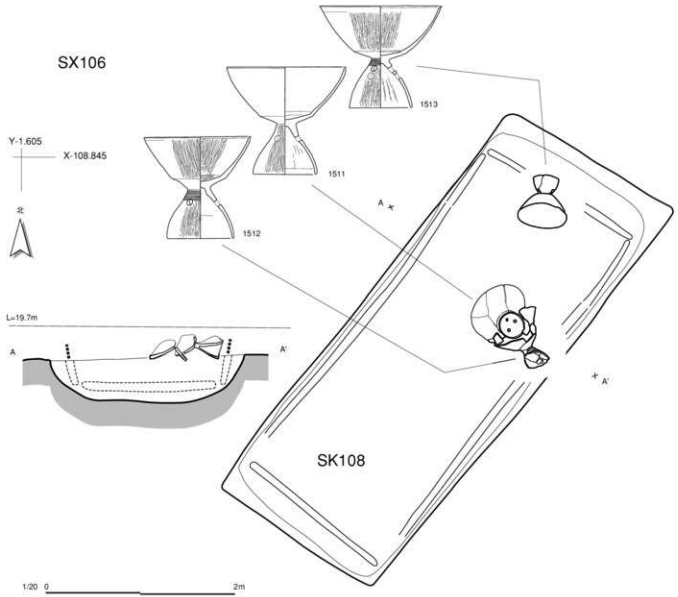
墳丘墓外に設定された土器集積。SX101とSX03に代表される。まずSX101は墳丘墓SZ01東開口部外側に設置された不定形土坑で、その内部に多量の土器が集積されていた。北東部が調査区外に位置するために全体の規模は不明であるが、長軸で4m以上短軸2.5mを測る。深さは0.3mほどの皿状の落ち込みとなる。その内部には土器がまさに折り重なるように堆積していた。出土した土器は、完全な形状を留めたものが多いが、小破片を含めた資料も多量に含まれる。出土した土器は川原上層Ⅲ式2段階を中心にしており、最上層には3段階の資料が混在する。SX03は方形壇状遺構としたSZ05北側に見られる大型の不定形落ち込み状遺構で、南北9m東西7mほどの窪地状（深さ0.15m）を呈する。土坑西半分に土器が集積しており、中・小型


1466
1469
1478
1477
1468
1472
1463
1467
1464
X-108850.000
1471
北
SK105
1476
Y-1615.000
1470
1475
1462
1479
SX103
1/20 0
1m

第60図　SX103


SX104
北
1488
1497
1509
1483
1490
1493
1492
1489
1494
1506
1507
1503
1482
1504
1485
X-108860.000
1491
1486
1487
1481
1499
1498
1495
1500
1510
1505
Y-1620
1/20
0
1m

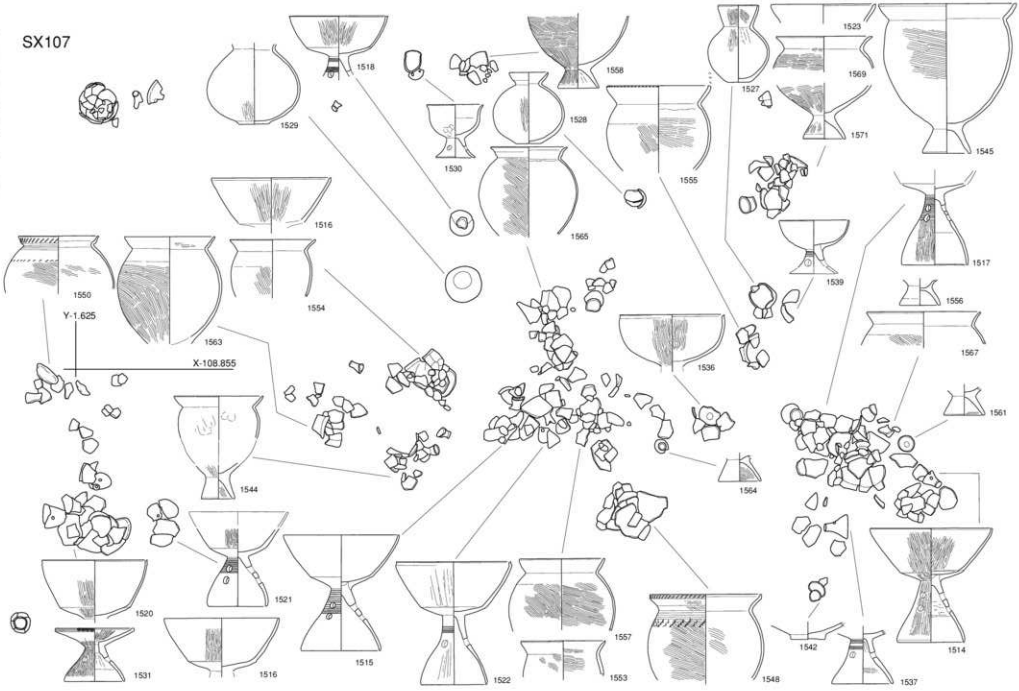
第61図　SX104

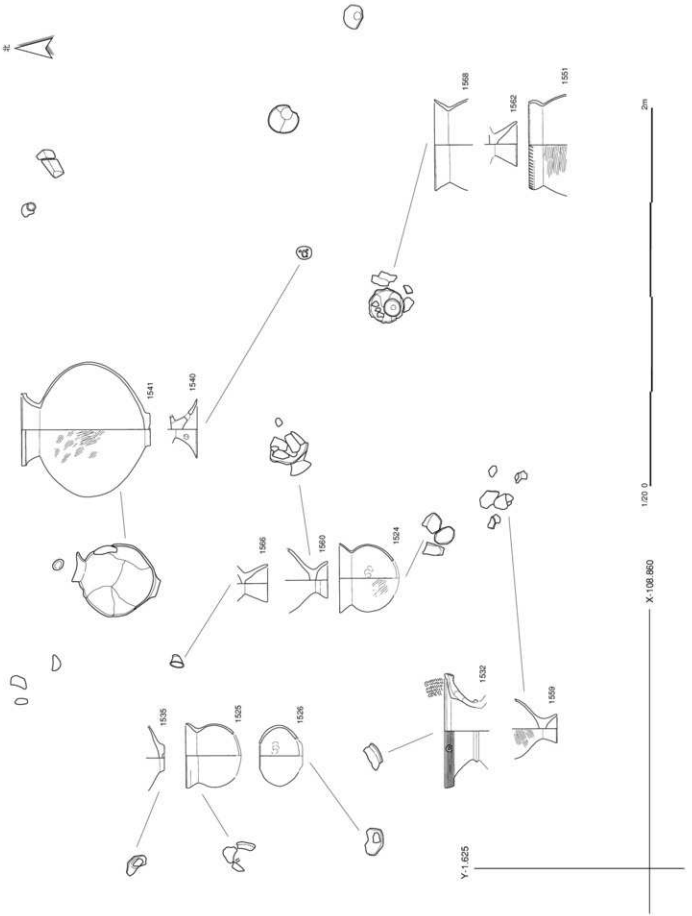


第62図　SX106

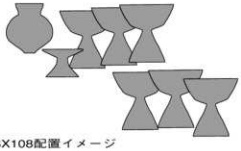
品によって構成される。川原上層Ⅱ式2段階からⅢ式1段階への過渡的な資料が多い。以上のようにSX101はおそらくSZ01の最終段階の埋葬行為に伴うものであり、祭場で使用した土器を一括処置(複数回)した場所であったと思われる。一方でSX03はSZ01での埋葬行為の前半段階に伴うもので、祭場で使用した土器を一括処置した場所であったと考えられる。つまりSZ01の埋葬に伴い設定された特定の土器処置場であり、SX03の後、SX101へと処置場が移動したものと想定したい。SX03が方形墳状遺構に近接する点から、SZ01の初段階の埋葬、つまり墳丘墓SZ01の中心埋葬には方形墳状遺構が積極的に使用されていたことを窺わせるものとも思われる。

さて他にSX109がある。所在する場所はSZ02の南周溝の南掘形周辺であるが、時期的に川原上層Ⅲ式2段階に所属する。おそらく大溝(NR03)内に掘削された、SD10等の護岸施設の整備に関連して行われた祭祀場あるいは処置場と推測したい。1m範囲内に土器が列状をなして据え置かれた状況で出土している。

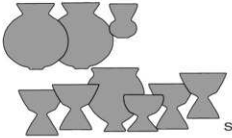

SX107
Y-1.625
X-108.855
1518
1529
1558
1528
1530
1565
1555
1527
1523
1569
1571
1545
1516
1550
1554
1563
1539
1517
1556
1567
1536
1561
1564
1544
1520
1521
1531
1516
1515
1522
1557
1553
1548
1542
1537
1514


北
1568
1562
1551
1541
1540
1566
1560
1524
1532
1559
1535
1525
1536
1:20.0
2m
X:108.860
Y:1.625

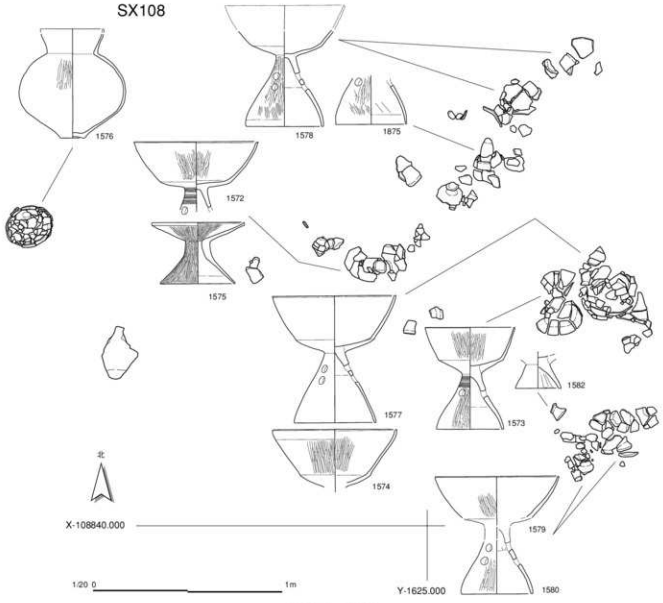
第63図　SX107



SX108配置イメージ

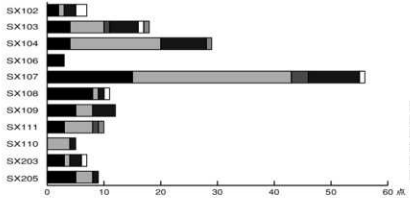


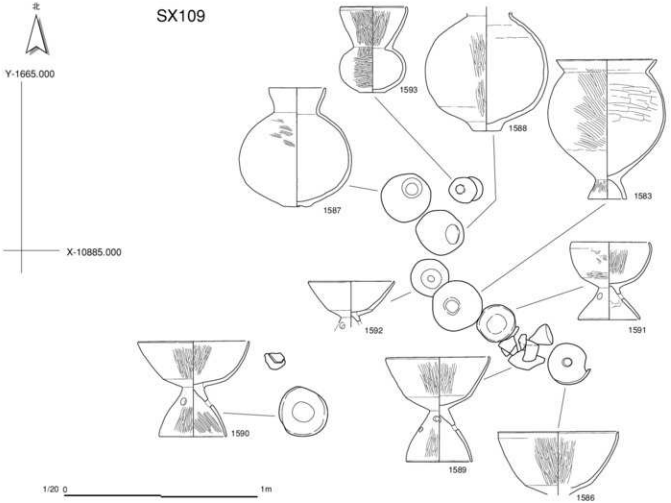
SX109配置イメージ



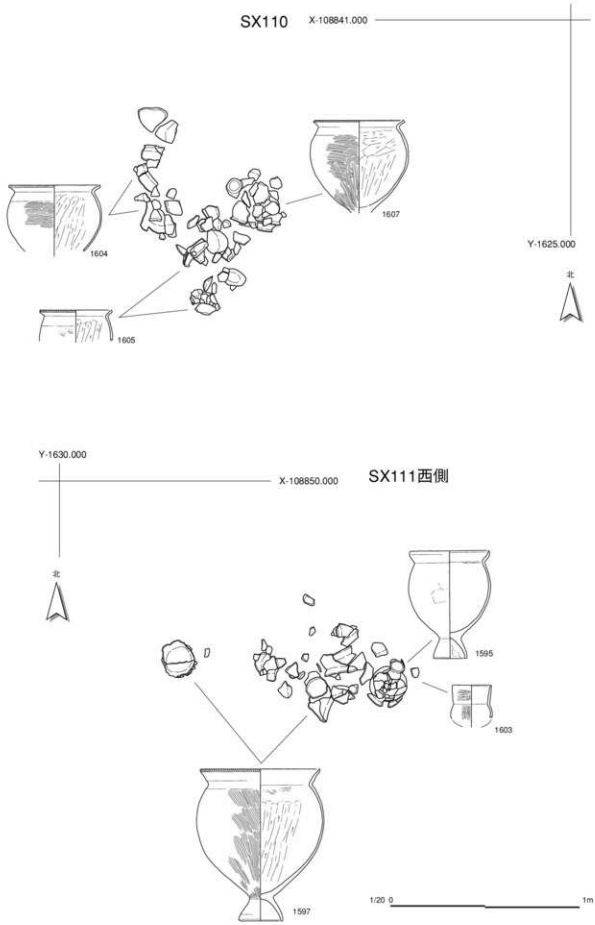
第64図　SX108

第7表　遺物集積 組成表





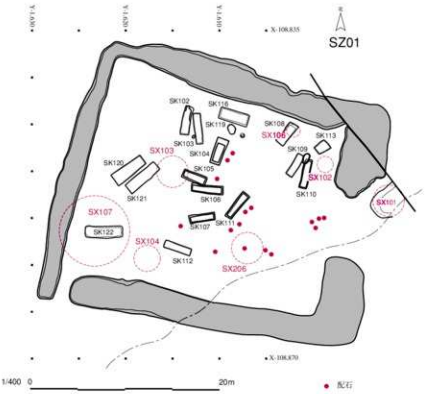
第65図　SX109



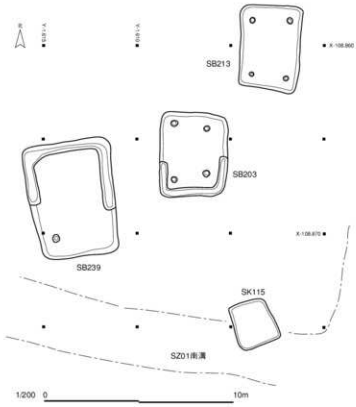
第66図　SX110・SX111西

配石遺構

墳丘墓SZ01の区画内には、人頭大前後の河原石が数10ヶ所点在する。墳丘墓SZ01の区画内において、南側の開口部周辺では墓壙が構築された形跡は存在しない。また土器集積も見られない。その一方で中央部から北東および南西にかけては、広く墓壙が展開し、また土器集積も見られる。ここで問題にした河原石の配石は、埋葬主体の埋納場所とは異なり、開口部西側の広場的な空間に限定して存在する。なお調査区周辺では河原石を産しないため、人為的に持ち込まれたものである事は言うまでもない。このように配石が墓壙と重複する事例は見られないことから、墳丘墓内の広場的な空間で執り行われたであろう何らかの祭事に利用された道具の一つであった可能性を推測しておきたい。



第67図　配石



第68図　SZ01下層の竪穴状遺構

●●竪穴状遺構ほか●●

竪穴状遺構

川原上層Ⅰ式期1段階に限って竪穴状遺構が3ヶ所確認できた。その他、微高地上には川原上層Ⅰ式2段階から Ⅲ式期の中では竪穴住居等は存在しない。検出できた遺構はSB203・SB213・SB239の3ヶ所で、ちょうど墳丘墓SZ01下層にあたる。竪穴状遺構3軒の配置には共通した特徴が見られる。まずその軸線の方向性であるが、ほぼ3軒とも同一の方向性をもち、それは同時期の墳丘墓であるSZ05と同様な南北方向を意識したものとなる。規模はSB203が4.4m×3.6mで、SB213が4.3m×3.3m、SB239が6m×4.6mを測る。SB203とSB213は同じ大きさと方向性をもつ遺構といえよう。また内部には四柱穴も確認できる。一方でSB239は大型で、柱穴は不明瞭である。なおこれら竪穴状遺構には明瞭な炉跡は見られない。検出面からの深さは約0.2m前後であった。遺構内部からの出土遺物は極めて少ない。日常的な生活空間である、居住のための施設と考える積極的な根拠はほとんど認められない。竪穴状遺構は墳丘墓SZ02の東側、旧河道に面して営まれており、遺構配置状況等から墳丘墓の造営に伴い設定された、墓域内の特殊な施設と推測できる。

土坑

竪穴状遺構が営まれた墳丘墓SZ02の東側の空間に、川原上層Ⅰ式2段階に所属する土坑を2基確認することができた。SK115は竪穴状遺構の南側で、旧河道に接する斜面上に位置する。2.2×2.4mの方形を呈し、深さ0.3mを測る。箱状に掘削され、内部は明瞭な遺構はなく、平坦面をもつ。不定形土坑SK800が位置する場所は、SZ01の西北コーナー部下層にあたる。長さ2.7mで深さ0.5mを測る。両者とも結果的にSZ01の周溝内、西北と南東コーナーに重複する位置に掘削されている。

旧河道と大溝

川原上層式段階に設定された墓域は、北側は緩やかな緩斜面となる湿地帯で区切られ、南側は谷地形状の旧河道(SD102)と大溝(NR03)によって区画されていた。さらに旧河道と大溝が合流する地点、微高地端には突出部状の施設が復原できる。

旧河道(SD102・SD103)

調査区東端には大きく落ち込む谷地形状の旧流路跡が検出できた。北東から南西に向かって流れる河道で、この方向は矢作川低地部に存在する各小河川の方向性と一致する。数度にわたって微高地を削り、遺構を破壊しているものの、川原上層式段階には、河道として機能していた可能性が高い。墓域が設定された微高地から河道底まではおおむね3m前後の比高差が存在する。南側から見ると、墓域は台地端に展開しているような景観が想定できる。旧河道内からは若干の土器が出土しているのみである。微高地南端部も含めて、明瞭な遺構は確認できていない。

大溝(NR03)

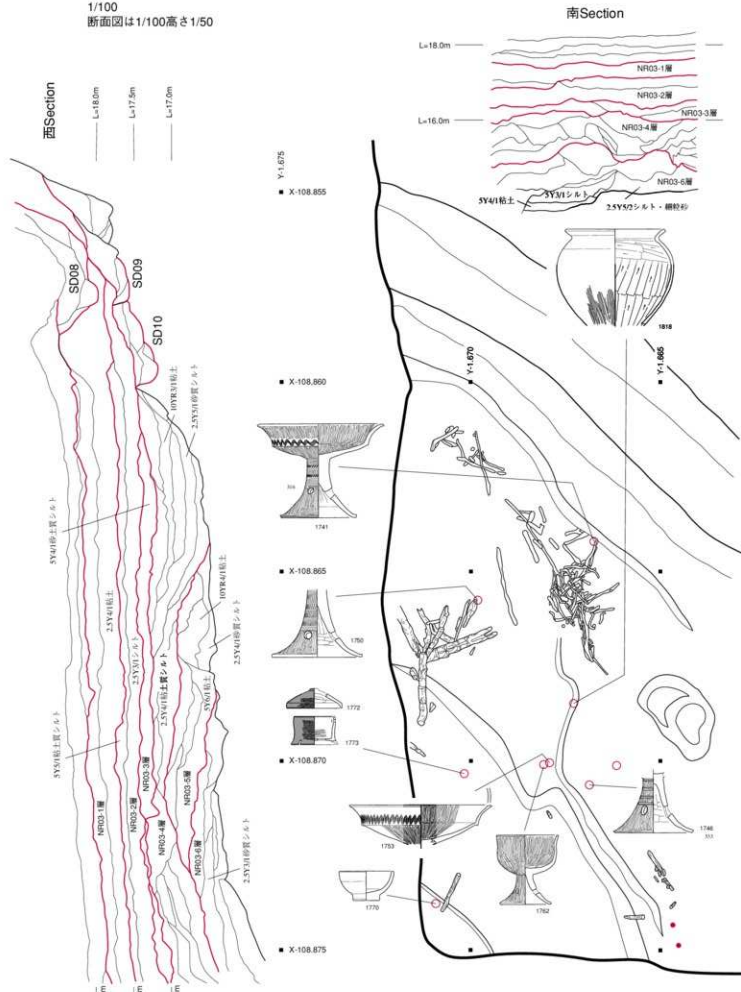
北西から南東へ向かって流れ、旧河道と合流する。この流れの方向性は、西側に存在する碧海台地に刻まれた谷地形からのものと推測され、谷からの小河川の氾濫を利用した、人為的な遺構である可能性が極めて高い。大溝(NR03)は第1層から第6層に大きく区分でき、さらに第3層と第4層の間に画期を想定できる。また第4層と第5・6層の間には大溝内に各種の施設が整えられた。第3層を含め自然堆積によるものが多く、2層からの明瞭な遺構はほとんど見られない。ただ微高地端に数度となく掘削・整備された溝が存在する。つまり川原上層Ⅲ式2段階をもって大溝の本来の機能がなくなり、その役割は終焉したものと考えられる。それは同時に微高地上での墓域の終焉でもある。

第3層は川原上層Ⅲ式2段階に所属し、この段階には微高地端にSD10が掘削される。この溝に沿って土器集積SX109が存在する。第4層は川原上層Ⅱ式2段階からⅢ式1段階に所属し、第5層は川原上層Ⅱ式1段階に堆積したものと考えられる。4層には幾筋の細粒砂層が堆積し、激しい流水が想定できる。そのためか護岸には杭列が存在し、その東南端には径6mほどの大きな落ち込みが存在する(第69図)。この周辺部には杭列や網代状(網代部分)の植物遺体が見られ、流水を堰止め流れを変化させる施設が構築された。落ち込み遺構は流路の変更に伴う溜りであろう。これらの施設は微高地南端に存在する突出部を保護し、流路を変更させる施設と思われる。

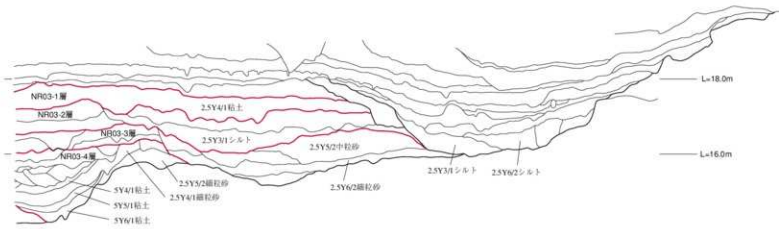
弥生時代後期中葉段階には墓域が拡大し、SZ01が造営されはじめる。その後に大溝の再整備が執り行われたものと思われる。多くの木製品が第5層上位から第4層にかけて出土している。さらに建築部材や木製耕具類と考えられる遺物も共伴し、墓域を含めた周辺地域で、活発な土木工事が積極的に推し進められたことが推測できる。

突出部

微高地南端に東西16m南北8mの方形の突出部が存在した。突出部は旧河道と大溝が交わる地点にあたり、突出部の東側は急激な崖状を呈する。この地点からは弥生中期に所属する土器や木製品が出土しており、弥生時代中期末葉から特殊な空間として活用された可能性が高い。一方で突出部西側には溝SD10をはじめ、数度にわたる溝が掘削されている。また護岸施設等もあり、川原上層Ⅰ式期に至りこの突出部が整備され、特殊な空間として利用されていたと思われる。なお川原上層Ⅱ式2段階に所属する遺物集積SX205は、突出部の北東コーナーに位置しており、第4層に伴って実施されはじめた、大溝の再整備との関連で考えておく必要がある。



第69図　大溝（NR03）1/100


NR03-1層
NR03-2層
NR03-3層
NR03-4層
2.5Y4/1粘土
2.5Y3/1シルト
2.5Y5/2中粒砂
2.5Y3/1シルト
2.5Y6/2シルト
L=18.0m
L=16.0m
5Y4/1粘土
5Y5/1粘土
5Y6/1粘土
2.5Y5/2細粒砂
2.5Y4/1細粒砂
2.5Y6/2細粒砂

北
1/100
0
10m
Y-1,650
Y-1,645
Y-1,640
Y-1,635
X-108,860
X-108,865
X-108,870
杭
X-108,875

遺物

土器

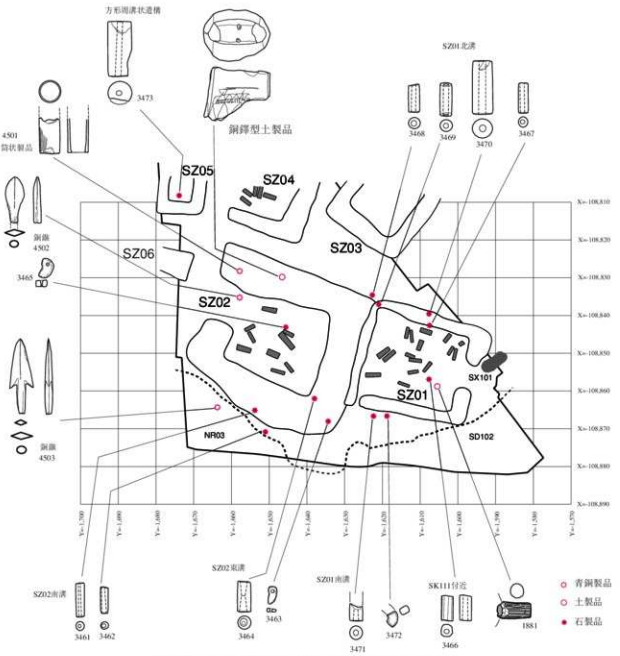
弥生時代後期から終末期にかけて極めて良好な一括資料が見られる。これらは墳丘墓関連遺構と大溝出土遺物に大別できる。墳丘墓では前述したような土器集積資料が各地点で発見でき、比較的まとまった資料を得ることが出来た。特に墳丘墓SZ01・SZ02には土器集積が多く見られ、これらの資料を中心にして標識資料を抽出することができる。墳丘墓SZ02では、周溝内に比較的まとまって土器の出土が見られた。その内で、北周溝にはSX201とSX200の二ヶ所に土器集積が存在する。両者は高杯類が主体となる組成であるが、これは総じて川原上層Ⅰ式期の特徴でもある。周溝内土器群と比べて、特に赤色顔料を塗布した加飾品が多い。SZ02関連遺構では台付甕の出土が極めて少ない。その反面でSX204には台付甕が多く見られ対照的な在り方を示す。

墳丘墓SZ01では、周溝内から出土した土器は比較的少なく、逆に区画内に多くの土器集積が存在する。北周溝では、加飾された壺(パレス壺を含む)を中心にした壺類の出土が見られ、あるいは墳丘裾部に配置されていた可能性も考えられる。なお区画内に見られる土器集積は、墓壙に伴うものであるが、高杯類を中心とした組成が認められる。また大溝に関しては特に第5層からの土器出土が多く、これらが墳丘墓出土資料を補完する資料となり、結果的に弥生時代後期から終末期まで、ほぼ良好な土器群を提示することが可能となった。この点に関してはあらためて川原上層式として付論にて整理しておいたので参照していただきたい。

ところで特筆すべき土器としては、まず大溝第5層から出土した1773合子形土器がある。また蓋の一部と思われる資料も近接して発見された。外面には赤色顔料が塗布されており、合子身の脚部は欠損していた。注目されるのは合子底部に焼成後の穿孔が見られる点である。西春日井郡清洲町の朝日遺跡においても、墳丘墓から合子が出土しており、川原遺跡の事例と共通点が指摘できよう。さらに小型直口鉢の出土に注目する必要がある。まず、小型鉢1239であるが、片口を有する小型の鉢で、内外面は丁寧なミガキを施す。外面には煤状の炭化物が全体に薄く付着し、内面には部分的に赤色顔料の痕跡が認められた。科学的な分析結果からこの赤色顔料は朱であるとの結論を得た。出土地点がSK102上に位置し、朱付着土器として興味深い資料と言えよう。これに類似する小型直口鉢が、川原遺跡では多量に出土している。特にSZ04開口部付近に存在するSX202では、折り重なるようにして10数点が出土し、小型鉢がある特殊な用途として使用されていたものと考えられる。これらは特に川原上層Ⅲ式期前半に集中して用いられた。

その他、墳丘墓SZ02北溝から銅鐸型土製品1点が出土している。

第70図　朱付着の小型片口鉢1/4



第71図　石製品・金属製品・土製品出土地点（1/1000）

石製品

勾玉2点・管玉10点・不明石製品1点。管玉は緑色凝灰岩で、墳丘墓SZ01・SZ02に集中して出土している。SZ01では3ヶ所で発見でき、2点一組の様相を呈する。特定遺構に伴う状況は確認できないが、墳丘上では唯一、SK111付近で管玉1点確認した。面取がそのまま残る形状のものである。墳丘墓SZ02からは管玉3点と勾玉2点が出土している。勾玉は小型品で翡翠製、管玉はSZ01出土品に比べて細身の緑色凝灰岩製である。南周溝付近において発見でき、SK17付近から勾玉1点が出土している。その他では方形壇状遺構であるSZ05上で、やや大型の管玉が1点出土した。

SZ02及びその周辺出土管玉と、SZ01周辺出土管玉を比べると、総じて後者の資料が径が大きく大型化している点が指摘できる。

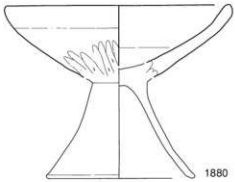
なお管玉の蛍光X線分析の結果によると、川原遺跡出土の管玉はほぼ同一の分析組成を示した。また比較検討用に実施した弥生時代中期から後期の資料を加味すると、おおむね同様な一群の資料となり、濃尾平野と川原遺跡周辺に使用された管玉が、ある特定産地(現状では出雲花仙山や福井産とは異なる結果を得た)からの石材で製作されている可能性が高くなってきた。今後の調査成果に注目したい。

金属製品

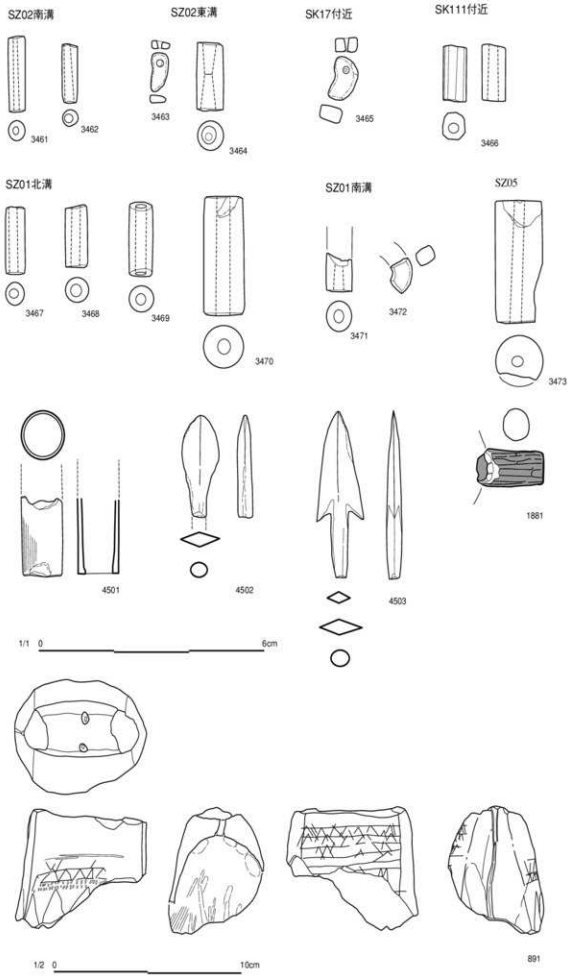
銅鏃2点と筒状銅製品1点。銅鏃はSZ02西開口部付近で1点と、SZ02南側のNR03斜面で1点出土した。両者は型式が異なり、前者は鏑を有するも鏃身が短い楕円形状を呈するもので、後者はかえりをもち三角形状を呈するものである。筒状銅製品はSZ02北溝西端部で発見できた。上部が欠損し、残存部長が18mm径11mmを測る。厚さは1.5mmと薄い。土器集積SX201に含まれるものと考えると川原上層Ⅰ式2段階に所属する銅製品となる。

土製品

墳丘墓SZ02北溝底部にて銅鐸型土製品が1点出土した。残存長さ6.5cm高さ5.5cmで下半部と紐が欠損する。鐸身には両面に繊細なヘラ描きが見られ、横線と鋸歯文を組合せる。出土地点が土器集積SX200に近接しており、川原上層Ⅰ式2段階でも古相に所属する可能性が高い。その他、墳丘墓SZ01上で不明土製品である1881把手状土製品が出土している。外面全体に赤色顔料が塗布されている精製品である。1880は椀形高杯の杯部の破片で、口縁から下方に向かって一条の墨書描が見られる。出土した場所は大溝NR03第5層であり、形態的な特徴から見ても川原上層Ⅰ式2段階に所属するものと思われる。なお付着物の分析は第3分冊を参照されたい。



第72図　墨書土器（1/4）



第73図　石製品・金属製品・土製品

木製品

本節では、弥生後期～古墳前期の木製品について記述する。出土遺構はNR01・03、SD08・10で、特にNR03は、第3～6層のそれぞれの層位から出土している。所属時期は古い方から、NR03第6層－川原上層Ⅰ式1～2段階、同第5層－川原上層Ⅱ式1段階、同第3・4層とSX115およびSD10－川原上層Ⅲ式1～2段階、NR01・SD08－松河戸Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階併行期である。ここでは、まず遺構単位で個々の器種について説明し、付編において時期ごとの木製品群についての考察をおこなうこととしたい。

NR03　4003は直柄広鍬の未成品。頭部を丸く仕上げ、隆起部は低く、明確な段を有する。柄穴は穿孔されておらず、隆起部の整形も完了していない。『木器集成図録　近畿原始篇』での分類では、広鍬ⅡA式に属する[4]。残存長は29.3cm、刃部幅は18.7cmで、隆起部での厚さは3.3cmである。樹種はアカガシ亜属の柾目材で、第5層出土。

4004・4005は曲柄鍬。いずれも肩部より下を欠損しているため、平鍬か又鍬かの断定は難しいが、4004はほぼ平鍬と考えて差し支えなかろう。両者ともに軸部上端付近に、膨柄との結合をおこなうための深いV字状の溝を切っている。筆者の分類によるD類の伊勢湾型曲柄鍬[5]である。軸部の長さ・幅・厚みは、4004で11.4・3.8・2.7(cm)、4005が15.0・3.3・2.2(cm)で、4004に比べて4005の方がいくぶん華奢な印象をうける。出土層位・樹種は4004が第6層でアカガシ亜属の柾目材、4005は第4層でコナラ節の柾目材と、同一器種ではあるが、樹種が異なっている。4004は所属時期が川原上層Ⅰ式1～2段階で、これまで出土している伊勢湾型曲柄鍬では最も古い。

4011・4012は、これら曲柄鍬に装着する膨柄である。4011は台部先端と、柄の一部を欠損するのに対し、4012はほぼ完形。いずれも樹種はサカキの枝分かれした部分を用い、柄の下端部を尖らせる。4011は柄の残存長が82.0cmで直径は4.0cm、台部の残存長は17.7cmで最大幅は4.0cm。4012は柄の全長が96.5cmで直径が3.1cm、台部は全長19.2cmで最大幅が4.6cm。4011は第5層、4012は第3層からの出土。

4008～4010は掘り棒。4008は柄から身にいたるまで、厚さがほぼ一定で、しかも身の断面形が原材段階と同様に二等辺三角形を呈するのに対し、4009・4010では、柄に対して身の厚みがあきらかに薄くなり、身の断面形も厚みがほぼ一定ないしは凸レンズ状に両端が薄くなっていることから、4008は未成品で、4009・4010がその完成品と考えている。4008は全長が111.0cm、身部の長さは50.0cm、幅は10.2cmで、最大厚は3.1cmである。4009では身部長が48.0cm、幅は6.9cm、最大厚は2.3cmである。いずれも一般的な一木鋤に比べると、身が長く幅狭で、極端なまでに肩、柄の先端には把手はつかない点を特徴とする。『木器集成図録』の分類では、柄がⅠa型、身はなで肩2種に属し、土に踏み込むための足掛けをもたないことから「掘り棒」に分類されている。4008は第6層、4009は第5層で、4010はNR03の北肩付近に築かれたシガラミ状遺構SX115からの出土である。樹種はいずれもアカガシ亜属の柾目材を用いる。

4013はコナラ節の柾目材。残存長288.4cm、最大幅13.0cm、最大厚1.9cmと長大で、断面がミカンの房の断面に似た形状の、いわゆるミカン割り材である。樹種や幅から、曲柄平鍬を製作するための板材であった可能性が高い。第4層出土。

4014～4016は梯子。いずれも第5層で、同じグリッドから集中して出土している。樹種は4014がクリの板目材で4015・4016はヤマグワの芯持ち材を用いる。4014は全長173.0cm、最大幅24.2cm、最大厚10.0cmと幅広で、上・下端とも平坦に仕上げる。ステップは5段。4015・4016はともに下端を斜めに尖らせる。4015は先端が二股状に分かれ、ステップは4段。4016は上端は幅広で平坦。ス

4）奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録　近畿原始篇(解説)』
5）堆上　昇 2000『東海系曲柄鍬再論』『考古学フォーラム』12　考古学フォーラム

テップは上端を含めて3段。

4017・4018は柱材と考えられる。いずれも芯持ち材で、第5層より出土。4017は上端が二股状に分かれ、残存長は141.5cm、最大径27.6cm。4018は上端を欠損し、下端は斜めに尖らせている。残存長112.1cm、最大径20.0cmである。

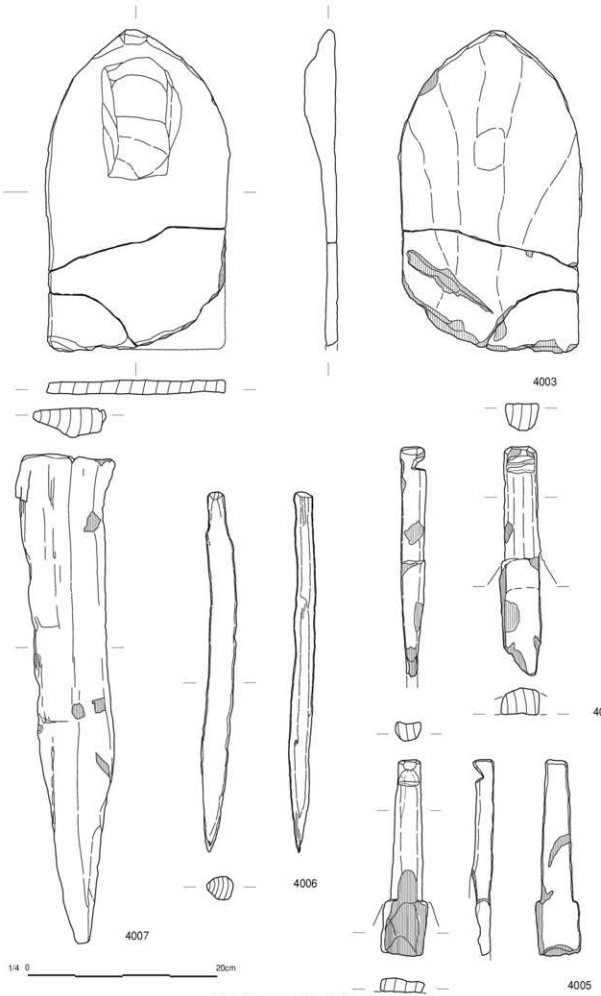
4006・4007は用途不明品。4006は下端を尖らせた棒状の部材。上端は別材とのホゾ結合のために、段を設けて若干細くする。全長35.8cm、最大幅3.8cm、最大厚2.3cm、第6層出土。4007は幅広で、中央から下を尖らせた矢板状の板材。全長は48.6cm、最大幅10.0cm、最大厚2.9cm、第5層出土。

その他の遺構　4019はSD10出土の曲柄平鍬未成品。すでに軸部を作り出しているが、断面は台形を呈し、未だカマボコ形には至っていない。肩部の平面形もまだ直角に近いが、側面からみると、伊勢湾形曲柄鍬の特徴である、肩部から刃部上半にかけての削り込みが認められる。刃部の幅が上半部から下端にかけてほぼ一定であることから筆者分類の平鍬Ⅰ類になることはほぼ間違いない。残存長は60.0cm、刃部最大幅は13.8cm、軸部長は13.6cm、軸部最大幅は6.5cm、軸部最大厚は4.5cmである。樹種はコナラ節の柾目材。

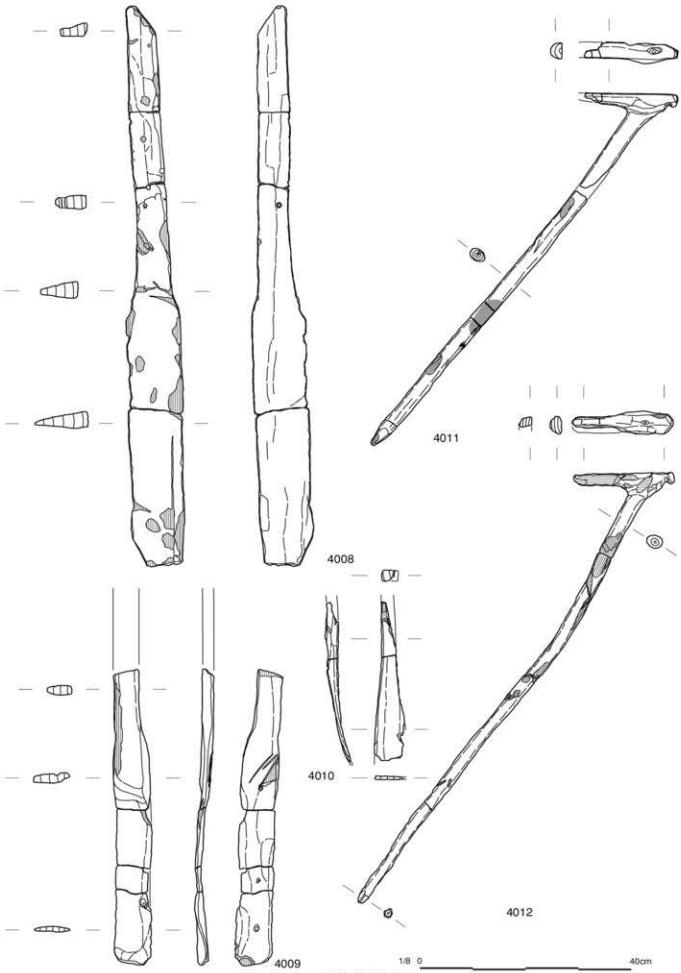
4020・4021はNR01出土。4020は細い棒状の把手がついた、ほぼ正方形の板である。片面はほぼ平坦で、もう片面には段がつく。平坦な方の面には、細かな刃物による傷が多数みられることから、何らかの製作に際して用いられた作業台であろう。残存長は26.0cmで、台の部分は14.0×12.2×4.5cm、柄は残存長が11.0cm、幅は3.2cmで、厚さは1.8cm。樹種はスギの板目材。

4021は次に述べる4022と同様に、筑状弦楽器の頭部にあたる。残存長は18.7cmで下半部を欠損する。残存する下端付近で幅4.2cm、上端付近は5.0cmと、上に向かって幅広となり、上端部は丸みを帯びた三角形状となる。側面形でも下端から上端にかけて厚みを増し、上端部付近では厚さ2.0cmをはかって、そこから上へは斜めに面取りを施す。断面は低い二等辺三角形を呈する。上端部から約3cm下には、断面三角形の斜面側を、横方向に径0.4cmの穿孔を施し、そこに細い棒を通す。断面三角形の底辺にあたる平坦面には、横2.6cm、縦0.9cmの長楕円形に穴を開け、横方向の穿孔とつながって、前述の棒がみえるようになっている。平坦面には、楕円形の穴より約1cm下に、横方向に数条の浅い溝状の痕跡が残る。樹種はスギの柾目材。4022はSD08出土。同じく筑状弦楽器の下半部で、頭部を欠損する。残存長は23.5cm、最大幅は6.1cm。残存する上端部付近の幅は4.1cm、厚さは2.0cm。下端部には5ヶ所の突起の痕跡が残る。断面形は上端部から中央付近にかけて、低い二等辺三角形を呈し、そこから下へは幅広の面取りを施す。樹種はスギの柾目材。4021の穿孔部と4022の突起部には5本の弦を掛け、穿孔部下の溝状痕跡と、4022の平坦面には琴柱を置いたと考えられる。笠原潔氏によると、頭部付近の穿孔形態には5種類あり、本例はe類とされる。滋賀県野洲郡野洲町の下三宅東遺跡、千葉県木更津市の菅生遺跡で同様の形態の筑状弦楽器が出土している[6]。

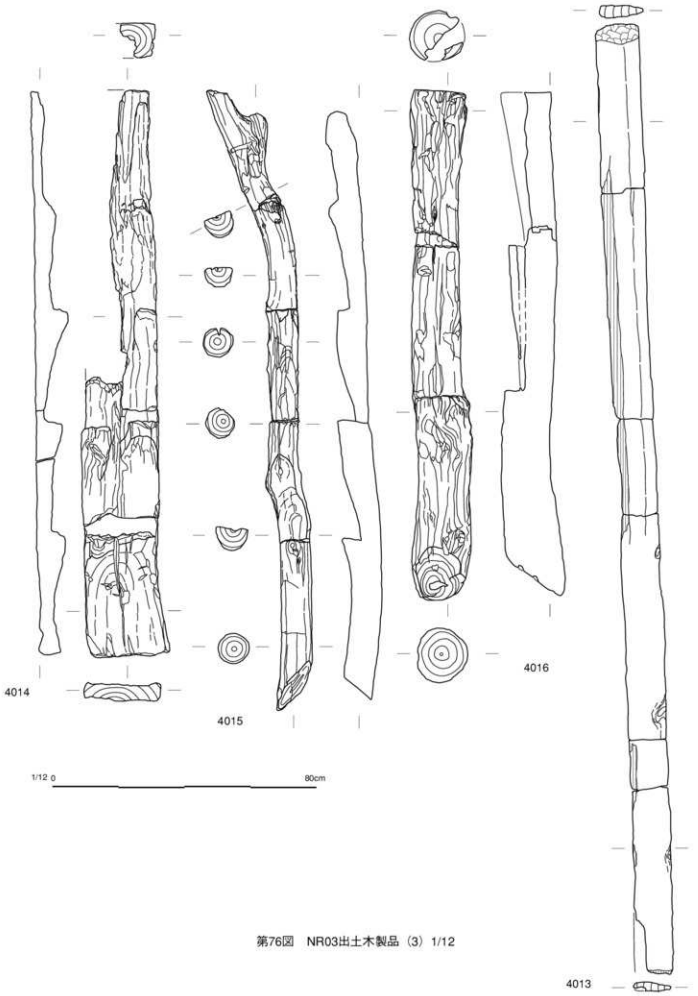
6）笠原　潔2000「溝咋遺跡出土の『筑状弦楽器』について」『溝咋遺跡（その1・2）』（財）大阪府文化財調査研究センター



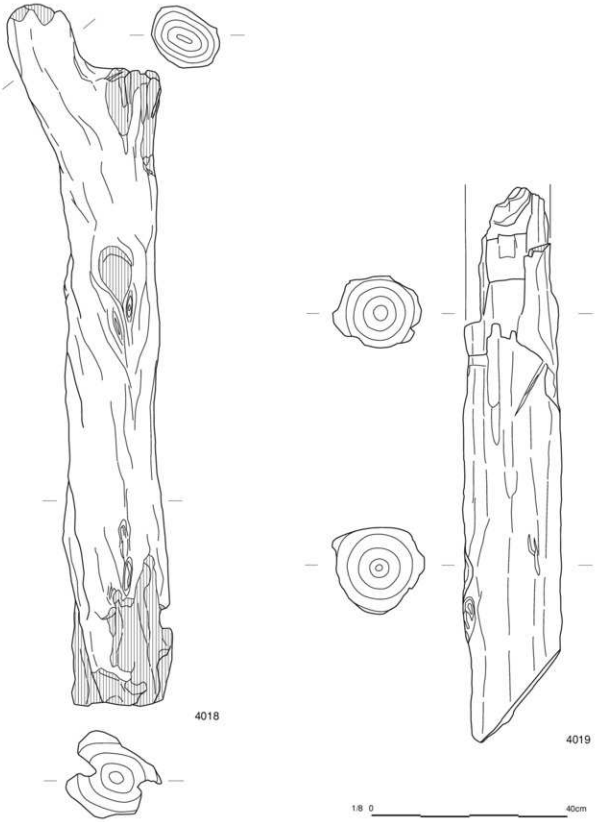
第74図　NR03出土木製品（1）1/4



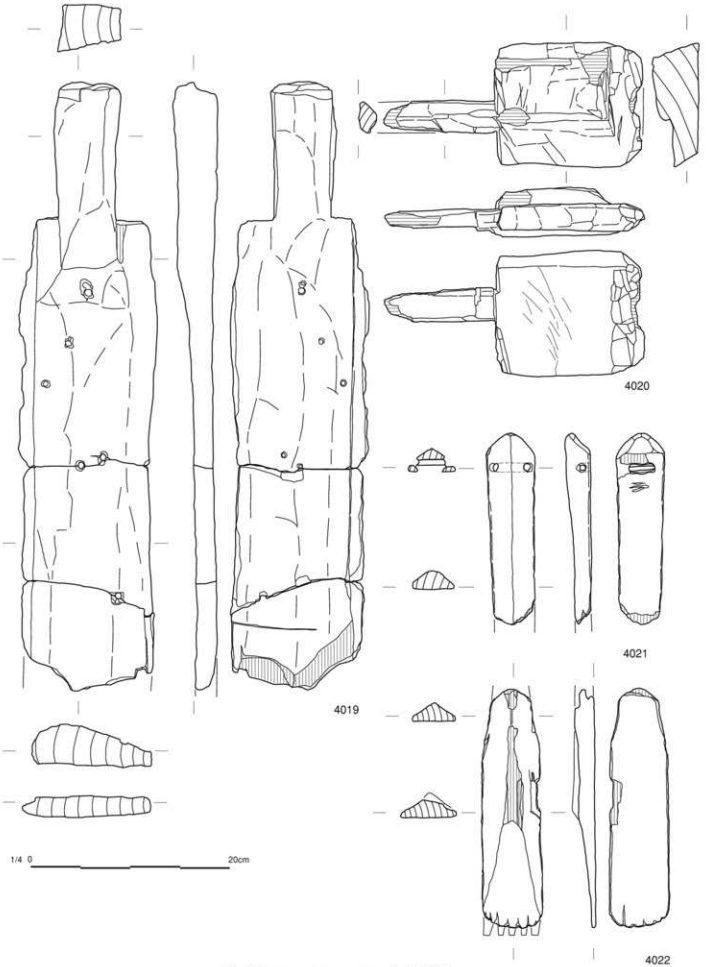
第75図　NR03出土木製品（2）1/8



第76図　NR03出土木製品（3）1/12



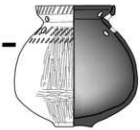
第77図　NR03出土木製品（4）1/8



第78図　NR01・SD08・SD10出土木製品　1/4

Ⅳ

古墳時代中期



Ⅳ期の遺構

遺跡が立地する微高地上にあたる97BC区の東側からは、方墳、竪穴住居、掘立柱建物が展開する墓域が、また、調査区南側からは、この区域を区画する溝が、それぞれ検出された。そしてこれらの遺構が終息した後は、遺構の数は減少し、溝や土坑が散発的に展開する程度である。

竪穴住居

いずれも、掘形は良好に検出し得たが、柱穴は容易に見つけることができなかった。

SB01　大部分は撹乱により削平されていたが、残存していた遺構の状況から長辺4.3m、短辺3.5mを測り、やや長方形のプランを呈すると思われる。周壁溝は見られなかった。また、西側の壁面から床面にかけて、焼土や炭化物の濃厚な分布が集中する箇所が確認できた。そしてその周辺からは、小型丸底壺、小型高杯、甕などが、3ヶ所にまとめられた状態で出土した。

SB02　1辺4.5m、掘形の深さ20cm程度の規模を測る、隅丸方形のプランである。該期の竪穴住居の中では、もっとも良好な状態であった。主柱穴は3カ所で検出されたが、周壁溝は見られなかった。住居の西側半分では焼土や炭化物が広がっており、部分的に厚く堆積していた。この付近からは、炉石と思われる被熱を受けた人頭大の石も見つかっていることから、地床炉であった可能性もある。この周囲からは、小型丸底壺や小型高杯が出土した。

掘立柱建物

SB03　3間×1間の8本柱の建物である。それぞれの柱穴の大きさは、概ね1辺40～50㎝を測る。柱痕は残っていなかった。北辺の柱のとおりがやや悪いことから、2間×1間であった可能性もある。

方　墳

SZ11　墳丘の全体を検出することができた。墳丘規模は11m×12mを測る。平面形は、ほぼ方形で、墳丘の周囲を幅約3mの周溝がめぐる。陸橋部は見られなかった。墳丘部分が大きく削平されたためか、主体部は検出されなかった。出土遺物が非常に少なく所属時期の決定に苦慮したが、周辺の遺構の状況から該期に属すると認定した。

溝

SD02　幅約1m、皿形の断面形を呈する浅い溝である。5世紀後半～末に属する須恵器高杯や提瓶が出土していることから、所属時期は方墳SZ11にともなう一連の遺構のそれよりも若干新しいと思われる。

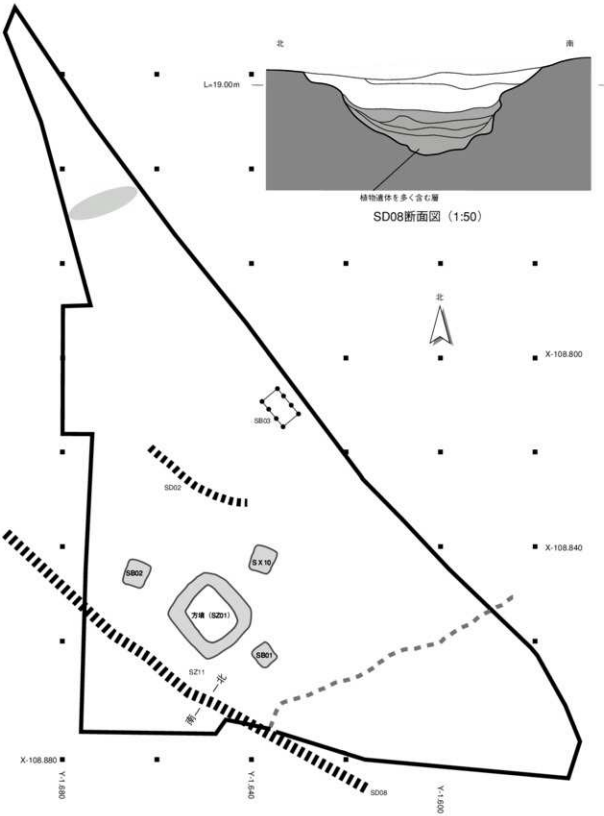
SD08　Ⅲ期の大溝NR03が埋没し、窪地状の落ち込みが形成されたところへ再掘削された溝である。幅約2m、深さ約1.2mを測り、断面形は逆台形を呈する。溝底から琴状木製品が出土した。

不明遺構

SX10　調査の段階では、竪穴住居と認識し「SB03」と呼称していた。しかし、SB01・02で検出されたような、焼土や炭化物の分布や遺物のまとまりも見られなかったことから、「不明遺構」として扱うこととした。1辺4m程度のやや不正形な方形状の遺構である。

ピット群

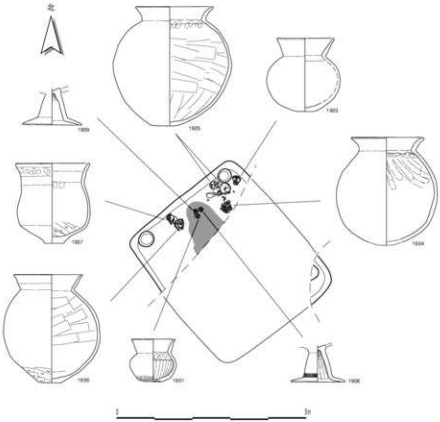
微高地の北側に展開する湿地帯の縁辺にあたる、97BC区の北側で検出された。大きさはいずれも30～50㎝程度の小土坑で、およそ50基ほ



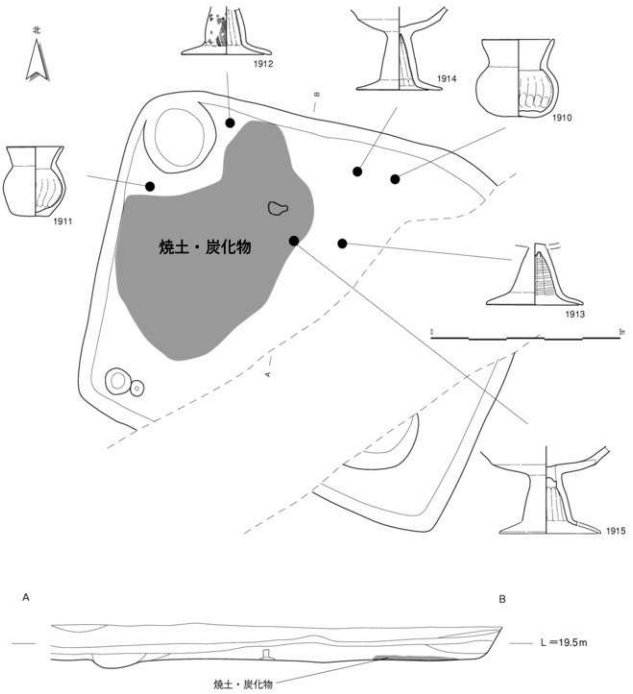
第79図　古墳時代中期主要遺構配置図（1:800）

SB01

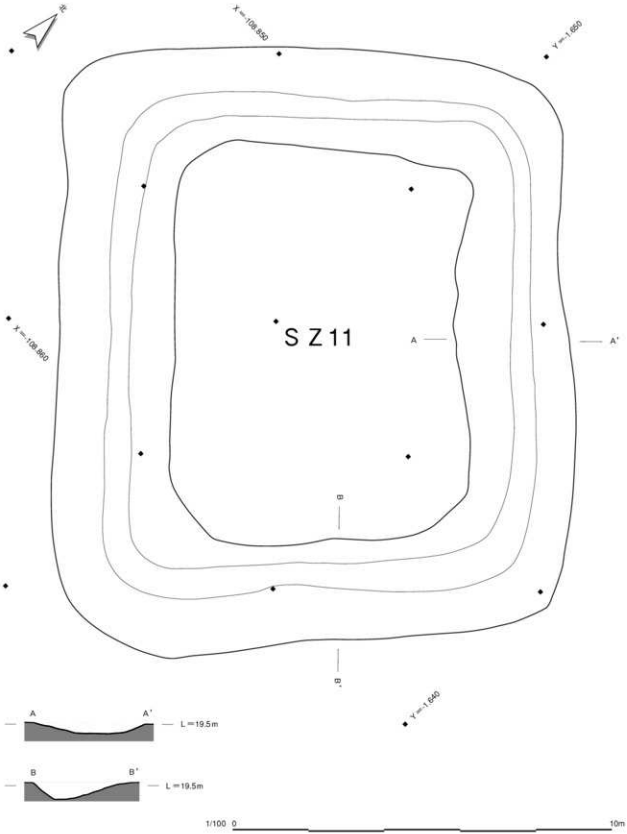
SB01



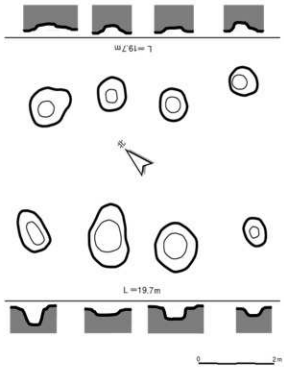
第80図　SB01遺構図（1:100）



第81図　SB02遺構図（1:100、セクション1:50）



第82図　S211遺構図（1:100）



第83図　SB03　遺構図（1:100）

どが密集していたが、規則的な配置は見られなかった。出土遺物に乏しかったが、周辺からの遺物の出土状況などから、該期の遺構とした。

小　結

検出された遺構から、Ⅲ期に引き続き微高地上は墓域であったと考えられる。

遺構の配置は、方墳SZ11を中心に、東に竪穴住居SB01、西に竪穴住居SB02、北に掘立柱建物SB03が展開し、そしてこれらが位置する領域を区画するかのように、南に溝SD08が東西方向に延びている。

東西の2棟の竪穴住居は、方墳をはさんでほぼ対称な位置にある。これらから出土した遺物には、祭祀に用いられたと思われる土器が多く見られ、遺構内で焼土や炭化物が濃密に分布する地点の周りに意図的に廃棄されたような状態で出土した。方墳の周辺では、他に竪穴住居が全く見られなかったこととも併せると、これらは特異な建物であったことが窺える。

また、方墳SZ11の主軸方向は、真北から西へ40°ほど振れている。この墳墓の周辺から検出された該期の建物遺構が、全てこの方向に軸線を同じくしていることは、興味深い。

これらのことから、方墳の周りに集落が展開していたと見ることはできないことは明らかである。むしろ、この墳墓に関わる施設が配されていたと見たほうが自然であろう。そこで一つの可能性としてこれらの遺構の性格を考えてみると、「方墳＝墓」「2棟の竪穴住居＝死者を祀る儀式を行った小屋か、もしくは墓守の小屋」「掘立柱建物＝死者を仮安置した殯のための建物」と、それぞれに機能が分担されていたことが想像できる。そして、墓域を区画していたと思われるSD08からは琴状木製品が出土していることから、この周辺で一連の葬送儀礼が行われていたと考えることができる。

Ⅳ期の土器

ここで扱う遺物は、川原Ⅳ期に属すものである。これらは、古墳時代中期の竪穴住居及び流路状の溝から出土しており、松河戸式に併行すると思われる遺物群である。

SB01

1901・1902は小型壺。1901は頸部は外傾し口縁端部は丸く収める。口径と体部最大径がほぼ等しくなり、底部は平底をなす。頸部・体部外面にはナデ調整がなされ、内面は指ナデで調整される。屈折部には指オサエが残る。1902は体部のみ出土しており、底部は平底である。内外面ともナデ調整で、外面にはススの付着が見られる。

1903は直口壺。頸部は外傾する。口径は体部最大径よりも小さい。底部は平底である。外面調整は不明瞭だが、内面にはナデ調整がなされる。また外面全体と内面体部上半にススの付着が見られる。1904～1906は甕。1904は端部を丸く収めたく字状の口縁と、球形の体部を有する。底部は欠損しているが平底と思われる。口縁部はヨコナデで調整される。体部外面は板ナデ調整で、内面は体部上半は指ナデ、下半は板ナデで調整される。屈折部には指オサエが残る。また体部外面にはススの付着が見られる。1905も端部を丸く収めたく字状の口縁と、球形の体部を有し、平底である。口縁部はヨコナデがなされ、体部外面は板ナデがなされる。体部内面は中位は横方向の板ナデ、下半は下から上の板ナデがなされる。屈折部には指オサエが残る。また口縁部外面、体部下半にススの付着が見られる。1906は有段状の稜を有する口縁で、丸く収めた端部はやや外反する。体部は球形で平底である。口縁部はヨコナデ、体部外面は板ナデ調整がなされ、下半にはケズリ調整がなされている。体部内面は板ナデ調整である。また体部上半にススの付着が見られる。1907は甕。頸部から体部は連続し、頸部は外反する。体部下半に稜を有す。外面と内面上部はナデ調整がなされ、内面下部にはケズリが見られる。外面と内面下半にススの付着が見られる。1908・1909は屈折脚高杯の脚部。1908は外面は指ナデ調整で、屈折部にはハケ調整が残る。内面も指ナデによる調整で、上部にシボリ痕が見られる。1909は外面は指ナデ調整で、内面の脚柱部には板ナデがなされる。内面上部にはシボリ痕が残る。SB01出土遺物は松河戸Ⅱ式初頭に併行すると思われる。

SB02

1910・1911は小型壺。1910は頸部は外傾し、口縁端部を丸く収める。口径と体部最大径がほぼ等しく、底部は平底である。外面調整は明瞭ではないが、内面は頸部に板ナデ、体部に指ナデがなされる。1911は頸部は外傾し、口縁端部を丸く収める。口径と体部最大径がほぼ等しく、底部は平底である。外面調整は頸部にヨコナデ、体部に指ナデがなされる。内面調整も頸部にヨコナデ、体部に指ナデがなされる。1912～1915は屈折脚高杯の脚部。1912は脚柱部は丸く膨らみを持ち、裾部は大きく開く。外面調整はタテハケ後に指ナデがなされ、内面は脚柱部に指ナデ、裾部に板ナデがなされる。1913は裾部にヨコナデ、脚柱部外面に指ナデがなされる。脚柱部内面にはシボリ痕と横方向の板ナデが明瞭に残る。1914は杯部は内外面ともナデで調整されている。脚部は脚柱部が指ナデ、裾部はヨコナデがなされる。1915は杯・脚部ともナデ調整がなされている。杯部と脚部は、杯部下面のほぞ部を脚柱部上部の孔に差し込んで接合されている。SB02出土遺物は松河戸Ⅱ式初頭に併行すると思われる。

SB03

1916は鉢。底部は平底で、肩部にヘラによる刺突が施される。外面調整は不明だが口縁部内面にヨコナデ、体部内面に板ナデがなされる。

1917は高杯脚部。ハ字状に開く形態で、上端には粘土の充填が見られる。外面にはヘラミガキ、内面には板ナデによる調整がなされる。

1918は台付甕。く字状の口縁に、最大径が中位にくる体部を有する。口縁部はナデ調整で、体部外面にはタテハケ後板ナデがなされ、下部3分の2

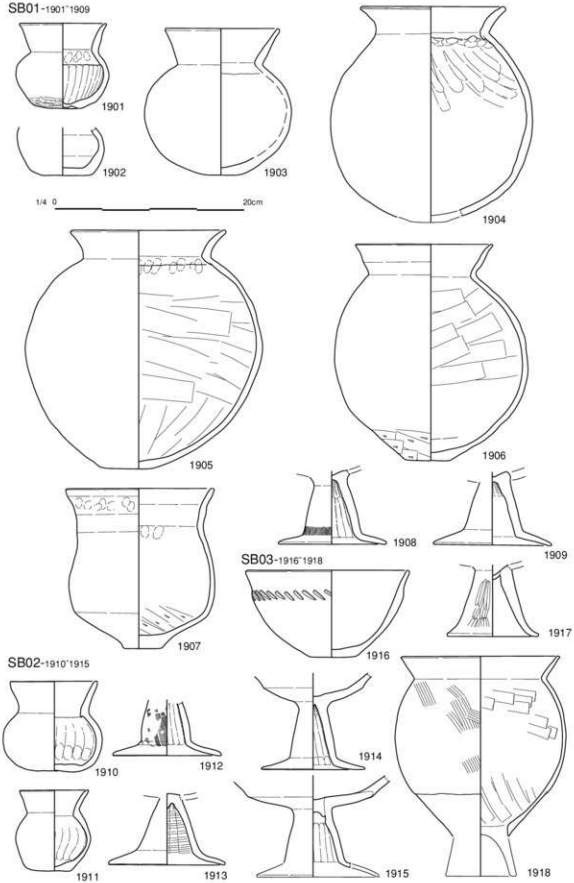
の位置に粘土の継ぎ目が明確な段をもって残る。体部内面は上半に横方向の、下半に縦方向の板ナデがなされる。SB03出土遺物は松河戸式併行期より若干遡る可能性がある。

SD08・SX115

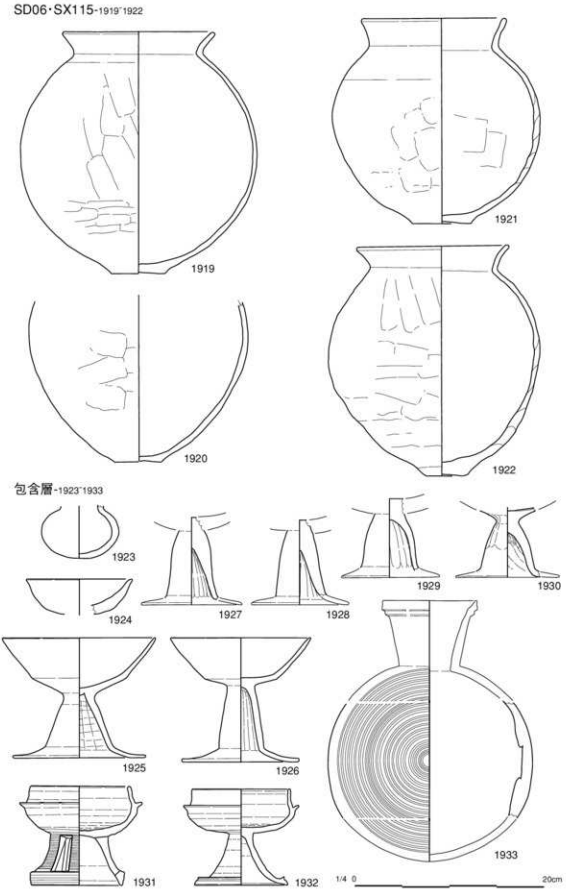
1919～1922は甕。1919は端部を丸く収めたく字上の口縁と、最大径が中位にくる球形の体部を有す。底部は突出し、若干上げ底となる。口縁部はヨコナデで調整され、体部外面は上半は縦方向の指ナデ、下半はケズリ後指ナデで調整されている。体部内面もナデ調整がなされる。また体部にはススの付着が見られる。1920は体部のみ出土している。底部は若干上げ底となる。外面には指ナデによる調整が見られる。外面にススの付着が見られる。1921は立ち上がりの強いく字状の口縁を有し、端部はやや肥厚している。不定形ながら球形の体部を有し、底部は突出し上げ底となる。口縁部はヨコナデで調整され、体部外面は指ナデ調整される。内面は板ナデで調整される。また口縁部・体部外面にススの付着が見られる。1922は1919と同様な形態を示す。端部を丸く収めたく字状の口縁で、不定形ながら球形の体部を有す。底部は突出し上げ底となる。口縁部はヨコナデで調整され、体部上半は縦方向、下半は横方向の指ナデがなされる。体部外面中位にススの付着が見られる。SD08・SX115出土遺物は松河戸Ⅰ式末～Ⅱ式に併行すると思われる。

包含層出土遺物

1923～1930は松河戸式に併行する段階の土師器である。1923は小型壺。体部のみ出土している。底部は平底である。外面調整は明瞭ではないが、内面には指ナデがなされる。1924は椀形高杯の杯部。口径は小さく、口縁はやや外反する。内外面とも指ナデで調整がなされる。1925は屈折脚高杯。杯部は大きく外傾し、口縁端部は細く収めている。脚柱部は屈折部ですぼまらずハ字状に開き、裾部は大きく開く。外面調整は杯部・脚部ともナデ調整で、杯部内面もナデ調整がなされる。脚部内面は、脚柱部は板ナデがなされ、裾部にはヨコナデがなされる。松河戸Ⅱ式に併行すると思われる。1926も屈折脚高杯。杯部は大きく外傾し、口縁端部を細く収めている。脚部は脚柱部は直線的で、裾部が大きく開く。外面調整は杯部・脚部ともナデ調整で、杯内面もナデ調整がなされる。脚内面は裾部にヨコナデがなされ、脚柱部にはシボリ痕が残る。松河戸Ⅰ式古段階に併行すると思われる。1927～1930は屈折脚高杯の脚部。1927は脚柱部で、外面は指ナデで調整され内面にはシボリ痕が残る。1928も脚柱部で、外面は指ナデ調整で、内面にはシボリ痕が残り、強い指ナデがなされる。1929も脚柱部で、内外面とも指ナデで調整がなされる。1930は脚と杯の一部が残っている。脚部外面は指オサエで成形した後指ナデがなされ、指圧痕が残る。脚部内面にはシボリ痕が残り、指ナデがなされる。1931・1932は5世紀末に比定される須恵器である。1931は高杯。杯は受部が長く、太い脚が付く。脚には長方形の透かしが3ヶ所に見られ、脚端部には2本の凹線が施される。また脚部外面にはカキメが残る。1932は尾張型須恵器の高杯。杯は受け部が長く口縁内面には沈線が1条巡る。脚部は細く、透かしは施されない。脚端部に沈線が1条巡る。1933は提瓶。体部の一部のみ出土している。外面には、カキメが同心円上に残る。内面はナデ調整で粘土の貼り付けが確認できる。



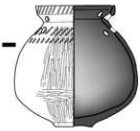
第84図　古墳時代中期の土器1



第85図　古墳時代中期の土器2

V

古代・中世



V期の遺構

97D区で竪穴住居が検出されたが、他の調査区では、遺物が散見される程度で、遺構はほとんど検出されなかった。

竪穴住居

97D区において、重複した形で12棟を検出したが、後世に削平を受けたためか、残存状況はあまり良好ではなく、掘形はどれも浅かった。

平面プランは、いずれも方形で、1辺が3～5mを測る規模で、周壁溝はともなっていなかった。SB01のように、主柱穴と思われる小土坑(ピット)が検出されたものも見られた。また、炭化物や焼土が、埋土中には混入していたが、床面上ではそれらの広がりをはっきりとは確認できず、カマドも検出されなかった。

これらの住居は、主軸の方向から3つのグループに分けることができる。

① ほぼ真北方向のグループ
② ①から、西へ30°程度振れるグループ
③ ①から、東へ30°程度振れるグループ

しかし、どの遺構からも出土した遺物の量は乏しく、「古代(V期)に位置づけられる」までの把握が残念ながら精一杯であった。したがって、切り合いから見た前後関係は、A:①よりも②のグループの方が新しい、B:③は①・②のどれとも重複していないことを看取することはできるが、個々の、そしてグループごとの、詳細な所属時期や変遷状況を明らかにすることはできなかった。

遺構が検出された地点は、遺跡が立地する微高地の一端でもある。あくまで推測の域を出るものではないが、古代においては、この付近の微高地一帯が居住域であったと考えたい。

Ⅵ期の遺構

Ⅵ期は、流路でもあった谷地形が、しだいに埋没(谷の後退)していく時期にあたる。

この時期の当初においても、川原遺跡の東側には、北東から南西方向へ延びる大きな谷地形が展開していた。下層の埋土の堆積状況は、主としてシルト層と砂層からなっていたことから、しばしば、自然流路でもあったと見られる。しかし、上層になるにしたがって、砂層は見られなくなり、代わって埋土中に含まれる植物遺体の量が非常に多くなっていく状況であったことから、周辺が淀んだ環境に変化していたと思われる。したがって、この谷地形は、流水と止水を繰り返しながら、次第に埋没がすすみ、湖沼のような景観を呈するようになったと思われる。

流　路

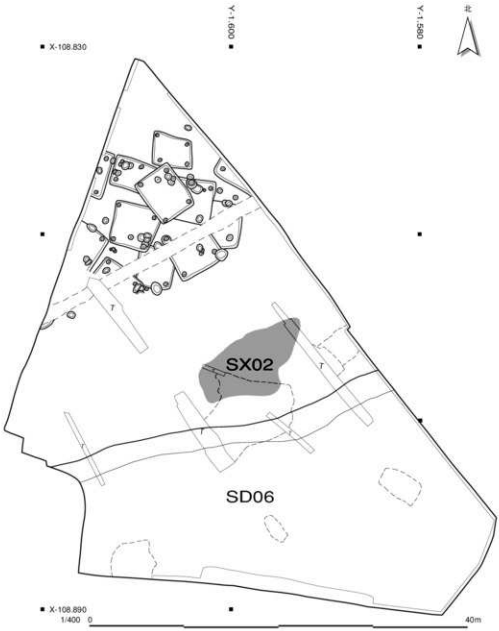
97D・97E区で検出された、遺跡の東側に展開する谷地形の一部。東岸は調査区外であるため、規模は不明である。

97D区において、この流路の右岸の斜面を繰り返し整形した痕跡が確認できた。この整形された斜面の最下層からは、12世紀前半頃に属する灰釉系陶器の椀が2点出土したことから、12世紀前半あたりに数回にわたって、斜面の整形を施す護岸がなされたと考えられる。

この後、この流路の流水は滞り、止水域へと変化していったようである。これはこの付近にあった流水域が、東の方へ移ったためと考えられる。埋土中からはほとんど遺物が出土しなかったので、こうした変化がいつ頃起こったのかを特定するのは難しいが、先述した護岸の痕

跡とⅦ期の水田跡との関係から、12世紀以降から流路の止水にともなって埋没が徐々にすすみ、遅くとも14世紀後半までには完全に埋没し、湿地状になっていたと思われる。

また、埋没後に表面に残っていたと思われる不整形な土坑(窪地)から、ランダムに集積されたと見られる多量の遺物が出土した(SX02)。これらは所属時期も全く異なっていることから、谷地形が埋没した頃に行われた周辺の開発に際して出土したものが、不要物として回収され、適当な場所に廃棄をされたためと考えられる。



第86図　Ⅴ期の遺構

Ⅶ期の遺構

Ⅶ期は、Ⅵ期に埋没した谷地形の斜面を利用した水田が造成された時期である。

遺構の検出状況から、水田は、「下層水田」と「上層水田」の2時期に分かれることが確認できた。これにより、Ⅶ期はa期とb期の2つの小期に細分することができる。

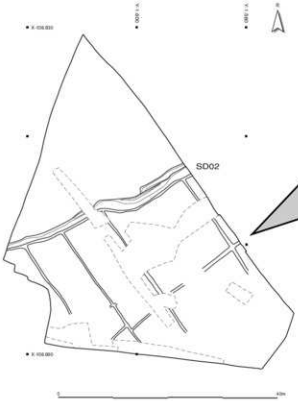
a期　下層水田が造成された時期

b期　上層水田が造成された時期。

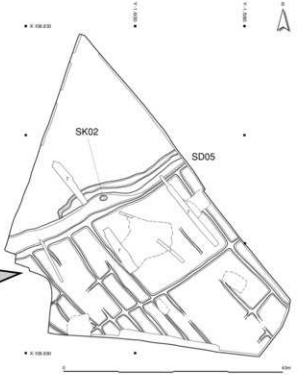
該期の遺構は、遺跡が立地する微高地上では、後世に削平を受けていたこともあって、ほとんど検出されなかった。しかし、この微高地が東南方向へ下がっていく箇所に当たる97D区では、水田をはじめ、溝や土坑などが検出された。

なお、記述内容の重複を避けるために、「a期」「b期」という小期ごとではなく、遺構単位にまとめて記述をし、所属時期は各遺構ごとに記すこととする。

谷が埋没した後、微高地の東側は南東へ向かって低くなっていく緩やかな傾斜面となった。



第88図　Ⅶb期上層水田遺構配置図



第87図　Ⅶa期（下層水田）遺構配置図

水田はこの地形を利用して造営されたものと思われる。

97D区において、水田は2面検出された。いずれも、斜面上端部に微高地と同じ方向に延びる溝と並行して傾斜側に畦畔が設定されており、この畦畔に直交する形で南東方向へ延びていく畦畔が造られている。平面はすべて北西―南東に長い長方形プランである。また、これらの水田からは水口は検出されなかった。斜面における標高差が50～60㎝であることから、この地形を利用した「かけ流し」による給・排水が行われたと考えられる。

田一筆あたりの規模は、a期の水田では、長軸5～6m、短軸2～3mを測り、7～15㎡である。また、b期の水田では、長軸が大きいものは11～13m、小さいものは7～8m、短軸4～5mを測り、30～42㎡であり、b期の水田の方が、a期のそれ比べ幾分規模が大きくなっている。

これらの水田からの出土遺物は、いずれも15世紀後半～16世紀前半に属するものであった。また、「a期の水田」と「b期の水田」の間には、極細粒な砂の堆積層が見られたことから、この地に造られた水田は、一度洪水砂によって埋没した後、さほど時間を経ることなく、旧の規格をほぼ踏襲した形で、再度造成されたと考えられる。

これらの水田が営まれた時期は、川原遺跡の北西約0.3kmに位置していたとされる鷲鴨城の伝承記録(応仁2(1468)年～永禄年間)ともほぼ一致しており、興味深い。

その後、戦国～江戸期に起きた洪水によると思われる土砂に覆われ、埋没したようである。

溝

SD02(b期)

遺跡が立地する微高地の東端で検出された。幅1.5mほどで浅い皿形を呈し、水田の展開と方向を同じくして走ることから、上層水田への給水を目的として掘削された溝と考える。この溝を切るSD01は、付け替えられた溝と思われる。

SD05(a期)

SD02同様、遺跡の立地する微高地の東端で検出され、規模もほぼ同じである。検出された地点から、下層水田への給水を目的として掘削された溝と考えられる。

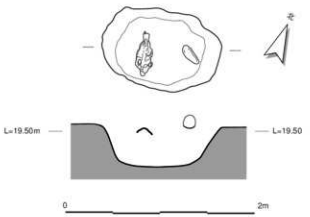
土　壙

SK02(a期)

底部から馬の頭骨が、下顎を除いてほぼ完形のまま出土した。土壙の長軸と頭位の軸線とがほぼ一致しており、正置した状態であったことから、埋納されたものと考えられる。

馬は、牛などとともに古代より農耕儀礼を行う際の犠牲獣として、しばしば使用されていたことが知られており、水田跡に隣接した遺構からこうした獣骨などが出土した事例もいくつか見られる。

今回の出土地点も、下層水田の上端を区画する畦畔のすぐ北側に位置していった。したがって、諸例と同様に、(この地域に新たな)水田を営むにあたって何らかの農耕にまつわる祭祀が執り行われた際に、犠牲に供されたと考えられる。



第89図　SK02遺構図（1:40）

Ⅴ～Ⅶ期の遺物

川原遺跡のⅤ期からⅦ期、実年代では10世紀から16世紀初頭までを対象とする。出土した遺物には、土器・陶磁器類、金属製品、石製品、木製品など各種あるが、量的に最も多いのは土器・陶磁器類である。特に、灰釉系陶器[1]、瀬戸・美濃窯産陶器、常滑窯産陶器が主体となる。したがって、灰釉系陶器と瀬戸・美濃窯産陶器の分類や時期設定などに関しては藤澤良祐氏の研究成果[2]を、常滑窯産陶器に関しては赤羽一郎・中野晴久両氏の研究成果[3]を参考にした。また、貿易陶磁器に関しては森田勉氏の研究成果[4]を、土師器の煮炊具などに関しては鈴木正貴氏の研究成果[5]を参考にした。

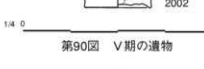
以下、各時期ごとに、その時期の年代観が得られる遺物を中心に記述する。

(1)　Ⅴ期の遺物(第90図2001～2002)

須恵器が4点、灰釉陶器が4点、灰釉系陶器が1点出土している。

2001は、SB09から出土した灰釉陶器の椀である。O－53号窯式に比定される。2002は、SB12から出土した灰釉系陶器の椀である。第3型式に比定される。

12軒の竪穴住居から出土した遺物がわずか9点と少なく、いずれも小破片ばかりであり、Ⅴ期の時期を確定するには資料不足といわざるをえない。あえてⅤ期の年代を得るならば、10世紀から11世紀の範疇に属するものと考えられる。



第90図　Ⅴ期の遺物

(2)　Ⅵ期の遺物(第91図2003～2016)

SD06

下層から10点、上層から14点出土しているが、いずれも微高地ぎわの緩斜面からの出土である。

下層出土の遺物は、灰釉系陶器の椀(9点)と皿(1点)に限定され、尾張型(8点)と渥美・湖西型(2点)に類別される。時期の確定できるものが5点認められ、第4型式のものが1点、他の4点は全て第5型式のものである。

2003は、灰釉系陶器の椀である。尾張型に属し、第5型式古に比定される。2004は、いわゆる輪花椀であり、灰釉が施されている。渥美・湖西型に属し、第5型式古に比定される。2005は、灰釉系陶器の皿である。渥美・湖西型に属し、第5型式古に比定される。上層出土の遺物は、灰釉系陶器の椀が10点、皿が1点、短頸壺が1点、土師器の皿が2点である。灰釉系陶器は、産地不明のものが1点あるが、他は全て尾張型である。また、時期の確定できるものが7点認められるが、第5型式古から第8型式までである。

2006～2008は、灰釉系陶器の椀で、尾張型に属す。2006・2007が第5型式古に、2008が第8型式に比定される。2009は、灰釉系陶器の皿である。尾張型に属し、第7型式古に比定される。2010は短頸壺で、猿投窯産の可能性が考えられる。12世紀第3四半期に比定される。2011・2012は、土師器の皿である。2011が底部外面に糸切り痕を残すロクロ製品であり、2012が底部から体部の外面に指の圧痕が残る非ロクロ製品である。

1) 灰釉系陶器とは、中世期において東海地方の窯で焼成された無釉の陶器を指す。特にここでは、いわゆる山茶椀、小皿(山皿)、片口鉢を指す。
2) 藤澤良祐 1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』Ⅹ瀬戸市歴史民俗資料館
3) 中野晴久 1994「生産地における編年」全国シンポジウム『中世常滑焼をおって』資料集日本福祉大学知多半島総合研究所
4) 森田勉 1981「鎌倉出土の中国陶磁に関して」『貿易陶磁研究』日本貿易陶磁研究会
森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』日本貿易陶磁研究会
5) 鈴木正貴 1998「豊田市郷上遺跡出土の土師器煮炊き具に関する予察」『年報』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

SX01

灰釉系陶器の椀が44点、皿が4点、壷・甕類が6点出土している。灰釉系陶器の椀は、渥美・湖西型が1点、幸田窯産の可能性が考えられるものが1点あり、いずれも第5型式古に比定される。尾張型は24点出土しているが、第3型式から第9型式まである。灰釉系陶器の皿は全て尾張型に属し、第7型式から第8型式の範疇に納まる。壷・甕類は、常滑窯産と猿投窯産がそれぞれ3点ずつ出土しているが、時期を確定する資料はない。

2013～2015は、灰釉系陶器の椀である。2013は尾張型に属し、第5型式古に比定される。2014は第5型式古に比定され、幸田窯産の可能性が想定される。2015は尾張型に属し、第7型式に比定される。2016は、灰釉系陶器の皿である。尾張型に属し、第7型式ないし第8型式に比定される。

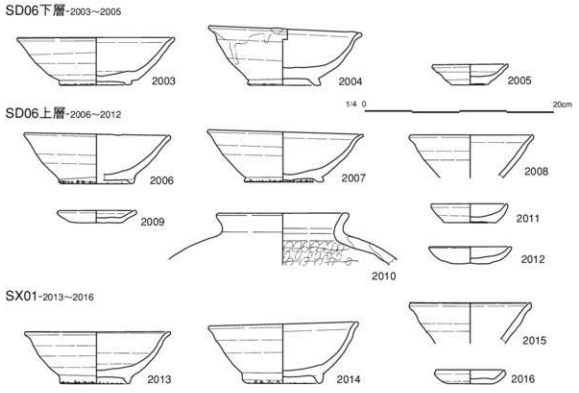
SD06下層は、時期的なまとまりがあるが、SD06上層およびSX01は、時期幅がある。このような点から、Ⅵ期の年代は、12世紀中葉から14世紀後半と幅をもたせた想定をせざるをえない。

(3) Ⅶ期の遺物(第96図2017～第98図2119)

水田が展開する時期であるが、下層水田(Ⅶ－a期)と上層水田(Ⅶ－b期)の2期に区分される。そのため、出土量の多い瀬戸・美濃窯産製品、常滑窯産製品、土師器類、貿易陶磁器に関しては各小期ごとに述べ、その他の遺物については、種類ごとにまとめて述べる。

(4) Ⅶ－a期(第96図2017～2021)

第3図から、遺構により遺物の出土量の相違が見てとれる。遺物が最も多量に出土している遺構は、ST17(53点)であり、ついで、ST16・18(32点)、ST12(28点)、ST31(14点)、ST30(13点)、ST29(10点)である。ST12以外は、いずれも微高地に隣接している。



第91図　Ⅵ期の遺物

瀬戸・美濃窯産製品は、灰釉平椀が2点、擂鉢・鉄釉小壷・鉄釉有耳壷が各1点出土している。時期は、古瀬戸後Ⅲ期から大窯第1段階の範疇に納まる。2017は、大窯第1段階に比定される鉄釉有耳壷である。

常滑窯産製品は、全て壷・甕類であるが、時期の得られる資料はない。

貿易陶磁器は、4点とも龍泉窯系の青磁連弁文椀であり、13世紀～14世紀初頭の範疇に属する。2018は、太宰府編年Ⅰ－5b類に比定される。

土師器は、皿と煮炊具に分けられ、皿が多量に出土していることが第4図からうかがえる。主要土器・陶磁器類の約89％を占め、出土遺物総数においても205点のうちの108点と半数以上を占める。指の圧痕が観察されるものは1点のみであるが、糸切り痕を有するものは51点を数える。2019・2020はいずれも糸切り痕を有するロクロ製品の皿である。

煮炊具として内耳鍋が1点出土している。2021は、半球形の体部に外反する口縁がつくタイプで、口縁端部は玉縁状に肥厚している。

Ⅶ－a期の遺物出土総数は205点を数えるが、年代の得られる遺物はわずかである。そのため、時期を確定することは困難である。しかしながら、瀬戸・美濃窯産製品編年の大窯第1段階が最も新しい年代観を示すことから、15世紀末～16世紀初頭に下限を求めることは可能であろう。

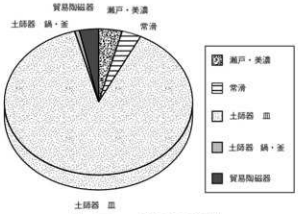
(5)　Ⅶ－b期(第96図2022～第97図2088)

第5図から、遺構により遺物の出土量に差を見て取ることができるが、これは、調査区端に位置するためにわずかな面積しか検出されなかった水田と、ほぼ1枚分検出された水田との相違がそのまま数量にあらわれているだけである。

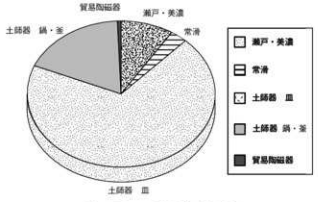
Ⅶ－a期では土師器の皿が高い出土比率を示していたが、第6図からⅦ－b期においても同様な傾向がうかがえる。土師器の皿は、主要土器・陶磁器類の約69％を占め、出土遺物総数においても5004点のうちの2542点と半数以上を占める。次に多いのが土師器の煮炊具で主要土器・陶磁器類の約18％を占める。このように、土師器製品が主要土器・陶磁器類の約87％を占めている。

瀬戸・美濃窯産製品は、土師器製品に次いで多く、333点を数える。第1表に示すとおり、擂鉢や鍋などの日用雑器から花瓶・香炉といった神仏具まで多様な器種がある。最も出土量が多いものは擂鉢(80点)であり、次いで天目茶椀(55点)、緑釉小皿(35点)、平椀(29点)が多い。時期は、古瀬戸後Ⅲ期から大窯第1段階までが量的に多いが、特に古瀬戸後Ⅳ期の177点は中核をなす資料である。

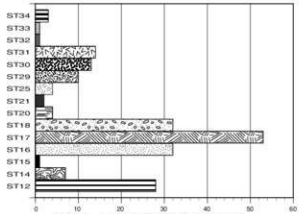
2022～2028は、天目茶椀である。2022～2024が古瀬戸後Ⅳ期古に、2025～2027が古瀬戸後Ⅳ期新に、2028が大窯第1段階に比定される。2029～2031は、平椀である。2029・2030が古瀬戸後Ⅳ期古に、2031が古瀬戸後Ⅳ期新に比定される。2030は底部であるが、削り出し高台が未完成のまま焼成されたものである。2032～2034は、灰釉緑釉小皿である。2032が古瀬戸後Ⅳ期古に、2033･2034が古瀬戸後Ⅳ期新に比定される。2035は、古瀬戸後Ⅳ期新に比定される灰釉腰折皿、2036は、古瀬戸後Ⅳ期古に比定される鉄釉中皿、2037は、大窯第1段階に比定される灰釉端反皿、2038は、大窯第1段階に比定される灰釉緑釉はさみ皿である。2039～2041は、灰釉折縁深皿である。2039が古瀬戸後Ⅰ期に、2040が古瀬戸後Ⅲ期に、2041が古瀬戸後Ⅳ期古に比定される。2042・2043は、灰釉直縁大皿である。2042が古瀬戸後Ⅲ期に、2043が古瀬戸後Ⅳ期古に比定される。2044は、古瀬戸後Ⅳ期古に比定される灰釉卸目付大皿、2045は、古瀬戸後Ⅳ期古に比定される灰釉卸皿である。2046・2047は、擂鉢である。2046が古瀬戸後Ⅳ期に、2047が大窯第1段階に比定される。2048は、古瀬戸後Ⅲ期ないし古瀬戸後Ⅳ期古に比定される灰釉片口小瓶、2049は、古瀬戸後Ⅳ期に比定される鉄釉甕、2050は、古瀬戸後Ⅳ期古に比定される灰釉尊式花瓶



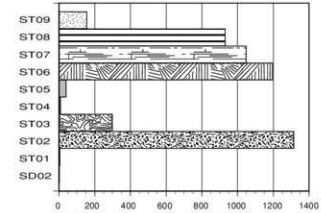
第92図　VIIa期遺物出土割合



第93図　VIIb期遺物出土割合



第94図　VIIa期遺構別遺物出土点数



第95図　VIIa期遺構別遺物出土点数

である。2051は、古瀬戸後Ⅲ期ないし古瀬戸後Ⅳ期古に比定される錆釉土瓶の注口部である。胴部内面には横なでの調整痕が観察されるが、注口部およびその周囲には指圧痕や指なで痕が観察される。また、注口部両側面には、指などで板状にのばされた粘土を張り付けた箇所が、注口部下部から胴部にかけても、2.0～2.5cmの幅で粘土を張り付けた箇所がみられる。さらに、注口接合部分の胴部には、生地が乾燥する前の柔らかい状態において壁の一部を外側から内側にえぐりこむ形で穴が開けられている。

常滑窯産製品は、壷・甕類が99点、鉢類が2点、羽釜が6点出土している。2052は第9型式に、2053は第10型式に比定される片口鉢である。2054は、第10型式に比定される壷である。

貿易陶磁器は、青磁が12点、白磁が11点出土している。

青磁の器種は、椀類が9点、皿類が2点、壷などの袋物が1点である。椀類は全て龍泉窯系であるが、蓮弁文と劃花文の2種類がある。皿類は、同安窯系の小皿と龍泉窯系の稜花皿である。概ね12世紀～13世紀の範疇に属するが、稜花皿のみ15世紀に比定される。2055は、太宰府編年Ⅰ類に比定される椀である。文様は不明。2056は、太宰府編年Ⅰ－5b類に比定される蓮弁文椀である。

白磁の器種は、椀類が7点、皿類が4点である。椀類は概ね12世紀～13世紀の範疇に属すが、14世紀に比定される景徳鎮の印花文椀も出土している。皿類は、15世紀に比定されるものが3点ある。2057は、太宰府編年Ⅰ類に比定される椀である。2058～2061は皿類である。2058は、口縁端部内面に幅0.2cmほどの無釉部分がめぐる。太宰府編年Ⅸ類に比定される。2059・2060は15世紀に比定される。2061は、15世紀に比定される割高台の皿である。

土師器は、皿と煮炊具に分けられる。

土師器の皿は、糸切り痕を有するものが1091

点、指の圧痕が観察されるものが19点出土している。

2062～2080は、底部外面に糸切り痕を残すロクロ製品である。2062は、推定口径6.8cm、器高1.3cmを測る。体部は曲線的に立ち上がり、口縁部は外側のみ肥厚する。2063は、推定口径6.8cm、器高1.5cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部端部は、外側が体部傾斜と斜交するように面をもつ。2064は、推定口径8.1cm、器高2.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部との境に沈線をめぐらせ、口縁端部は垂直方向に立ち上がる。2065は、推定口径8.2cm、器高1.4cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は水平方向に外反する。2066は、推定口径8.2cmに対し、推定底径6.2cmを測る底部の広いタイプである。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部端部は細く尖る。2067は、口径8.3cm、器高1.6cmを測る。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部端部は体部傾斜と直行するように面をもつ。2068は、推定口径8.8cm、器高1.6cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外側のみ肥厚する。2069は、推定口径9.0cm、器高1.6cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外側のみ肥厚しながら端部はやや内側に湾曲する。2070は、推定口径9.2cm、器高1.7cmを測る。体部はやや外反しながら立ち上がり、体部と底部の境に箆なでなどによる面をもつ。2071は、推定口径9.3cm、器高1.9cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚する。2072は、推定口径9.6cm、器高1.9cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内側に湾曲する。2073は、推定口径9.8cm、器高1.1cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は水平方向に外反しながら細く尖る。2074は、推定口径10.0cm、器高2.5cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外側のみ肥厚しながら端部はやや内側に湾曲する。2075は、推定口径10.2cm、器高2.1cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外側のみ肥厚しながら端部はやや内側に湾曲する。2076は、推定口径11.0cm、器高2.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は内側に湾曲する。2077は、推定口径11.8cm、器高2.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部端部は外側が体部傾斜と斜交するように面をもつ。2078は、体部がやや外反しながら立ち上がり、体部と底部の境に箆なでなどによる面をもつ。2079・2080は、深皿ないし椀の形状をなす。

2081は、推定口径7.0cmを測る、口縁部から体部の外面に指圧痕が残る非ロクロ製品である。2082は、推定口径12.0cmを測る非ロクロ製品である。

煮炊具として内耳鍋と羽釜がある。

内耳鍋は、半球形の体部に外反する口縁がつき、口縁部と体部の境が明瞭なタイプ(内耳鍋A類)と、体部が直線的に立ち上がって口縁端部にいたる口縁部と体部の境がないタイプ(内耳鍋B類)に分類される。内耳鍋A類が21点、内耳鍋B類が18点出土している。2083・2084は内耳鍋A類、2085は内耳鍋B類である。

羽釜は、口縁部が内傾し、鍔がやや斜め上方に突出するタイプ(羽釜A類)と、体部が直線的に立ち上がって口縁端部にいたり、水平に突出する鍔をもつタイプ(羽釜B類)に分類される。羽釜A類が6点、羽釜B類が6点出土している。2086・2087は羽釜A類、2088は羽釜B類である。

出土量の多い瀬戸・美濃窯産製品の編年に基づいた場合、Ⅶ－b期の時期は、15世紀中葉～16世紀初頭を中心とする時期が想定される。また、他の主要遺物もⅦ－b期の時期が15世紀に求められることを示している。

(6) その他の遺物

陶丸(第97図2089～2097)

Ⅶ－a期に1点(2089)、Ⅶ－b期に8点(2090～2097)出土している。 2089は、やや方形に近い形状をしており、長軸2.5cmを測る。幅

1.0cm、厚さ0.2cmの板状のものの先端を押しあてて刻まれた「×」印が見られる。

Ⅶ－b期の陶丸は、長径2.1cm～2.3cmのものが7点(2090～2096)、2.6cmのものが1点(2097)である。

加工円盤(第97図2098)

Ⅶ－b期に1点出土しており、灰釉系陶器の椀の底部を素材としている。

鍛冶関連遺物(第97図2099)

明確な鍛冶関連遺構は認められなかったが、Ⅶ－b期に輪の羽口が2点出土している。

2099は、残存長が5.2cmではあるが、鉱滓が幅1.5cmほど帯状に付着しているため、炉側の先端に近い部分と考えられる。

木製品(第98図2100～2102)

Ⅶ－a期に下駄、田下駄、曲物容器が各1点、Ⅶ－b期に漆器類が2点出土している。

2100は、長さ19.6cmを測る、平面形態が小判形をした連歯下駄である。先端部分に親指と思われる足の圧痕が見られることから、右足用と考えられる。

2101は、枠型田下駄の枠木であり、幅3.8cm、高さ2.3cm、残存長19.3cmを測る。縦1.1cm、横1.2～1.3cmの横木を差し込む方形の穴が4箇所見られる。2102は、漆器の皿と考えられる。推定口径8.2cmを測る。内外面とも赤色漆が施されているが、口縁端部は約0.2cm幅で黒色漆部分がめぐる。

石製品(第98図2103)

砥石がⅦ－a期に2点、Ⅶ－b期に1点出土している。3点とも凝灰岩製であり、仕上げ砥石と考えられる。

金属製品(第98図2104～2108)

釘が1点(Ⅶ－a期)、小柄が2点(Ⅶ－a期、Ⅶ－b期各1点)、鏃が2点(Ⅶ－a期、Ⅶ－b期各1点)出土している。

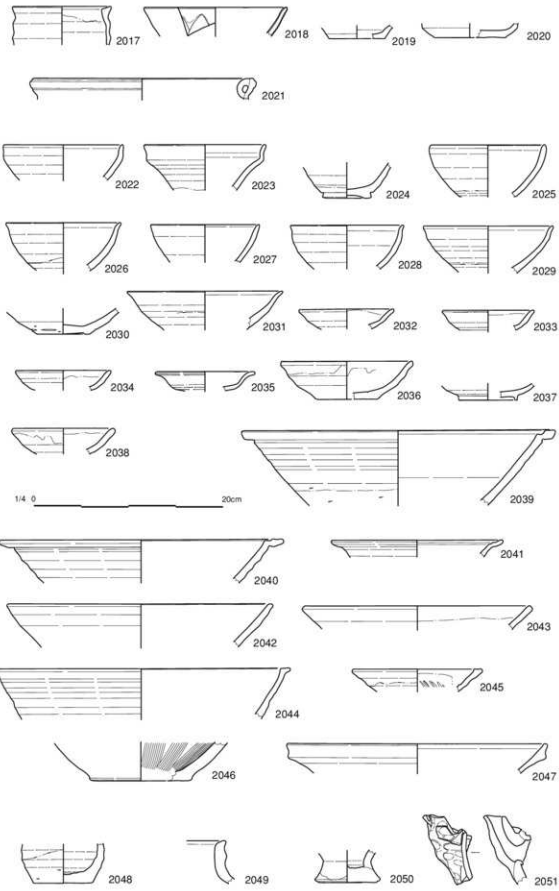
2104は、鉄製の釘で長さ19.1cmを測る。側面に対し、正面が幅広の形状を示す。正面、側面とも頭部は扇形を呈し、脚部は先端に向かい緩やかに細くなり、先端部分0.7cmほどで鋭利な形状をなす。2105・2106は、真鍮製の小柄の柄部である。2107・2108は、鉄製の有茎鏃である。2点とも刃部の正面は、先端部分が膨らみ、下部に向けていったんくびれたのち末端部分が裾広がりの形を示す。側面は、先端部分へむかって内側に緩やかに曲線を描く。

銭貨(第98図2109～2120)

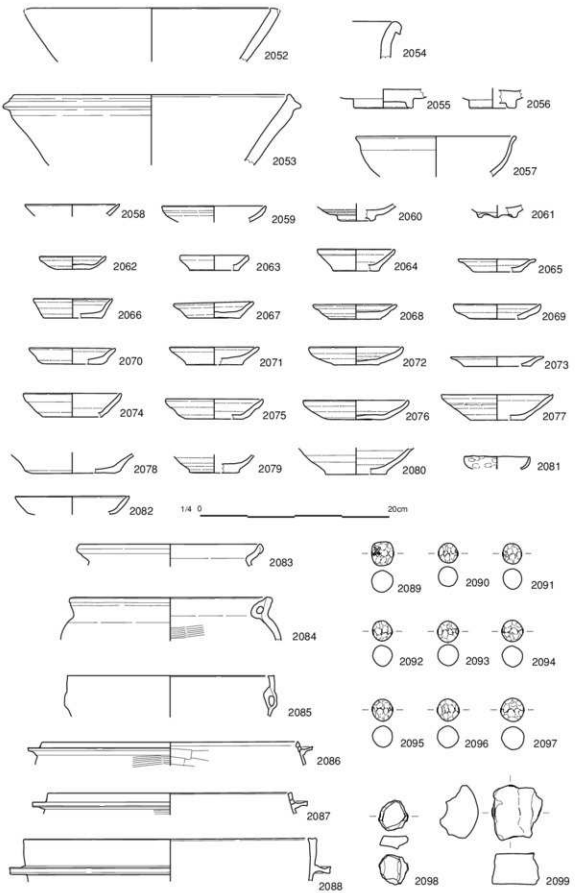
Ⅶ－a期に7点(2109～2115)、Ⅶ－b期に5点(2116～2120)出土している。全て裏面は無紋である。北宋銭の系統が9枚と出土総数の3／4を占め、他は唐銭、南宋銭、明銭が各1枚である。

第8表　Ⅶ－b期出土瀬戸・美濃窯産製品器種一覧表（時期別）

器種名		古瀬戸前期	古瀬戸中期		古瀬戸後期							古瀬戸か大窯	大窯		合計
		不明	Ⅳ	不明	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ			不明		Ⅰ	不明	
								古	新	不明					
天目類	天目茶椀						1	6	24	1	6	7	10		55
	小天目										2				2
椀　類	灰釉平椀					1	1	10	4	2	11				29
皿　類	灰釉緑釉小皿						2	8	10		2				22
	鉄釉緑釉小皿							10		1	1				12
	緑釉小皿										1				1
	灰釉折縁皿							1							1
	灰釉折縁中皿							2							2
	灰釉腰折皿								4						4
	灰釉底卸目皿			1											1
	灰釉小皿									1					1
	灰釉中皿							1							1
	鉄釉中皿							2							2
	灰釉端反皿												1		1
	灰釉緑釉はさみ皿												2		2
	無釉はさみ皿												1	2	3
盤　類	灰釉折縁深皿		1		2	2	2	1							8
	灰釉直縁大皿					1	2	3	2		2				10
	灰釉卸目付大皿							7	1						8
	灰釉盤類						3	2	1	2	5				13
	盤類									1					1
卸　皿	灰釉卸皿				1			1							2
擂　鉢								11	14	33		18	4		80
壺・瓶類	灰釉四耳壺			1						2	6				9
	鉄釉口広有耳壺										2				2
	須恵懸茶壺										5				5
	灰釉瓶子										1				1
	鉄釉耳付水注									1					1
	鉄釉瓶									1					1
	灰釉壺か瓶	1									6				7
	鉄釉壺か瓶										2				2
小壺・小瓶類	灰釉片口小瓶										1				1
	灰釉小瓶										1				1
	鉄釉小壺か小瓶										1				1
甕　類	鉄釉甕									1		1			2
神仏具	灰釉花瓶										1				1
	灰釉香炉形香炉							2			1				3
	灰釉将棚形香炉										1				1
	鉄釉将棚形香炉							1							1
	灰釉大型筒形香炉										2				2
煮沸具	錆釉土瓶の蓋										1				1
	錆釉土瓶										4				4
	錆釉土瓶か釜										7				7
	錆釉土瓶か鍋・釜										5				5
	錆釉内耳鍋							1			1				2
その他	灰釉合子										1				1
	灰釉小鉢					1		1							2
窯道具	えぶた											1			1
	匣鉢											1			1
不　明	灰釉不明										1				1
	錆釉不明										1	1			2
	無釉不明											3			3
合　計		1	1	2	3	5	11	70	60	46	81	32	18	2	332

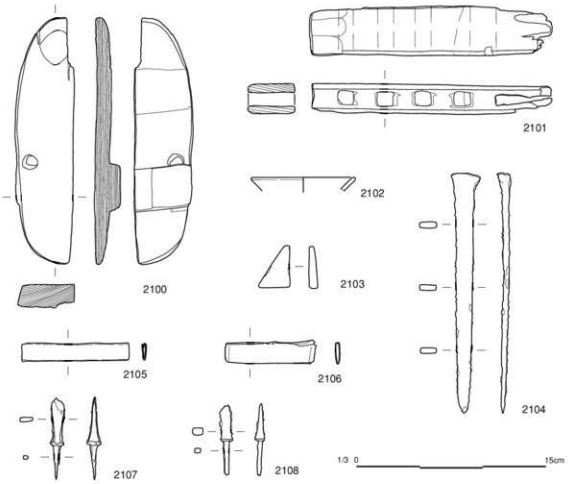


第96図　Ⅶ期遺物実測図



第97図　VII期遺物実測図

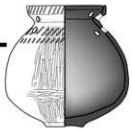
木製品-2099~2102・石製品-2103・金属製品-2103~2108



銭貨-2109~2120実寸大

第98図　Ⅶ期遺物実測図

Ⅵ まとめ



今回の川原遺跡の発掘調査の成果を、主要時期区分に則してまとめておきたい。

・遺跡は、矢作川中流域右岸の崖状に落ち込む旧河道や湿地に囲まれた東西約120m・南北約80mの狭小な微高地上に立地しており、この微高地を舞台に旧石器時代から戦国時代にいたる各種の遺構・遺物を確認することができた。

・狭小な微高地上に明確な人の営みが確認できるのは弥生中期に入ってからのことである。弥生中期の遺構は、広く墓域を構成する遺構群が展開する段階(Ⅰ期)とおびただしい数の竪穴住居が築造された2つの段階(Ⅱ期)に大きく区分して考えることができ、Ⅰ期は瓜郷式直前段階から古井式前半段階に、Ⅱ期は古井式後半段階(凹線文土器)に相当する。

・Ⅰ期の遺構は、土器棺墓、土壙墓、方形周溝墓など基本的に墓域を構成する遺構群からなる。墓域は当初、土壙墓と土器棺墓から構成されていたが、古井式前半段階で大きな変化を見せる。その変化は方形周溝墓群の登場であり、遺跡北部の微高地の縁辺に不定形ながら方形周溝墓が整然と並ぶ姿は新たな墓制の出現を象徴的に表現している。また、これらの扇の要として存在するSZ504の存在は、方形周溝墓というよりは、祭祀的な色彩を帯びた祭壇的な性格を有していたと推定され、新たな墓制の出現に伴い墓前祭祀の形態が変化していった様相を垣間見ることができる。

・Ⅱ期の遺構は、300軒にもおよぶ膨大な竪穴住居が確認された段階であり、古井式後半期(凹線文土器)に相当する。竪穴住居の築造は、当初、微高地上の北西部と南東部の2つの地点に集中して築かれたが、やがて微高地上のほぼ全域に、竪穴住居が築造されるようになる。それぞれの竪穴住居は4～8棟ほどの住居と重複関係を有するため、具体的にグルーピング等を検討することは困難であるが、大型竪穴住居の分布に注目すると、それらは微高地上の各所に点在しており、おおむね4～5程度のグループに分かれていたと考えられよう。また、今回の調査では焼失家屋を4棟確認しているが、それらはすべて最も新しい段階の住居であり、集落廃絶時(新たな墓域への転換)の様相を考える上で興味深い。

・Ⅰ・Ⅱ期の遺物は、土器、石器ともに質・量ともに豊富である。土器は、瓜郷式直前段階から古井式土器段階まで、その多くが遺構にともなう形で出土しており、今後の矢作川流域の土器編年を考えるうえで欠くことのできない資料といえよう。石器に関しても、各種の石器がまとまって出土しており、従来不明な部分が多かった矢作川流域の弥生時代石器の様相を知る良好な資料を得ることができた。

・Ⅲ期は弥生時代後期から弥生時代終末期・古墳時代初頭に所属する遺構群である。おおむね西暦1世紀から3世紀中ごろまでの250年間。前段階のⅡ期の遺構群とは大きく異なり、主要遺構が展開する微高地上は再び墓域として設定され、そこには巨大な墳丘墓が営まれる。

・墳丘墓はSZ01・SZ02・SZ03・SZ04・SZ06の5基が確認でき、その他SZ05とした「祭場」である方形壇状遺構が伴う。墳丘墓SZ01以外はすべて弥生時代後期前葉段階に設定されており、その後(弥生

時代後期中葉)に墳丘墓SZ01が新たに造営された。規模的に見てもSZ01(東西26.5m南北22m)とSZ02(東西26m南北23m)が中心的な墳丘墓と考えられる。各墳丘墓には多くの埋葬主体である墓壙が認められ、これに伴うかたちの土器集積が点在する。

弥生後期前葉段階では墓域に4基の墳丘墓が造営され、それぞれの区画内に墓壙を営む様子が窺える。しかし後期中葉を境にして墳丘墓の造営はSZ01に限定されていく。こうした在り方は矢作川中流域を中心とした伝統的な地域社会の変貌を推察することができるものと思われる。つまりより強力な共同体経営をつかさどる特定集団の排出であり、彼らの特定墓がSZ01に象徴される大型の墳丘墓と考えられる。

・墓壙は墳丘墓SZ01・SZ02・SZ04で合計32基を確認でき、SZ02の中心主体部と考えられるSK09は最大の規模を有し、長軸4.4m短軸1.25mを測る。墓壙の内部には棺痕跡が確認できる。その形状は側板や小口板が傾斜をもち、棺底部が平らな「槽形木棺」であると復原できる。すべての棺がこの種の形態に統一されており、当地域を含めた東海地域の伝統的な棺形態として新たな位置づけが必要である。また頭位の推定によれば、おおむね弥生後期は東西方向を基本とし、後期中葉を中心として東頭位が優先されたようである。

・土器集積は墳丘墓およびその周辺部において確認することができる。その在り方によりA群(墓壙上集積)・B群(墳丘内の土器処置場)・C群(特定の土器処置場)の3つが存在し、方形壇状遺構としたSZ05を含めて、墓域における祭祀行為の具体的な様子を復原できる重要な手掛かりを得たものと思われる。

・大溝は墓域を画する施設として重要な意味をもっていた。墳丘墓が営まれた微高地は、東西120m南北80mの大きさをもち、北側の碧海台地との間には湿地帯が広がり、西側はNR03とした大溝により区切られていた。また東側では深く大きな旧河道により遮断され、孤立した環境がそこに出現した。特定集団墓はこの空間に営まれることになる。弥生後期前葉を機に整備された大溝からは多くの土器や木製品が出土しており、溝の改修や護岸施設なども存在することが明らかとなった。

・川原上層諸様式について。墳丘墓およびその周辺部に営まれた土器集積と大溝内出土資料を中心として川原上層Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式を設定する。

川原上層Ⅰ式は弥生時代後期前葉を中心とした時期に相当し、整状長脚の有段高杯やワイングラス形高杯に象徴される土器群である。矢作川流域では明確に抽出できえなかった土器様式でもある。川原上層Ⅱ式は濃尾平野の山中様式の影響下に誕生したものであり、山中型高杯や加飾広口壺に象徴される土器群であり、同じく山中型台付甕の定着と変容が特徴的である。続く川原上層Ⅲ式は廻間様式の参入により誕生した土器様式と考えられ、その多くの器種の原型は廻間Ⅰ式前半段階に求めることができる。

川原上層諸型式は弥生時代後期から終末期・古墳時代初頭にかけて、矢作川中流域に誕生した独自の様式とその変遷を所有する土器群であると評価したい。

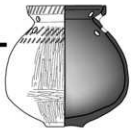
・Ⅳ期は、古墳時代中期に相当し、墳墓を中心に竪穴住居・掘立柱建物・溝などが配置された墓域の様相が確認された。SD08より出土した琴形木製品は県内で2例目の確認例となるものであり、特筆することができる。

・Ⅴ期は古代であり、D区で竪穴住居が確認されたが、BC区ではすでに削平されており、その展開等は不明な部分が多い。

・Ⅵ期・Ⅶ期は、中世から戦国時代に相当するが、微高地の南側に崖状に落ち込む旧河道上で、旧河道の整形、その後の水田遺構などを確認することができた。

付論5

川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定



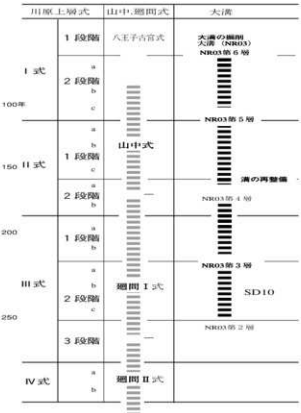
川原上層式について

川原遺跡の弥生時代後期から終末期(古墳時代早期・初頭)にかけての遺構群のまとまりとは、すなわち墳丘墓を中心とした墓域の設定にあった。そしてこれらの遺構に伴い墳丘墓およびその関連遺構からおびただしい土器が出土している。さらに墳丘墓上には土器集積が点在し、また特定の土器集積場も設置されている。こうした一括資料を基にして川原上層諸様式を設定したい。取り扱う土器は全て今回の報告資料のみであり、川原遺跡上層から出土した土器群である。なお川原上層式として一括できる様式は存在しない。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式は個別の独立した土器様式と考えておく必要がある。したがってここでいう「川原上層式」とは川原遺跡で設定した土器様式の総称として便宜的に使用するに留めたい。さらに問題点として、調査区においては全て墓域出土資料であり、集落遺跡での土器様式の在り方との整合性は課題として残る。

遺構資料により大きく三つに区分できる。まず第1は、墳丘墓SZ02およびその関連遺構から出土した土器群である。SZ02東溝・南溝、SZ04溝資料などがあげられる。またSZ02などの遺物集積資料も加えることができる。第2は、大溝の第5層を中心として出土した土器群である。このまとまりは大溝NR03以外には見られないが、一部のSZ01下層資料も付け加えることができる。最後に、墳丘墓SZ01およびその関連遺構。SZ01にはSX103・SX107など多数の土器集積遺構が存在し、比較的まとまった土器の出土が見られた。さらにSX101の土坑出土の良好な資料群が存在する。結果的にこれらの資料を中核として川原上層諸様式を設定した。

それぞれ川原上層Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式と大きく3つにまとめる。西三河地域の矢作川中流域を代表する土器様式と考えたい。ただし矢作川下流域や岡崎平野の遺跡出土土器との明確な比較検討は行っていない。また挙母盆地における土器様式との比較も、また重要な課題として残る。

弥生時代後期初頭から弥生時代終末期(古墳時代初頭)の資料であり、西暦1世紀から3世紀までを含むことになる。尾張地域では八王子古宮式・山中式から廻間Ⅰ式期に併行しよう。Ⅰ式を2段階に、Ⅱ式を2段階に、Ⅲ式を3段階に細分し、さらに各段階内を様相差(a・b・c)として細分しておいた。様相差はあくまで便宜的であり、今後の資料の増加をもって小様式の設定を行う必要がある。



第1図　編年対照表

分類と変遷

分類の基準を、慣習的に使用されている高杯・壺・甕・鉢・器台といったものに限定した。墓域出土資料という前提が存在し、かつそれぞれの様式が個別の独立した土器様式である点を踏まえ、一括して分類する基準は現状では見いだしにくい。したがって全体の形状を優先させ、詳細な技法や加飾等は補完的に使用することになる。

有段高杯（弥生時代後期から終末期の高杯）

有段高杯A～Nまで13に分類した。まず川原上層Ⅰ式では、高杯A・B・Cとした盤状長脚の有段高杯を基軸として分類できる。この形状は言うまでもなく弥生時代第Ⅴ様式前葉段階の高杯の範疇で考えることができる。直線的に立ち上がる盤状の短口縁を有する高杯A、大きく外傾する高杯B、口縁端部が明瞭に外反する高杯Cが見られ、さらに詳細に分類を多様化することも可能である。これらに混在してⅠ式2段階になると高杯D・Eが登場する。高杯Dは口縁端部のみが外方へ拡張するもので、1169は座光原式や箱清水式に近い形状を留める。高杯Eは本来が有段高杯ではなく、別の系譜をもつ高杯と思われる。ここでは便宜的に取り扱う。杯部下半が大きく内彎し、大きく外傾する口縁部を有するもので、やや特異な形状を留める。

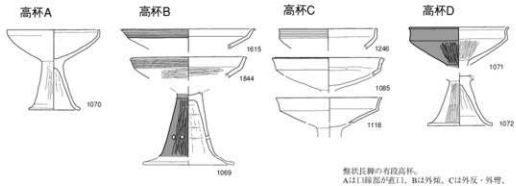
川原上層Ⅱ式では盤状長脚の有段高杯にかわって、外反口縁外反脚の加飾外反有段高杯が盛行する。高杯Fとしたもので、山中様式の有段高杯（山中型高杯）に共通する特徴をもつ。脚部が大きく緩やかに開く山中式とは異なり、柱状形態を残す脚部と、そのほとんどの杯部外面に波状文を施すことが多いという特色が見られる。全体の形状は山中型高杯に類似するも、地域的な特色も色濃く認められる。Ⅱ式2段階となると高杯G・Hという興味深い器種が加わる。高杯Gは川原上層Ⅱ式に固有の型式と考えられる。杯部の口径が大きく、口縁部が高く深い。高杯Hは高杯Gの特色を残しつつ短脚となる。座光寺原式の中に類似品を探すことが出来る。

川原上層Ⅲ式になると高杯K・Jという特徴的な有段高杯が盛行する。高杯Jは内彎志向を保有する有段高杯で、この系列的な変遷が川原上層Ⅲ式においても見られる。その中で高杯Kは川原上層Ⅲ式固有の型式と考えられる。脚部が大きく、また高杯Jと同様に杯部からただちに脚部が始まる形状をもつもので、西三河地域の特徴を鮮明にする型式である。高杯Lは高杯Kを基に生み出されたものであるが、杯部の下段が他の高杯に比べて深く、かつ直線的で外傾する特徴が見られる。この型式の高杯Lは尾張地域にも東三河地域にも見いだされないものであり、独自の形態と考えられる。高杯Mは高さに比べ口縁部が大きく、下段部径も大きい。やや全体に圧縮された有段高杯の形状を留める。Ⅲ式3段階の特徴的な高杯と考えられる。続くⅣ式では内彎志向が大きく崩れ、外反脚で外傾する高杯Nに入れ替わることになる。

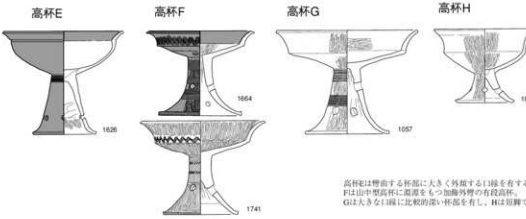
その他の高杯

高杯P・Q・Rはワイングラス形高杯の範疇で考えることができる。口縁部が玉縁・段状を呈するものを高杯Pとし、その他を高杯Qと一括した。高杯Qは本来が複数の系列が想定でき、その変化の方向性は杯部最大径の下降にある。また短脚で深い杯部に特徴的な外彎口縁を有するものを高杯Rとして一括した。なお西三河地域には高杯R2とした広口状のワイングラス形高杯が主体を占める。あるいはR2型式が、三河地域以東の独自の型式である可能性も考慮したい。山中遺跡の報告書では高杯B3としたものである[1]。さらに箱状の杯部をもち、明瞭な有段をもたない有稜高杯を高杯Sとしてまとめる。川原上層式では大きく八字状に開脚する傾向が強い。数が少なく変遷が曖昧な椀形高杯を、高杯Tとして一括しておく。

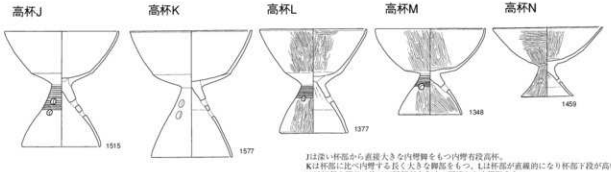
1）赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集



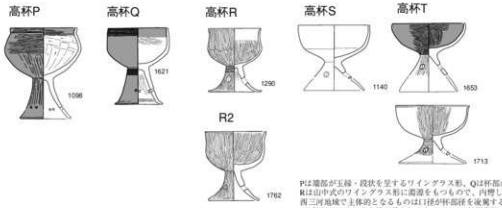
盤状長脚の有段高杯。
Aは口縁部が直口、Bは外拡、Cは外反・外彎、
Dは端部が屈曲し拡張・外傾する。



高杯Eは彎曲する杯部に大きく外拡する口縁を有する。
Fは山中型高杯に端源をもつ加飾外彎の有段高杯。
Gは大きな口縁に比較的深い杯部を有し、Hは短脚で深い杯部をもつ。



Jは深い杯部から直接大きな内彎脚をもつ内彎有段高杯。
Kは杯部に比べ内彎する長く大きな脚部をもつ。Lは杯部が直線的になり杯部下段が高い。
Mは杯部の深さに比べ口径部が大きく、圧縮した内彎脚をもつ。
Nは外反志向の杯・脚部を有する。



Pは端部が玉縁・段状を呈するワイングラス形。Qは杯部が直口・内彎するワイングラス形。
Rは山中式のワイングラス形に端源をもつもので、内彎し端部が微妙に外彎する。
西三河地域で主体的となるものは口径が杯部径を凌駕するR2形式。
Sは杯部にゆるやかな稜が見られるもので、Tは梶形高杯。

第2図　分類1

壺

川原上層Ⅰ式では、口頸部が大きく受口状になる壺Aと、加飾広口壺で扇状文を主体とする壺Bをもって代表させることが可能である。壺Bは頸部から口縁まで大きく高く外反する形状をもち、口縁端部内面にはわずかな平坦面をもつものも見られる。川原上層Ⅱ式になると加飾広口壺で、口縁部が拡張し擬凹線を多条化させた壺Cが盛行する。ここでは量的な問題からバレススタイル壺を含めて考えることにした。壺Dは小・中型の直口壺の系列であり、直線文を施すものが目立つ。壺Eはやや特殊な形状を留めたもので、比較的小さな口縁部に幅広の拡張端部を有する中型壺である。

川原上層Ⅲ式は壺F・H・Gに代表される中型の長頸・短頸壺(F・G)や無文の大型広口壺(H)が主体を占める。壺Gの中には口縁部に屈曲部をもち、加飾を施したものも見られる。壺Gが川原上層Ⅲ式を特徴づける器種と思われる。その他に口頸部が内彎する壺Jが見られる。

台付甕

川原上層式の甕は全て台付甕であり、平底をもつ甕は認められない。

川原上層Ⅰ式では甕B・Cを主体とする。甕Aはタタキ技法をもつ前様式からの系列甕である。また口縁端部に刺突文を施し、深鉢状の形態を残す甕Z(編年表82頁)も同様なものと考えたい。甕Bは球形をもつ体部から、連続的に頸部に向かう口縁をもち、口縁端部は厚く、はね上げ状を呈する。外面はナデ調整で内面は頸部直下まで丁寧なケズリを施す。甕Cは甕Bに比べて薄く外傾する口縁部をもつ。外面には粗いハケメを施すものが一般的である。甕Cは川原上層Ⅰ式2段階後半期の特徴的な器種であり、固有の型式と思われる。

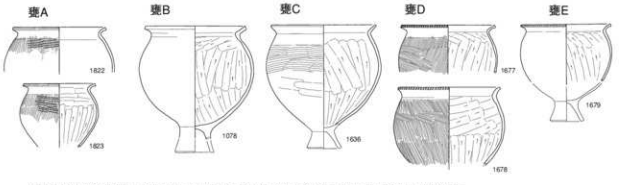
川原上層Ⅱ式になると甕Dが主体となる。甕Dは口縁端部に刺突文を施し、外面にはタテあるいはナナメ方向の細かいハケを施す。内面調整はケズリが見られる。尾張地域の山中型甕に類似する。なお甕Eは甕Bを母体にし、甕Dからの影響を受け出現したものと推測できる。口縁端部の刺突文と外面ナデ調整が特徴的な器種である。

川原上層Ⅲ式になると、新たに内彎口縁を持つ甕で、口縁部が体部最大径を凌駕する甕F及び凌駕しない甕Gが出現する。さらに甕H・J・Kが出現して一気に多様化する。甕Jは川原上層Ⅲ式固有の型式であり、甕Dを母体にして生み出されたもので、内面のケズリ調整にかわってナデ調整に変化し、口縁端部が面を持つものからはね上げのみの整形になる。甕KはS字甕を除く有段口縁台付甕を一括した。甕Fや甕Hには外面調整としてハケメを施さず、西三河特有のナデ技法を多用するものも多々見られる。なお甕Lは全体の形状が不明であるが、体部から連続した頸部を有し、ナデ調整を多用する。最大の特徴は器壁が極めて薄いもので、軽量薄甕の範疇で捉えられる可能性が高い。全体の形状が把握できないが、矢作型(軽量薄)甕と仮称しておきたい。

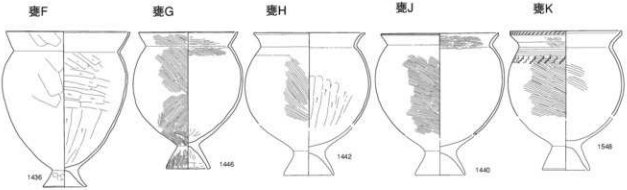
川原上層Ⅲ式期の甕の特徴は、著しい内彎化とはね上げあるいは肥厚状の口縁端部を持つ点と、独自のナデ技法を所有する点にある。

その他の器種

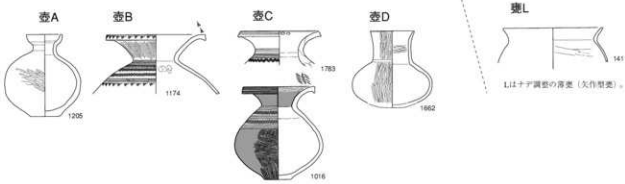
鉢において特色的なものは小型直口鉢である。川原上層Ⅲ式1段階に集中して出土している。さらに片口鉢には朱付着土器(1239)も存在する。また同じく川原上層Ⅲ式1段階にかけて小型精製土器群が見られる。小型の丸底系土器(1659・1657)や甕状の小型土器(1524・1525)など多様である。器台は川原上層式に一定量存在することが明らかとなった。特に川原上層Ⅲ式には、尾張地域の東海系器台と同様な系列的変遷が認められる。



Aは前様式からのタタキ台付甕、Bはナデ調整のはね上げ口縁、Cは薄手のく字口縁で、外面にヨコ方向の粗いハケを施す。
Dは山中型台付甕に源源をもつもの、Eは口縁端部に面をもち、刺突文を施すナデ調整台付甕。

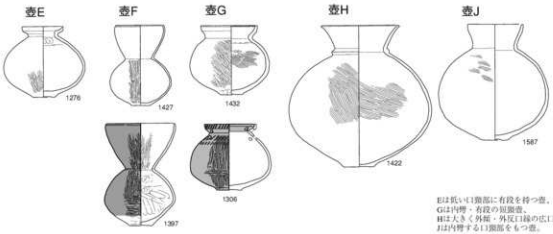


Fは口径が体部径を凌駕する内彎口縁台付甕、Gは内彎口縁をもつが体部径が口径を凌駕するもの。Hは外反口縁、Jははね上げ口縁、Kは有段口縁台付甕。



Lはナデ調整の薄甕（矢作型甕）。

壺Aは有段口頸、Bは垂状文を多用する加飾広口壺
Cは口縁部に擬凹線を多条化する加飾広口壺。
Dは直口・長頸壺。



Eは低い口頸部に有段を持つ壺、Fは内彎長頸壺。
Gは内彎・有段の短頸壺、
Hは大きく外傾・外反口縁の広口壺。
Jは内彎する口頸部をもつ壺。

第3図　分類2

川原上層Ⅰ式

盤状長脚の有段高杯である高杯A・B・C及びワイングラス形高杯P・Q、壺では扇状文加飾広口壺B、台付甕は甕B・Cを代表して川原上層Ⅰ式を設定する。遺構としては墳丘墓SZ02およびその関連遺構。川原上層Ⅰ式は1段階と2段階に大きく区分できる。さらに2段階はa・b・cの三つの様相を想定しておきたい。Ⅰ式1段階は、明瞭な一括資料に恵まれないが、高杯Aの口縁部が明瞭な段を持たないか、極めて短い型式のものが主体を占め、脚部が長く脚端部が急速に外反する形状を持つ。甕・壺においても前様式のものが残存する。2段階になると甕Bが深鉢状から球形状に変化し、甕Aもほとんど見られなくなる。壺は扇状文を多用する壺Bが盛行する。ワイングラス形高杯Qが盛行し、盤状長脚有段高杯に各種型式が存在し、あるいは分化していく可能性がある。さらに地域的な様相も認められる。なお高杯Qは2段階前半では、杯部最大径を中央部付近に置く資料が多く、基本的な変化として、最大径が徐々に低下する動きが見られる。脚部は直線的に大きく開く傾向が強くなる。2段階の後半になると高杯Dや高杯Eが共伴し、高杯Aがほとんど見られなくなる。高杯Fの出現はSX201の状況から2c段階を想定しておきたい。甕Cも2段階後半を特徴づける器種と思われる。

甕B・Cは川原上層式固有の型式と考えられる。また高杯Eは現状では川原上層Ⅰ式2段階後半の特徴的な型式と思われるが、量が少なく不明瞭である。

外来系土器と考えられるものは2段階の資料に見られ、まず玉縁状口縁を持つ高杯1135や、同じく高杯1628などは丹後系の可能性が考えられる。また高杯Fである1629は尾張系(山中式)、高杯Dの1169は中部高地系と類似する特徴が見られる。口縁端部が受口状となる甕1608は北伊勢系の可能性が考えられる。

川原上層Ⅱ式

川原上層Ⅱ式の母体となるイメージは明らかに尾張低地部の山中式中段階の土器群である。川原上層Ⅱ式は高杯Fに象徴され、ワイングラス形高杯R2、甕D及び甕B、壺では加飾広口壺で擬凹線を多条化させた壺Cや直口壺Dによって設定できる。1段階と2段階に二分する。

川原上層Ⅱ式1段階は大溝第5層の資料を充て、a・b・cの三つの様相を想定しておきたい。高杯は川原上層Ⅰ式が多様な型式が混在するのに比べて、極めて単純化し、高杯Fによって独占されるといった大きな変化が見られる。加飾外反有段高杯Fは、杯部上段の外面には必ず波状文が施される。1段階後半になると、波状文を施した後にタテミガキが加わる。脚部が縮小化し、杯部からただちに大きく拡張する端部をもつ形態に移行する。山中式中段階の資料とは波状文の多用性と杯上段部の高さ、あるいは長脚の柱状化(川原上層Ⅱ式)において個性化が見られる。ワイングラス形は山中式では客体であった高杯R2(口縁がそのまま外傾し最大径を保つ)がむしろ主体を占める。壺の施文はⅠ式の扇状文から波状文や刺突文に変化する。甕Dは山中型台付甕を母体とするが、1段階前半ではⅠ式に盛行した甕B・Cが多々見られる。さらに甕Bを基本にして、甕Dに影響された甕Eが共伴し、多様化する傾向が見られる。1段階後半では外面にナデ調整を多用する甕類の多くが消失し、甕Dが主体となる。

川原上層Ⅱ式2段階を特徴づける資料はSX111・SX205に見られるような、高杯G・Hである。高杯Gは口縁部が大きく杯部上段が高く深いもので、川原上層Ⅱ式に固有の型式と思われる。杯部が深い高杯Hは伊那谷地域にも類似する資料が見られる。この型式がどの地域に主体をもつかは、検討の余地がある。いずれにしろ、Ⅰ式からⅡ式にかけて伊那地域との関係は注目したい。加飾広口壺Cには尾張低地部からの影響で標準的なパレス壺が加わる。また興味深い器種として台付鉢が散見できるものこの段階の特色である。

川原上層Ⅲ式

川原上層Ⅲ式は、有段高杯J や個性的な形態をもつ高杯K・L、台付甕F・G・H・J、壺では広口壺H や短頸壺Gそして内彎長頸壺F、さらに東海系器台によって代表される土器群。墳丘墓SZ01およびその関連の土器集積に良好な一括資料が多く、もっとも充実した内容を提示できる。Ⅲ式を1段階から3段階に細分し、さらに1段階ではa・bに、2段階ではa・b・cの様相が想定できる。

川原上層Ⅲ式1段階は、有段高杯J とK の出現が象徴的であり、加飾外反有段高杯との明瞭な違いが歴然となる。有段高杯J は尾張低地部の廻間様式からの影響によって出現したことは明らかであり、これを基に独自の型式である高杯K を生み出したものと思われる。高杯K は深く大きな杯部を有し、杯部からただちに大きな内彎脚が製作される。因に廻間様式では、脚部は柱状から内彎脚へ移行する製作を志向している。有段高杯の脚部の透孔は2段3方向の円形が一般的である。甕は一気に多様化し、中でも台付甕F・G の内彎する口縁部が多く見られる。この口縁端部には丁度、布留式甕の口縁部のような肥厚面すら認められるものもある。さらに端部がはね上げ状を呈する甕J も出現する。有段口縁を有する甕K も散見できる。壺にはパレス壺に影響された加飾広口壺C が見られ、加えて広口壺H や短頸壺G、内彎長頸壺F と器種が豊富に見られる。また小型直口鉢と小型精製土器群が出現する。これらの器種の多くが、廻間Ⅰ式前半期のデザインをもつものである点は明らかであり、川原上層Ⅲ式の出現は廻間Ⅰ式1段階の中に求める必要がある。

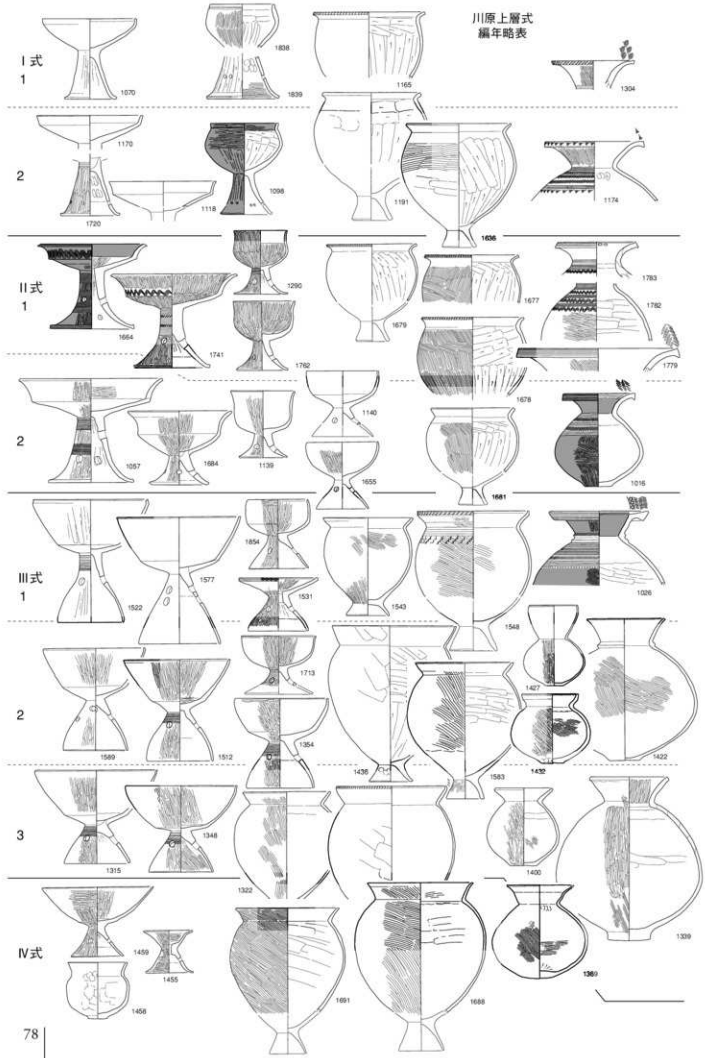
土器集積SX108 とSX107 を標識として1段階a・b の様相差を想定したい。

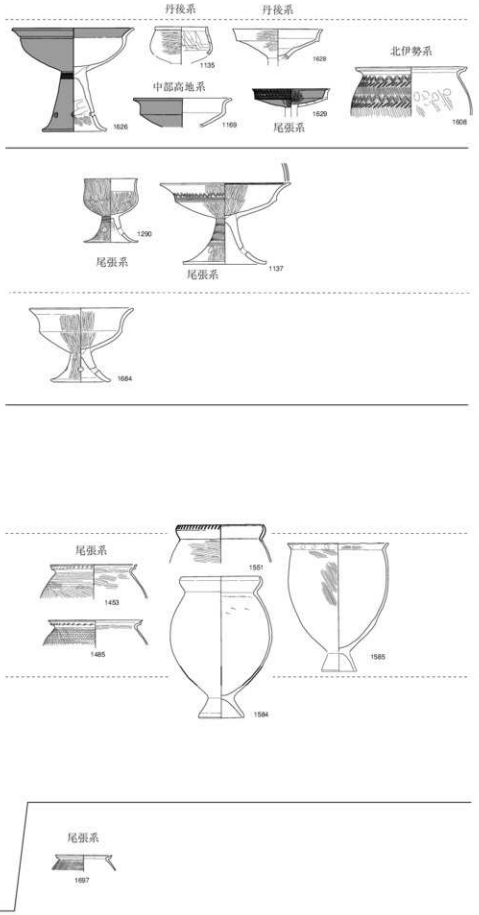
川原上層Ⅲ式2段階は1段階で出現した器種の型式組列に基づき設定できる。SX101 の下層・中層・上層資料に土器集積SX103・SX104・SX106・SX109 を加えて三つの様相に区分した。川原上層Ⅲ式2段階の固有の型式である有段高杯L や深い杯部をもつ高杯S が特徴的な器種となる。甕ではK が衰退し、球形体部をもつ1段階に比べて、体部が長胴化し、甕F・H のような容量が増加した大型の台付甕が目立つようになる。尾張からはS 字甕A 類が共伴する。壺では中型壺である壺F や壺G が盛行し、川原上層Ⅲ式2段階を特徴づける型式として成長する。壺の体部最大径の下降はⅢ式2段階後半に始まる。

川原上層Ⅲ式3段階以降の資料は急速に減少し、不明瞭となる。3段階を特徴づけるものは高杯M やL に見られるような杯部の深さに対する脚部の著しい低下にある。杯部から直接大きく内彎脚に移行する形状は特徴的であり、脚部に直線文を施す資料も多い。高杯M の杯部口径が大きくかつ下段径が大きい形態は、固有の型式とも読み取れる。台付甕は大型品が激減し、口縁の内彎化も低下する。体部の最大径が体部中位から上位へ移動する。壺類は体部最大径が下降したいわゆる下膨れ形態に統一される。外来系土器はS 字甕以外にはほとんど見られない。

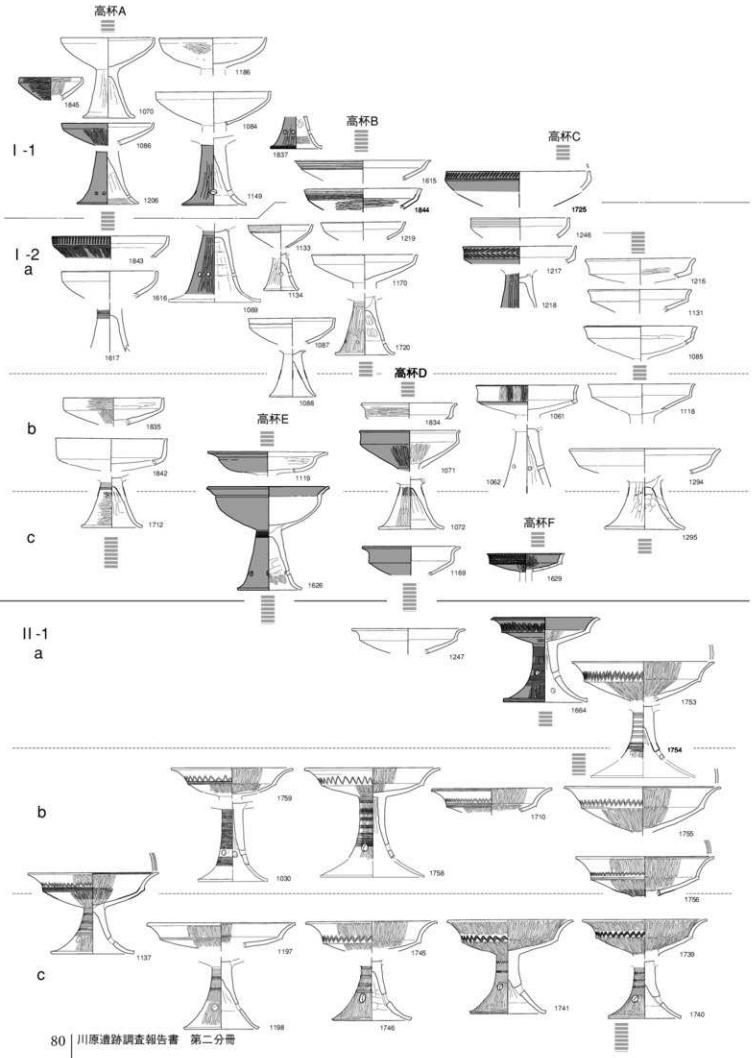
川原上層Ⅲ式以後

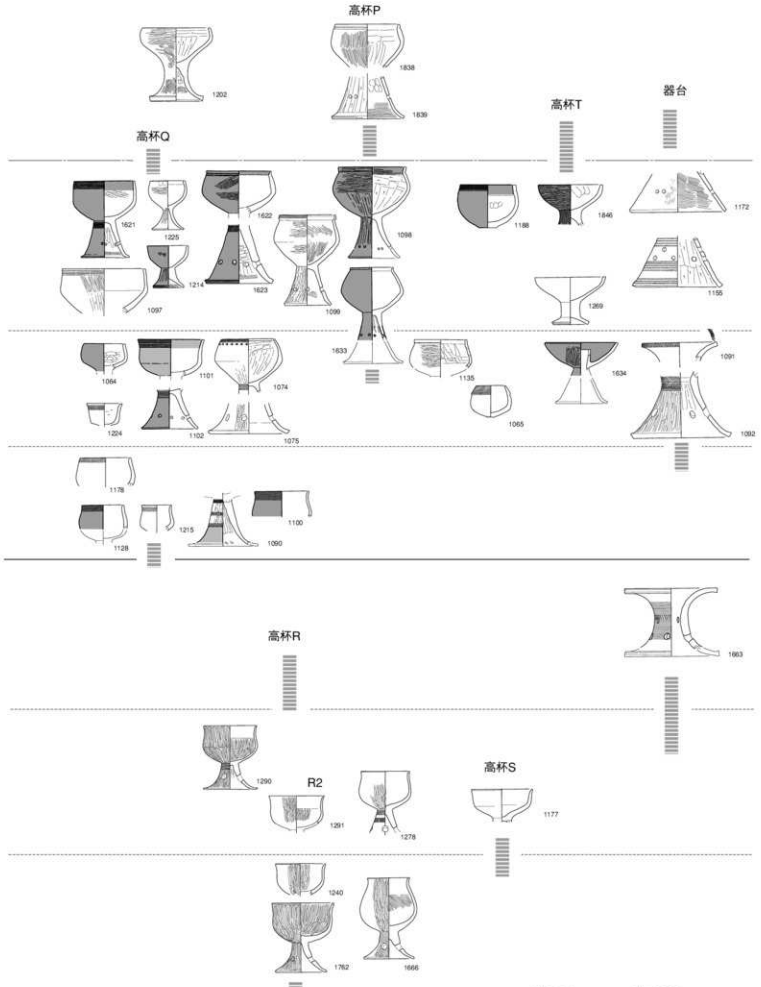
遺構の在り方からもⅢ式3段階以降、不明瞭になり、所属する土器群も急速に減少する。土器集積SX206 とSX102 をもって川原上層Ⅳ式と仮称しておきたい。この土器群の有段高杯は、明らかに内彎化が消失しており、外反・外傾する高杯N に大きく変化したことがわかる。甕は川原上層Ⅲ式期の特徴である台付甕に加え平底甕が見られるようになる。台付甕は口縁の内彎化が消失し、大きく強く外反する形態となる。ハケメは、ヨコナデを施す部分が省略され、口縁外面まで残す傾向が強い。こうした台付甕の形態的特徴により、Ⅲ式とは明確に区分できる。またS 字甕B 類との共伴が確認できる。


川原上層式
編年略表
Ⅰ式
1
2
Ⅱ式
1
2
Ⅲ式
1
2
3
Ⅳ式

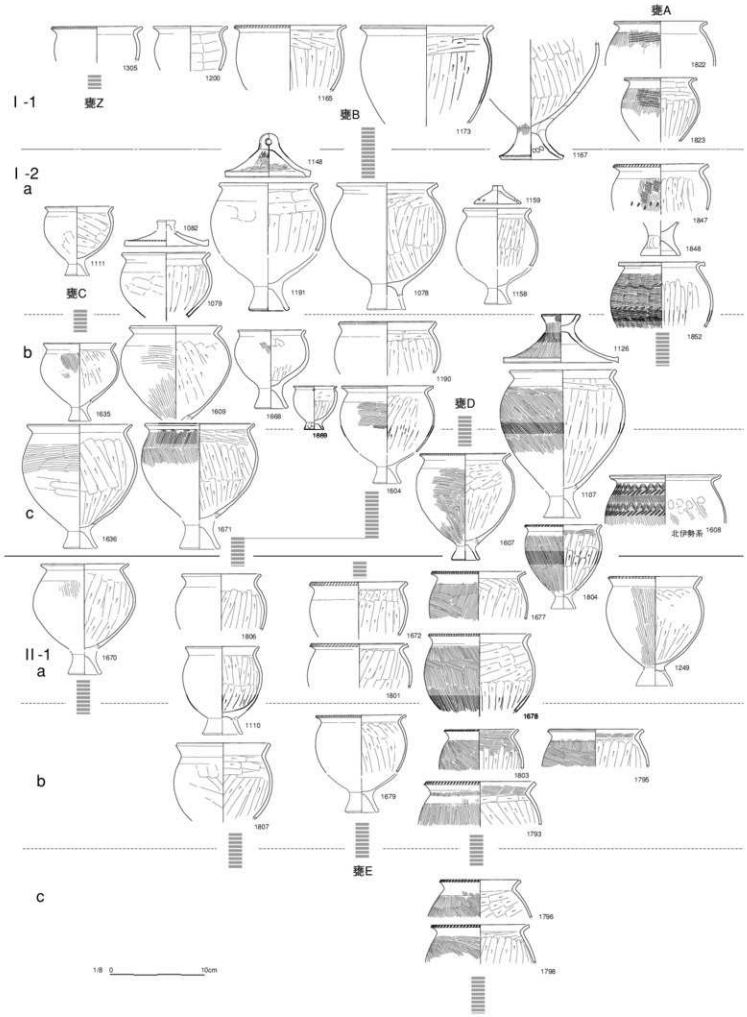


第4図　川原上層式編年暗表（土器 1/8）

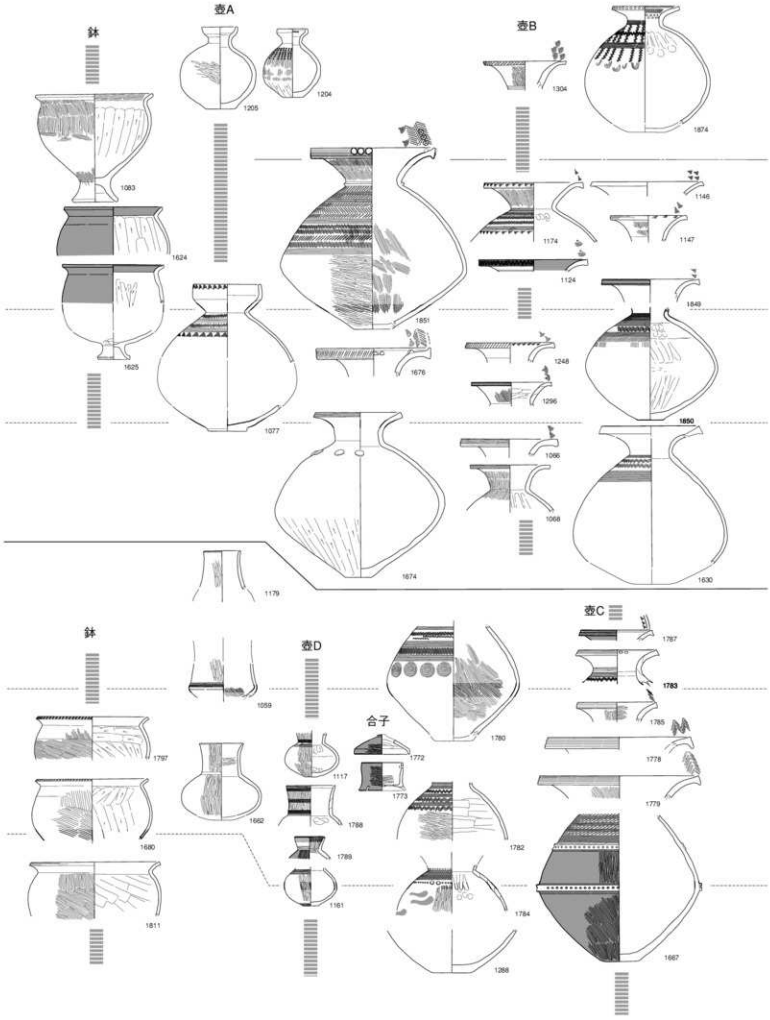

高杯A
高杯B
高杯C
高杯D
高杯E
高杯F
I -1
I -2
a
b
c
II -1
a
b
c

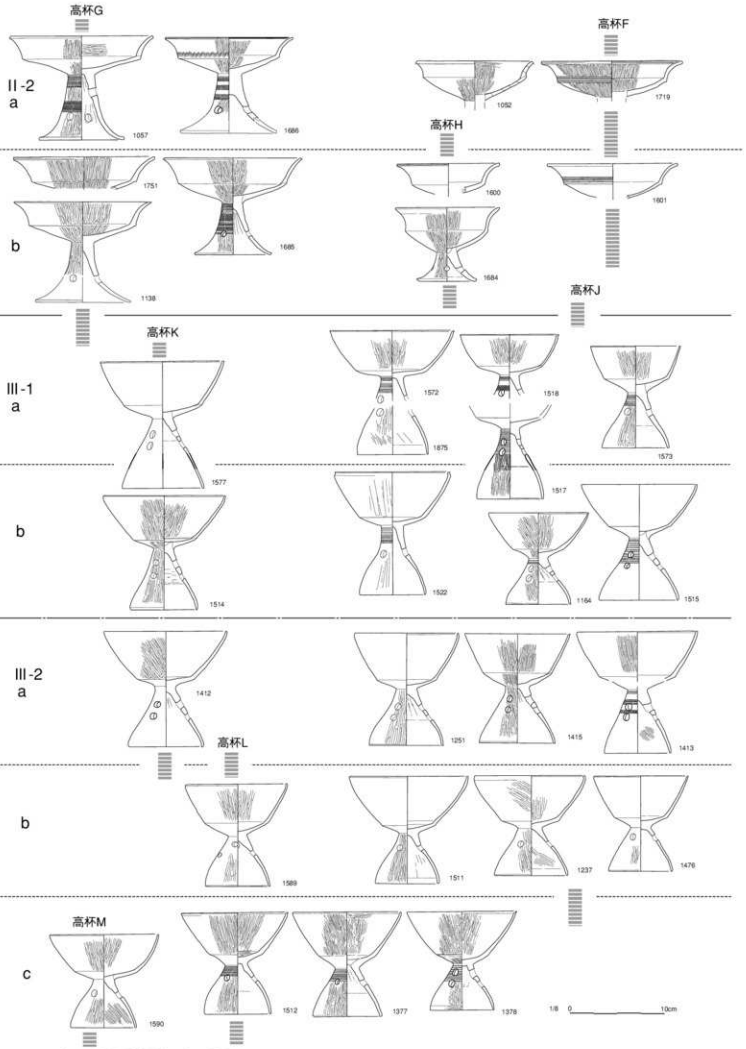


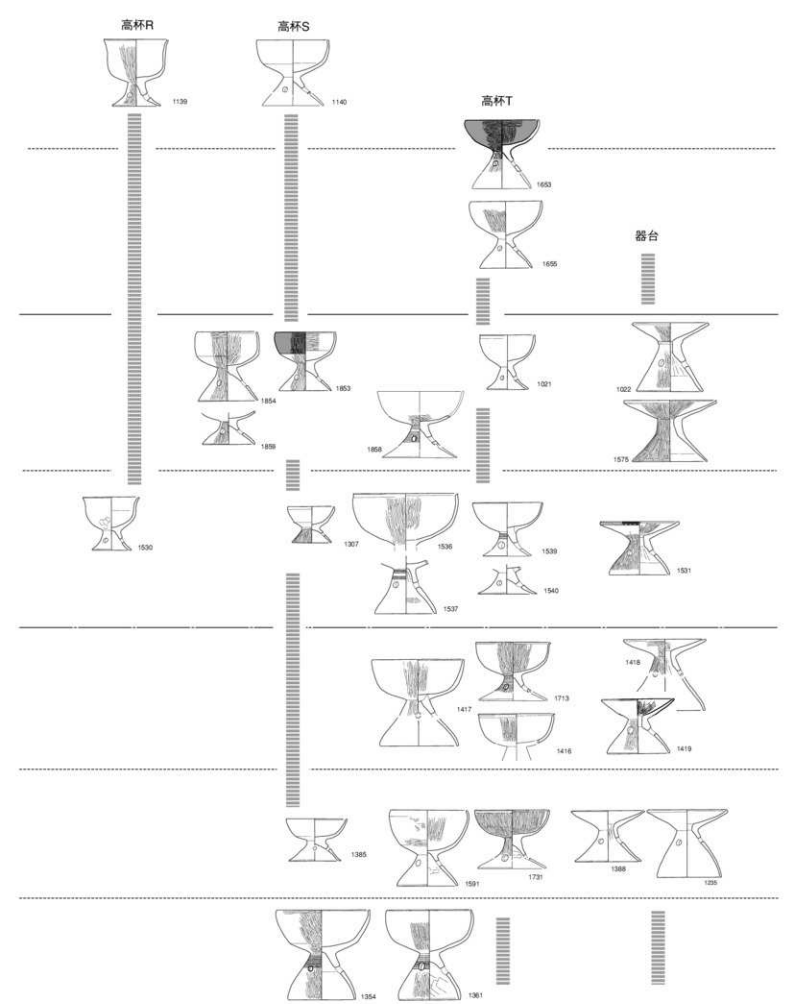
第5図　川原上層式編年表（土器 1/8）

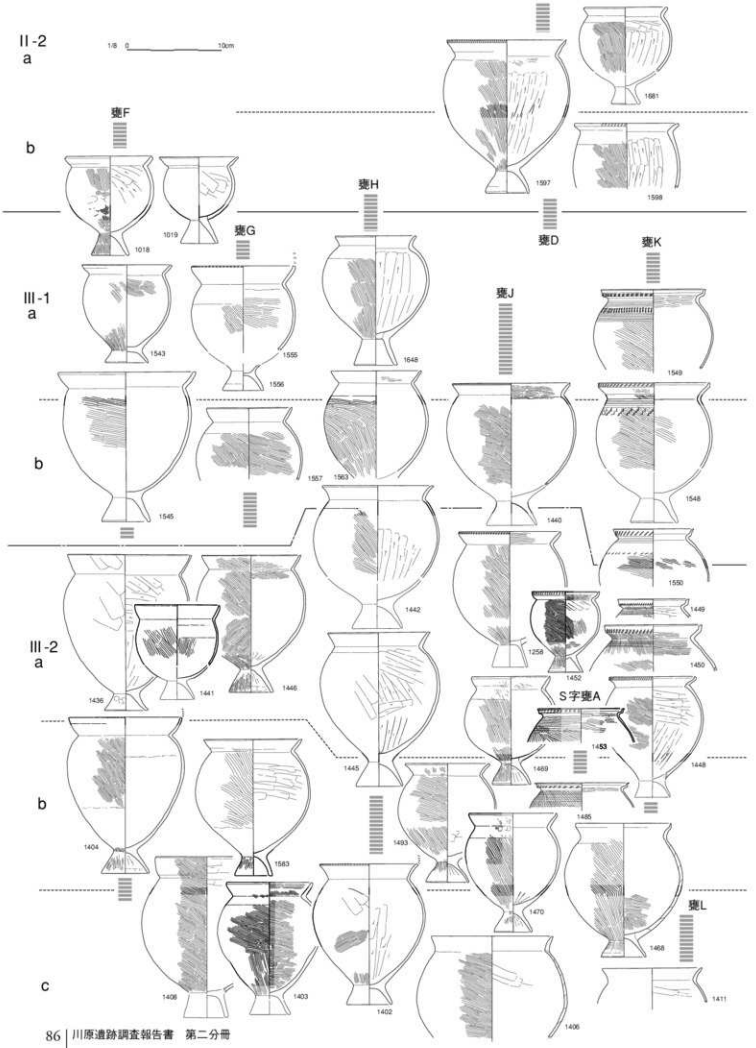


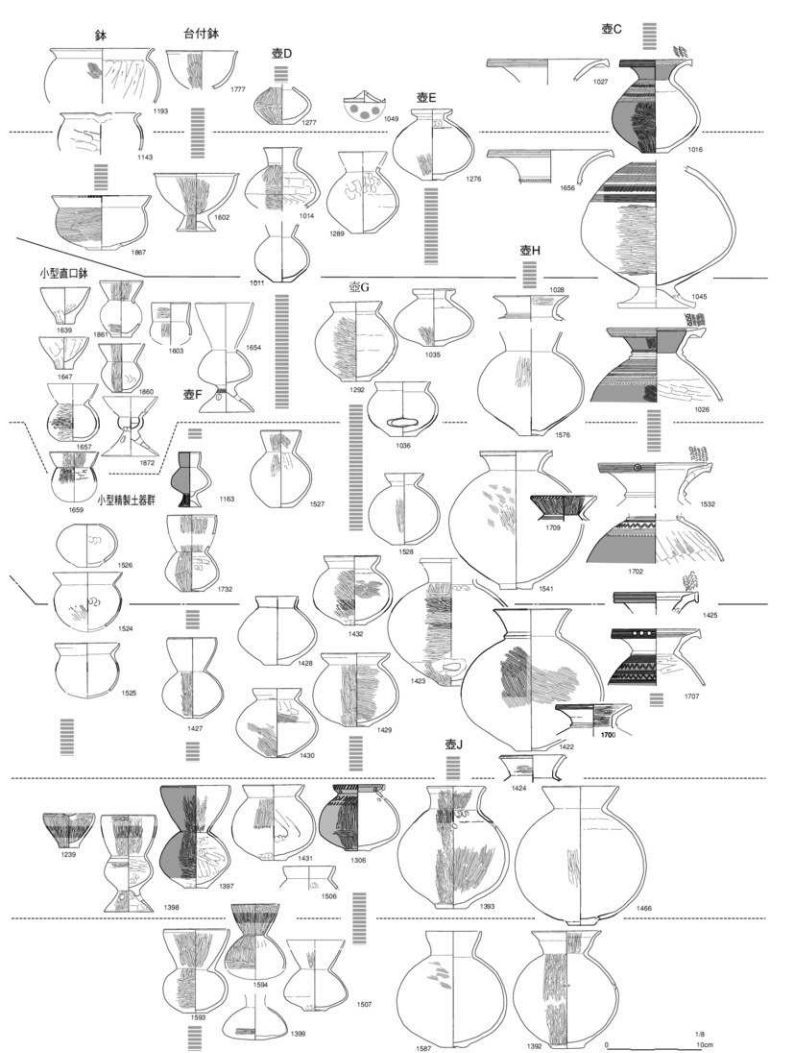
I -1
I -2
a
b
c
II -1
a
b
c
甕A
甕B
甕C
甕D
甕E
甕Z
北伊勢系
1305
1200
1165
1173
1167
1822
1823
1148
1111
1082
1079
1191
1078
1159
1158
1847
1848
1852
1126
1635
1609
1668
1669
1190
1604
1107
1636
1671
1607
1608
1804
1670
1806
1672
1677
1801
1678
1249
1110
1803
1795
1807
1679
1793
1796
1798
1/8 0 10cm

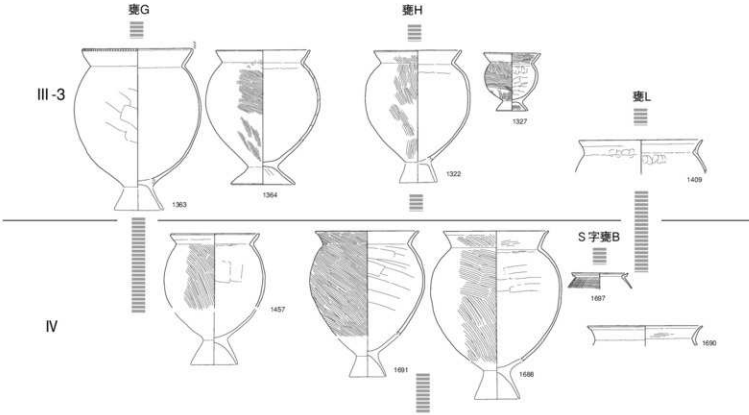

鉢
壺A
壺B
壺C
壺D
合子
1063
1624
1625
1205
1204
1077
1304
1874
1174
1124
1146
1147
1849
1851
1676
1248
1296
1066
1068
1850
1630
1674
1179
1797
1680
1811
1059
1662
1117
1788
1789
1161
1780
1772
1773
1782
1784
1288
1787
1783
1785
1778
1779
1667

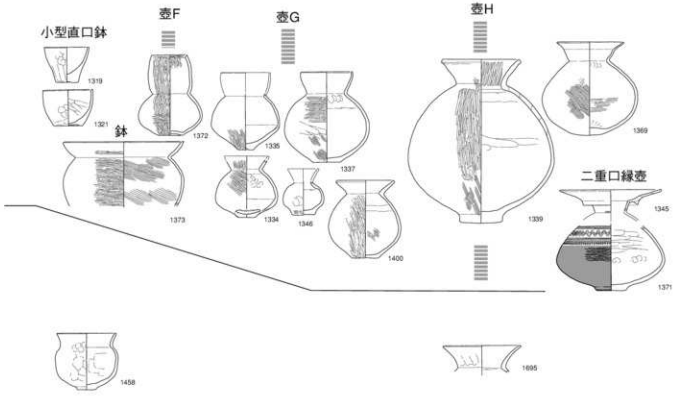

高杯G
高杯F
高杯H
高杯J
高杯K
高杯L
高杯M
II-2
a
b
III-1
a
b
III-2
a
b
c
1057
1686
1052
1719
1751
1686
1600
1601
1138
1684
1572
1518
1573
1875
1577
1517
1514
1522
1164
1515
1412
1251
1415
1413
1589
1511
1237
1476
1590
1512
1377
1378
1/8
0
10cm

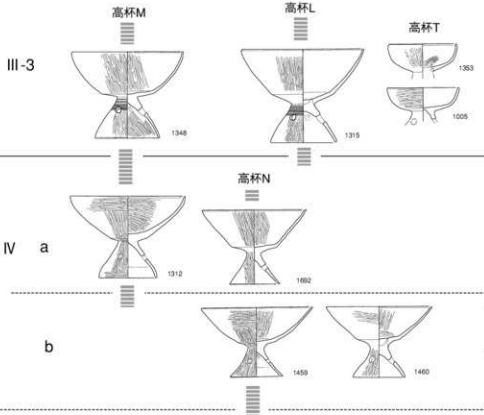

高杯R
高杯S
高杯T
器台
1139
1140
1653
1655
1854
1853
1858
1859
1021
1022
1575
1530
1307
1536
1537
1539
1540
1531
1417
1713
1416
1418
1419
1385
1591
1731
1388
1255
1354
1361


II-2
a
1/8 0 10cm
b
甕F
1018
1019
甕G
甕H
甕D
甕K
1597
1598
1681
III-1
a
1543
1555
1556
1648
甕J
1549
b
1545
1557
1563
1440
1548
1550
III-2
a
1436
1441
1446
1442
1258
1452
1449
1450
S字甕A
1453
1469
1448
b
1404
1583
1445
1493
1485
1470
甕L
1468
c
1406
1403
1402
1406
1411


鉢
台付鉢
壺D
壺E
壺C
壺H
小型直口鉢
壺G
壺F
小型精製土器群
壺J
1/8
0
10cm


甕G
甕H
甕L
S字甕B
III-3
IV
1363
1364
1322
1327
1409
1457
1691
1688
1697
1690


小型直口鉢
壺F
壺G
壺H
鉢
二重口縁壺
1319
1321
1372
1335
1337
1369
1373
1334
1346
1400
1339
1345
1371
1458
1695


高杯M
高杯L
高杯T
高杯N
器台
Ⅲ-3
Ⅳ a
b
1348
1315
1353
1005
1312
1692
1459
1460
1455
1456

川原上層式の特徴と所属時期

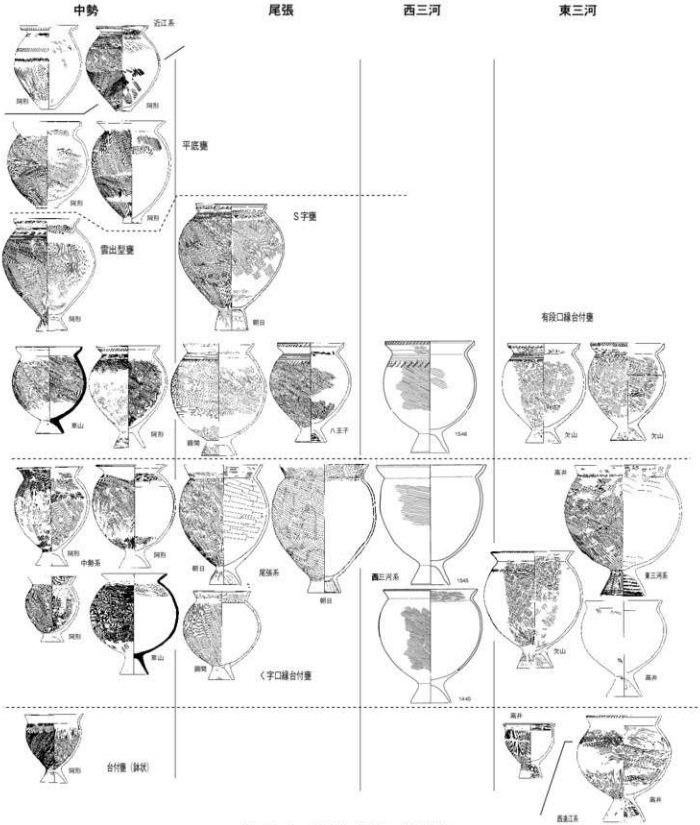
弥生時代中期末葉と大きく異なる川原上層Ⅰ式が、どのよな土器様式の影響下に誕生したものかは明らかでない。しかし盤状長脚有段高杯の特徴から弥生時代後期前葉を中心とした土器様式である点は容易に推測できる。台付甕は、西三河特有のナデ技法や形態を、前様式から踏襲した独自の型式が盛行する。壺の扇状文の盛行は、尾張地域と共鳴する現象でもある。Ⅰ式2段階後半には一部に丹後地域や中部高地との交流を想定できる資料が混入する。同時にそれは尾張低地部の山中様式からの強い影響を受ける時期を迎えはじめたことを示すものでもあった。

その後に川原上層Ⅱ式が誕生するが、この土器様式には山中式中期のデザインが大きく関わっている点は有段高杯や台付甕を見れば明らかである。川原上層独自の型式が急速に消失し、山中式のデザインを基にさらなる地域化、個性化を模索し始める時期といえよう。Ⅱ式1段階後半から2段階にはこうした固有の型式が生み出され、あるいは周辺地域へ影響をあたえた可能性もある。

川原上層Ⅲ式の成立は突然の出来事であり、大きな器種変換が見られる。その初源におけるデザインの淵源は廻間様式であることは明らかであろう。台付甕の多様性に発して、有段高杯や器台、パレス壺、内彎長頸壺、さらには小型直口鉢と小型精製土器群。ただ多くの形式において即座に個性化が進み、独自の型式と系列を作り上げる。

さて、川原上層諸様式の時期であるが、まず川原上層Ⅰ式2段階後半の中で山中式が開始された可能性を想定し、廻間Ⅰ式の開始は川原上層Ⅱ式2段階の中にあると考えたい。そして川原上層Ⅲ式1段階は、廻間Ⅰ式1段階後半期に始まっていたと思われる。川原上層Ⅲ式2段階前半にS字甕A類古段階が共伴する点から廻間Ⅰ式後半期と大きく重複するものと考えられる。川原上層Ⅳ式にS字甕B類中段階が共伴する点から、廻間Ⅱ式期が川原上層Ⅲ式3段階の中で始まっている可能性が推測できる。高杯Mの形態的な特徴が廻間Ⅰ式4段階からⅡ式1段階に普遍的に見られる形状に類似する点も留意したいところである。

第6図　伊勢湾沿岸部の土器様式（2・3世紀）



第7図　甕の地域差（廻間Ⅰ式前半期）

古墳時代早期前半と考える廻間Ⅰ式期を基軸にして、伊勢湾沿岸部の土器様式を概観してみたい。そしてその中での川原上層Ⅲ式の位置づけを行ってみよう。この場合当然、将来独自な様式設定がなされるであろう、中勢地域を加えて考える必要がある。まず甕についてであるが、大きく概観すると、3つの点に集約される。

第1に甕の多様性において各地に特徴的な型式群が存在することがわかる。中勢地域は平底甕が存在する地域としてまず注目したいが、さらに興味深いのはまさに多様な甕が多く存在する点である。伊勢湾沿岸地域においてこれほど多くの型式を内包した土器様式は見られない。逆に最も単純な型式群によって構成されるのが川原上層Ⅲ式あるいは欠山式といえよう。

第2にS字甕と有段口縁台付甕についてである。S字甕が主体として型式群の中に位置づけられるのは中勢地域と廻間Ⅰ式だけである。これは続く廻間Ⅱ式期においても基本的には変更はない。またS字甕の誕生の謎を解く「雲出型甕」S字甕ゼロ類は、中勢地域において誕生し、濃尾平野低地部まで広がる。問題は有段口縁台付甕である。この台付甕こそが、古墳時代早期前半において伊勢湾沿岸部に広く分布する代表的な甕といってもよい。もっとも詳細に検討すれば、細分化・地域性が存在する点は言うまでもない。3世紀前半の重要な鍵を握る土器に違いない。

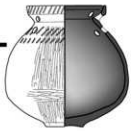
さて第3には、「大きさ」の問題がある。大きさとは容量であるが、一見すると中勢地域は小型で、三河地域は大型であることは容易に推察されよう。この傾向は特に小口縁台付甕に顕著に認められる。大きさも地域性を表す要素である点は、分類を含めて注意が必要である。逆に有段口縁台付甕などには「大きさ」において明瞭な差はないようでもある。

その他に例えば、台付部の大きさに注目したい。一見して三河地域へ行くと体部と比較して台付部が大きくなる傾向が見られる。最も小さいのが尾張低地部で、アンバランスな台付部がこの地域の特色といえる。また頸部の大きさにも地域差が見られ、中勢地域は引き締まった頸部が特徴であり、東へ行くほど開放的な頸部を志向する。

以上のように甕を概観だけでもおおむね各様式のイメージが把握できよう。さらに高杯や器台、パレス壺を含めた壺類を加えることにより、より鮮明にその様式差が表面化する。詳細な技術論を待つことなく、東海地域の地域的な様相を概観できる見通しが出てきた。因に中勢地域ではパレス壺が客体であり、椀型高杯が主体的で加飾広口壺に特徴的な在り方を見る。二重口縁壺を含めて体部の文様に櫛描直線文や波状文、刺突文を多用する傾向が普遍的に存在するようである。さらに頸部の凸帯貼り付けや凸帯部の刺突文など、加飾性に優れている。西三河の川原上層Ⅲ式は、器台やパレス壺が少量であるが定着し、中型壺や独自の有段高杯に特色が見られる。東三河の欠山式は器台・パレス壺、さらにはヒサゴ壺がことごとく欠損し、大型の鉢や直線化志向する高杯脚部などに特色がある。こうした点を踏まえて、さらに西濃地域や犬山扇状地を含めると、東海地域の具体的な土器様式が明確に把握することができる。川原上層Ⅲ式は、このような東海地域の中の、矢作川中流域の土器様式としてその役割を演じてきたといえよう。

付論6

墳丘墓と槽形木棺墓について



墓域の概要

川原遺跡の弥生時代後期から終末期(古墳時代早期・初頭)にかけて、5基の墳丘墓を確認することができた。ここで墳丘墓の変遷についてまず確認しておきたい。最初の墓域の設定(川原上層Ⅰ式1段階)に伴い墓域中央部に大型墳丘墓SZ02が造営され、同じ方向性を有するSZ04がほぼ同じ時期に造営された。その後にSZ03とSZ06が継続して造営されたものと思われる。すでに川原上層Ⅰ式期の中で4基の墳丘墓の区画が整っていたものと想定される。各墳丘墓の区画内では、次々に墓壙が造られていったものと思われる。また墳丘墓SZ02と旧河道との間には竪穴状遺構が展開し、墓域に伴う特殊な施設が設けられていた。さらに注目されるのが、SZ05とした方形壇状遺構である。SZ02の造営とほぼ同じ時期に、墓域の北西隅に営まれた祭場と考えたい。ここでは墓域全体を通じての祭祀が執り行われていた。その後の川原上層Ⅱ式1段階になると、竪穴状遺構が設営されていた場所に、新たにSZ01が造営される。墳丘墓SZ01はSZ02と主軸を同じくするものであるが、川原上層Ⅰ式期の墳丘墓の造営方法とは大きく異なり、周溝が狭く溝の中央部に開口部を有するB型墳の形態を備える。おそらくⅡ式1段階の中で、本墓域の中心的な墳丘墓の位置づけが、SZ02からSZ01に移行したものと考えられる。SZ01には多く墓壙が構築されているが、基本的にはⅢ式2段階の中で全て終焉する。

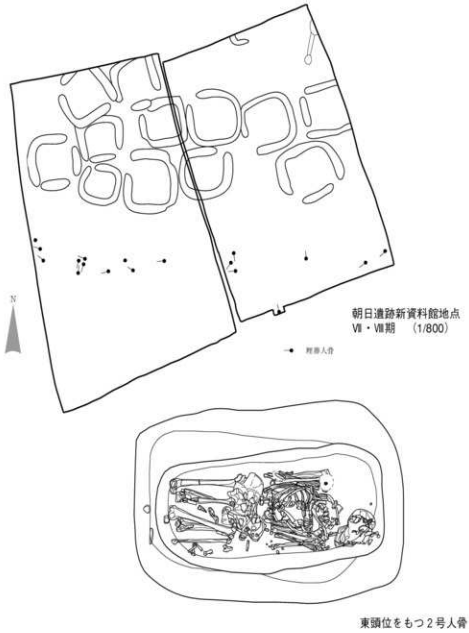
なお墓域そのものは、矢作川の氾濫原である低地部の自然堤防上に立地している。北側の碧海台地との間には湿地帯が存在し、西側にはNR03として調査した大溝が存在する。東側は深く大きな旧河道により遮断され、孤立した環境が復原できる。大溝と旧河道が合流する地点には方形の突出部が存在する。東西120m南北80mほどの墓域が想定できる。

墳丘墓

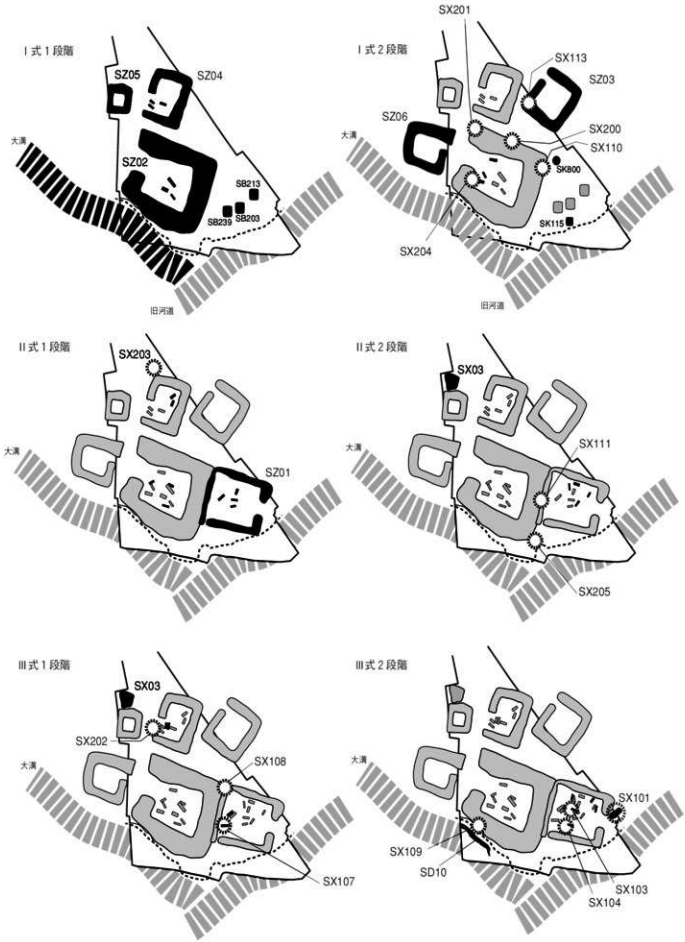
墳丘墓SZ02の造営開始は弥生時代後期前葉に遡ることができる。さらに26mの規模を有する大規模な墳丘墓といえよう。現状では、周辺に居住域は想定できていないものの、おそらく鷲鴨町周辺の低地部に展開する地域社会を背景にした造営活動と推測される。したがって川原遺跡はこれらの遺跡群を背景にした、特定集団墓群として位置づけることが可能である。川原上層Ⅰ式期では、墓域に数基の墳丘墓を造営している所から、大型墳丘墓SZ02を中心に複数の特定集団の葬出を想定できる。しかしその状況は川原上層Ⅱ式1段階以降に大きく変化する。すなわち墓域の拡大によりSZ01のみが、この特定の墓域を占拠することになった。おそらくさらなる階層分化により傑出した特定集団が表面化していったものと思われる。Ⅱ式期以降にこの墓域を利用できる集団はさらに限定されていったものと考える。当地域では特定集団による地域社会の経営が、力強く執り行われていった可能性がうかがい知れる。

さて、次に墳丘墓の構築方法について言及したい。手順をおって列記しておくと、まず幅広で大きな溝によって特定の区画を造る。まさに区画墓と呼ぶべき設定内容である。その後に、中央部付近に中心的な埋葬が実施され、その後は次々に周辺部に拡大する。度重なる墓壙の構築により、区画内に次々に埋葬が行われ、その度に墓前祭が執り行われた。こうした行為の後には、墓壙周辺に若干に盛り土と整地が繰り返される。したがって

結果的に一定の高さの「低墳丘」ができ上がることになる。この状況はSZ01においてさらに明瞭に把握できる。つまり墓壙の掘削と埋葬の後に、その上あるいは周辺部に据え置かれた供献土器をそのまま埋め戻した可能性があるからである。その際には墓壙周辺に若干に盛り土と整地が繰り返され、供献土器も据え置かれたままの状況で整地土の中に埋納される。すべてが封土の中に閉じこめられることになる。こうした状況が川原遺跡の墳丘墓構築法であり、墓壙構築法と思われる。墳丘墓に静寂が戻るのは墓壙の掘削が終焉したⅢ式3段階以降のことである。



第8図　朝日遺跡の埋葬人骨
（宮腰健司編2000『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集）



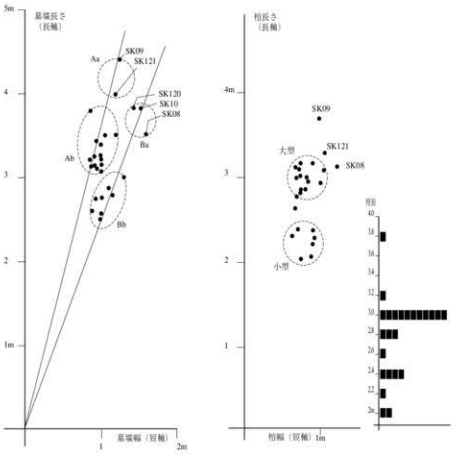
第9図　川原上層式期の主要遺構変遷模式図　1/2000

墓　壙

墳丘墓内部に掘削された墓壙の規模には、大きく二者が確認できた。幅1m前後の比較的細長いもの(A型)と、長さに比べて幅広いもの(B型)である。これら二者にはそれぞれ大小(a・b)の大きさが見られる。墓壙の大きさは基本的には棺の大きさや形状を強く意識したことは容易に推察できる。

比較的細長い墓壙を有するA型は、SK09・SK121といったやや特異な事例を除いて、多くはAb型とした長さ3m～4m未満の規模にまとまる傾向がある。一方の幅広のB型でも、同じようにSK120・SK10・SK08以外にはBb型にまとまるようである。大きく見れば、特異な一群を除いておおむね、共通した墓壙の規模を志向したことになろう。

さらに墓壙の大きさと棺の関係には、二者が存在する。まず棺の大きさと相似形のほぼ同じ規模の墓壙を造る場合と、棺の形状とは別に一定の空間を設ける場合である。後者には特に共通した特徴が見られ、SK06・SK09・SK104などに典型的に見出せるような、一方に著しく偏って棺を設定するものである。作業スペースや副葬品などが推定できるかもしれないが、こうしたことを想定させるような明瞭な痕跡は確認できていない。しかしながら墓壙内に偏りをもつ棺設置は比較的多く見られる。また棺と墓壙の間隔はしだいに狭くなり、川原上層Ⅲ式期にはほとんど棺と同じ規模で墓壙を掘削する場合が多くなる。掘削面は、墓壙の長側面や小口は緩やかな斜面をもち、一方で四隅は比較的鋭利な角度を保つものが一般的である。川原遺跡の墓壙では、掘削が垂直になる事例が見られず、すべて緩傾斜をもち、中には皿状に近いものまで認められる。検出面が粘質を帯びた黒褐色土であるためか、墓壙の掘形の判断は容易ではない。いずれにしろ墓壙の形状は比較的統一性があり、これは次に述べる棺の形態と密接な関係が想定できる。



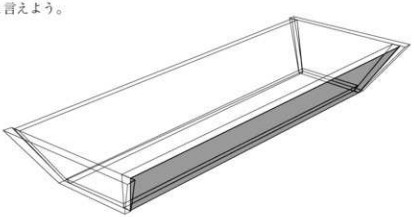
第10図　墓壙・棺計測図

槽形木棺

棺の痕跡から、ここでは棺の構造を復原してみたい。平面形からは、小口板の大きさに大小が見られ、結果長方形を呈するものが多い。断面観察からは、各側面が全て傾斜をもち、大きく開く状況が確認できた。棺底板は側板の内側に置かれていたようであり、小口板は側板の外側から押し付けるように使用されている。こうした調査結果から推測すると、棺の形状は、側板や小口板が斜めに傾斜し、底板がその中に落とし込まれたような形態を復原できる。復原した棺の形状から、ここでは舟状の形態を志向する「槽形木棺」と呼称しておきたい。天井部については、墳丘墓内の墓壙の構築法や盛り土の状況から総合しても、槽形木棺には、その上部に複雑な、あるいは高さをもつ蓋を推測することは不可能であり、おそらく板状の棺蓋を使用していたものと思われる。棺の大きさは表から明らかなように、3m と 2.4m 前後に二分され、棺には大小が存在したことがわかる。ただし SK09 や SK08 は例外的な大きさをもち、こうした SZ02 中心主体には特殊な棺が用意されていた可能性が高い。SZ02 の中心主体である、SK09 が 4m 近い棺長を持つ点は注目できよう。さらに埋葬時期が川原上層Ⅰ式2a段階を降ることがないとすると、さらに興味深い。なおこの長さはあくまで長軸方向であり、検出面での計測値である点を留意したい。さらに槽形を呈することを考慮すると、棺底部の長さは 2.5m と 1.8m 前後となる。後者はほぼ伸展葬の人の大きさと近似し、ほとんど余裕の無い規模と言えよう。

棺の構造と設置法(組立式木棺墓)

墓壙の底部の状況には、おおむね二者が存在する。一つはやや丸みをもち大きく彎曲した弧を描く場合。今一つはほぼ平らに整形するものである。前者には棺設置にあたって若干の整地層が認められる場合が多く棺設置用に、平坦に整える作業が見られる。棺の設置はその上部に据え置かれる。後者は直接、墓壙底部に設置された。川原上層Ⅲ式期になると、後者の場合が増加する。また弥生時代終末期(古墳時代早期・初頭)に近づくと棺と墓壙の間隔が狭くなる傾向がある。墓壙と棺の大きさが同一になるような工夫が施されていくようである。また極めて困難な調査であったが、棺痕跡の観察結果から棺形態を綜合すると、槽形木棺が領貫き木棺である可能性は極めて少なく、組合式か組立式の可能性が高い。少なくとも、側板と底板が一体化した状況では確認できていない。さらに墓壙の掘削方法を考慮すると、おそらく墓構内に直接、棺を組立てる方式が採用されていた可能性が高いものと推測したい。こうした見解は、後述する県内の遺跡からの調査報告例からも指摘できる。なぜ槽形であらねばならないのかも含めて今後の調査成果に期待したい。



第11図　槽形木棺推定復原図

主軸（頭位の推定）

次に墓壙及び棺痕跡の軸線について整理しておきたい。槽形木棺として復原した棺には、小口板の大きさに偏りが見られる。そこで長さが大きい側を頭位の位置と仮定して方位をまとめてみた。その結果は、まず川原上層Ⅰ式期では大部分が北西方向に偏在する傾向が見られる。中心的な大型墳丘墓であるSZ02に限定すればさらに方位が集中して、西から15～40度の中に納まることになる。ところが川原上層Ⅱ式期になると、北西方向から一変して東方向に大きく変化することがわかる。さらに北頭位を志向するものも表れる。川原上層Ⅲ式期になると、軸線が不安定であり、特定の方位を抽出しにくくなる。

ところで、こうした傾向に墳丘墓内の墓壙のあり方を加味してみると、興味深い点を指摘することができる。すなわち墳丘墓の中心的主体部と考えられるものは、墳丘墓の造営段階に設定されており、これらは全て東西方向に軸線を置くことになる。もう少し踏み込んで言及すれば、川原上層Ⅰ式期は西から30度ほど北に傾く軸線が意識されていた可能性が高いものと推測したい。一方で墳丘墓の中心主体部の周辺に点在する他の墓壙には、むしろこうした方向と直角に交わるものなど、多様性がそこに存在する点もまちがいない。主軸が地形や景観に左右されている点も考えられるが、志向する方向性には一定の規範が存在した可能性を推測しておきたい。

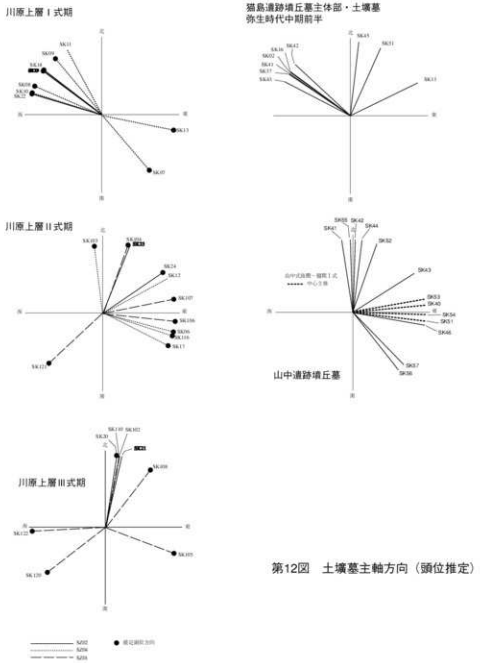
頭位がどちらに置いたのかは、調査成果からはにわかに判断できないが、大きく見れば上記したような、東西方向に主眼を置いた配置であった可能性が高い。そして尾張地域の山中様式が当地に影響をあたえはじめた川原上層Ⅱ式期において頭位が変化した点は興味深い問題を内包しているようにも思われる。すなわち、墳丘墓のカタチ（B型墳）と埋葬方法の変革である。

弥生時代中期から後期の木棺墓

川原上層式の木棺墓の復原を行ってきたが、ここで尾張地域で確認されている土壙墓の資料を加えて簡単に整理しておきたい。まず近年発掘調査した一宮市猫島遺跡では、墳丘墓（方形周溝型）に伴う土壙墓が多数発見されている[1]。ここでの資料を概観すると、土壙墓内に残る棺痕跡は、川原遺跡で復原した槽形木棺と極めて類似する形態が見られる。また頭位をまとめてみると、著しい集中性が見られ、やはり西30度～40度北へ偏る傾向が読み取れる。所属する時期は弥生中期前半である。次に一宮市山中遺跡の墳丘墓と主体部を見てみると[2]、やはり同様に棺痕跡は、槽形を呈する。また頭位は東方向と北方向の二者にまとまる傾向が認められる。この傾向は、まさに川原上層Ⅱ式期で見られた現象と同様なものと考えることができよう。さらに山中遺跡においても墳丘墓の中心主体は、全て東方向を志向する点も共通する。時期は山中式後期から廻間Ⅰ式前半期にかけてである。これらの資料に朝日遺跡で発見されている土壙墓や人骨埋納の事例を追加すると[3]、次のような傾向が読み取れる。（第81図）尾張地域では遅くても弥生時代中期初頭段階より西頭位を志向して墓壙や棺を設定していた。その後、弥生時代中期末葉になると、東頭位を志向する方向に変化し、山中式段階では北と東に大きく偏る埋葬方法が普及した。川原遺跡ではⅠ式期、すなわち弥生時代後期前葉段階まで西頭位を志向し、後期中葉段階以降に東頭位を志向するように変化する。

両地域に共通する点は、第1に墳丘墓の中心主体部は東西方向を強く志向する。山中様式を中心として東頭位が支配的となる。第2に棺は組立式あるいは組合式の槽形木棺を基本とする。

1）一宮市に所在する猫島遺跡は、愛知県埋蔵文化財センターによる調査が実施され、現在は報告書の作成中である。
2）服部信博編 1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集
3）宮腰健司編 2000『朝日遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集

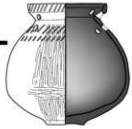


第12図　土壙墓主軸方向（頭位推定）変遷表

第13図　山中遺跡墳丘墓　1/500

付論7

川原遺跡出土の木製品群について



はじめに

川原遺跡では主として谷のなかから、弥生Ⅳ期から古墳中期にかけての木製品が出土した。点数は22点と、他の遺跡に比べて決して多いとはいえない。しかしながら、時期的に細かな変遷が追え、しかも各時期に微高地上で展開された遺構群とのかかわりを論じることができる点できわめて興味深い資料である。小論では、まず時期ごとに木製品の変遷を示し、それぞれの時期の遺構と突き合わせることで、まず各段階の木製品群の性格をあきらかにしたい。さらに、同時期の西三河や尾張の他の遺跡から出土した資料と比較して、この遺跡の特徴を探ってみたいと考えている。

出土木製品の変遷

川原遺跡出土の木製品は、弥生Ⅳ期・川原上層Ⅰ式期・同Ⅱ式期・同Ⅲ式期・松河戸Ⅰ式新～Ⅱ式古段階併行期の5時期に細分することができる。では、各時期ごとに木製品の組成と出土遺構の変遷をみていくこととする。

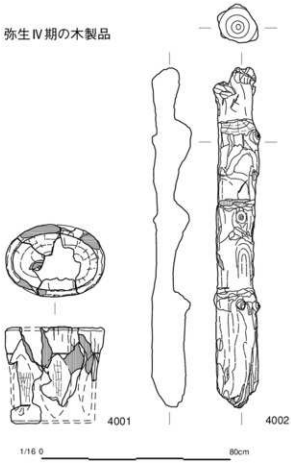
(1) 弥生Ⅳ期

97D区SD103から把手臼(4001)と梯子(4002)が各1点出土している。

このタイプの把手臼は、愛知県から静岡県にかけての地域で、弥生中期にのみみられる、きわめて特徴的な竪臼である。

これらの木製品が出土したSD103は、竪穴住居や方形周溝墓が密集する南北幅100m前後の微高地の、南限を区画する大溝で、中央部が土橋状に10mほどの幅で途切れている。溝の南半部は中世の大溝によって破壊されており、現状での溝幅は3m程度だが、本来の幅は不明である。

弥生Ⅳ期の木製品



(2) 川原上層Ⅰ式1～2段階(弥生Ⅴ期古段階)

この時期に掘削された大溝NR03の最下層(第6層)から、曲柄平鍬(4004)・掘り棒未成品(4008)・不明棒状品(4006)が各1点ずつ出土している。なお、この時期以降はすべて97B・C区からの出土である。

曲柄平鍬は、軸部の形態が筆者の分類による伊勢湾型曲柄平鍬D類にあたり、尾張平野部のものと共通している[1]。刃部は欠損しているた

1) 樋上　昇2000a「東海系曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12、考古学フォーラム

め、Ⅰ～Ⅲ類のいずれかは不明だが、時期的にみてⅠ類であることはほぼ間違いない。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

掘り棒未成品は全長111cm。身部は長さが50cm、幅は約10cmと細身で、柄部と身部の境界が不明瞭で掘削の際に足をかける部分をもたないことから、『木器集成図録　近畿原始篇』[2]では一木鋤とは別に「掘り棒」との名称が与えられている。上端部が斜めにカットされており、一木鋤にみられる逆三角形やT字状の把手をもたない。断面形が原材段階と同じく三角形を呈しており、全体に厚手であることから未成品と考えている。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

(3) 川原上層Ⅱ式1段階(弥生Ⅴ期中段階)

この時期がもっとも木製品の出土量が多く、大溝NR03の第5層から直柄広鍬未成品(4003)・掘り棒(4009)・鍬膝柄(4011)・矢板状木製品(4007)が各1点と、梯子(4014～4016)、柱材(4017・4018)の合計9点が出土している。

直柄広鍬未成品は上端部を丸く仕上げ、隆起部は明確な段を有するが低い。柄孔は未穿孔。『木器集成図録』の分類では広鍬ⅡA式で、近畿地方には類例が多く、その大半は弥生Ⅰ～Ⅲ期に属するが、弥生Ⅴ期～古墳時代にかけても数例認められる。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

掘り棒は柄の上半部を欠損するが、4008とほぼ同様の形態で、身部幅は約7cmとさらに狭い。柄部に比べて身部の厚みが薄く、身部の断面形が凸レンズ状を呈することから、完成品と考えられる。身部長は4008とほぼ同じである。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

鍬膝柄は柄部と台部の角度は約55度。樹種はサカキを用いる。

梯子は3点ともほぼ同じ位置で、大溝の斜面に折り重なったような状況で出土している。うち、2点はヤマグワ、1点はクリを用いる。

4017・4018はいずれも柱材としたが、特に4018は出土地点が前述の梯子と同じであることから、梯子の未成品である可能性も考えられる。

(4) 川原上層Ⅲ式1～2段階(廻間Ⅰ式前半併行期)

NR03第3・4層から曲柄鍬(4005)・板材(4013)・鍬膝柄(4012)が、NR03に築かれたシガラミ状遺構SX115から掘り棒(4010)、NR03の北肩付近に掘削された溝SD10から曲柄平鍬未成品(4019)が各1点ずつ出土している。

NR03第4層から出土した曲柄鍬は刃部を完全に欠損しているため、平鍬か又鍬かの判別不能。軸部の形態は伊勢湾型D類で、弥生Ⅴ期古段階の4004と同じ。樹種はコナラ節の柾目材。

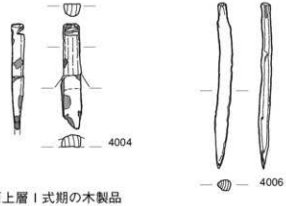
板材は曲柄鍬と同じく第4層からの出土。残存長が288.4cmで、幅は13cm、厚さは1.9cmときわめて細長く、樹種はコナラ節の柾目材。断面は三角形で、樹種や幅からみて、曲柄平鍬あるいは掘り棒を製作するための原材である可能性がきわめて高い。

鍬膝柄は台部を一部欠損するのみで、柄部はほぼ完存している。柄部と台部の角度は約60度。樹種は4011と同じくサカキを用いる。

掘り棒はNR03のシガラミ状遺構SX115から出土している。柄部上半と身部下半を欠損しており、肩部のみ残る。4008・4009と同様になで肩で、断面形は柄部が長方形で厚く、身部は薄く仕上げる。樹種はアカガシ亜属の柾目材。

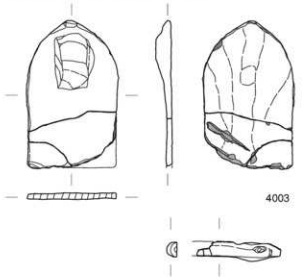
曲柄平鍬未成品は下端部を欠損するが、軸部から肩部、刃部までをつくりだした段階のものである。残存長は60cmで、軸部長13.6cm、刃部幅は13.8cmである。肩部は直角で、刃部の幅は肩部から下端までほぼ一定である。側面形をみると、肩部から刃部にかけて強い削り込みがみられる。これらは、いずれも伊勢湾型曲柄平鍬Ⅰ類の特徴である。樹種はコナラ節の柾目材

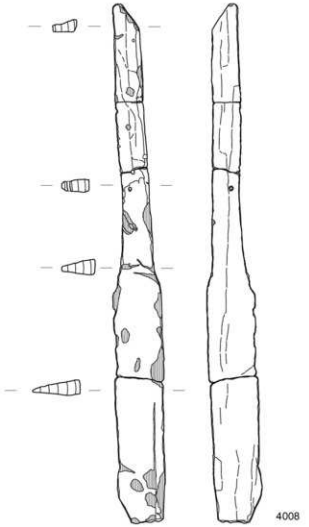
2) 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録　近畿原始篇(解説)』
3) 安城市教育委員会　2001　『釈迦山遺跡』

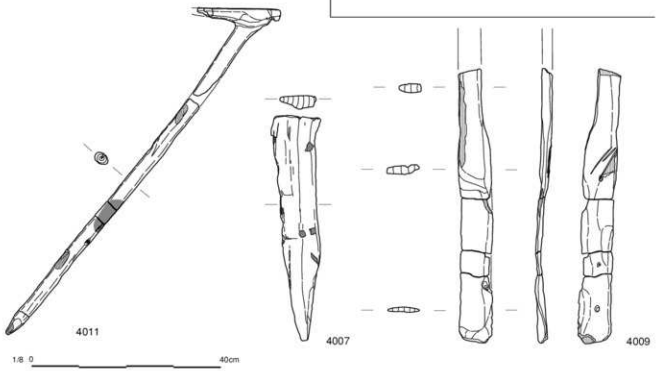


川原上層Ⅰ式期の木製品

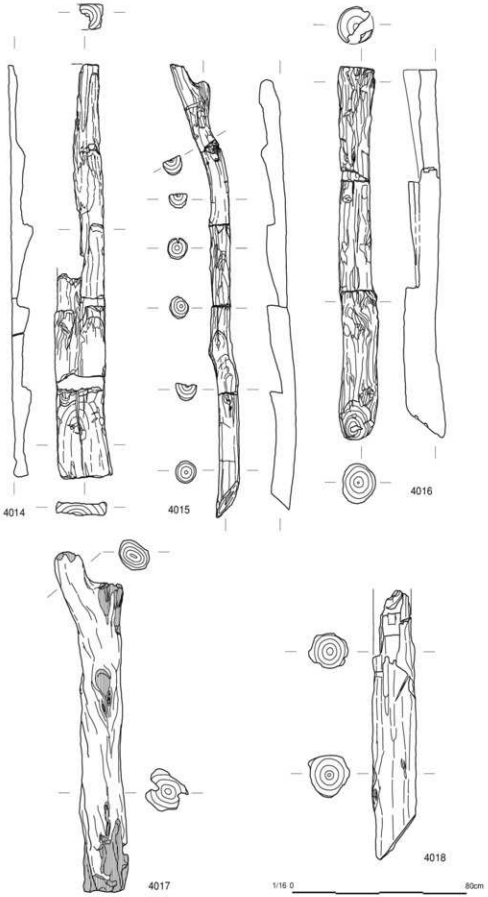
川原上層Ⅱ式期（1段階）の木製品







川原上層Ⅱ式期（1段階）の木製品



を用いる。曲柄鍬でこの段階の未成品は珍しく、愛知県内では筆者の知るかぎり、安城市釈迦山遺跡[3]の曲柄平鍬Ⅰor Ⅱ類（廻間Ⅱ式前半併行期）と豊田市水入遺跡[4]の曲柄二又鍬Ⅲ類（松河戸Ⅱ式併行期）の2例のみである。

(5) 松河戸Ⅰ式新段階～同Ⅱ式古段階併行期

川原上層Ⅰ式期以来の大溝NR03が埋没した後、その上に掘削された溝SD08から琴（筑状弦楽器－4022）が1点、その南の窪地NR01から、やはり筑状弦楽器（4021）と作業台（4020）が1点ずつ出土している。

4021は上半部のみで、断面三角形の底辺にあけられた楕円形の孔に横棒を渡し、ここに弦をかける構造となっている。樹種はスギの柾目材。

4022は4021とほぼ同形同大で、その下半部のみ遺存する。先端には5ヶ所の突起があり、5本の弦をかけたことがわかる。

4020は部厚い板に棒状の把手がつく。断面は逆L字形で、片側の面には段をもつ。板の表面に細かな傷が無数についていることから、作業台と考えられる。樹種はスギの板目材。

●●●微高地上の遺構変遷と木製品群の性格●●●

以上、各時期ごとに木製品の組成と出土遺構の変遷について述べてきた。次に、微高地上の遺構変遷と木製品とのかかわりについてみていくこととする。

(1) 弥生Ⅳ期

前述のように、この時期は南北幅約100m、東西幅80m以上の範囲に200棟以上の竪穴住居が複雑に重複して検出され、その北西側には2基の方形周溝墓が築かれている。

この段階の木製品はわずか2点のみで、うち1点が臼であることは、やはり微高地上で日常的な生活が営まれていたことと対応している。梯子については、高床建物の建築材のほかに大溝や深い土坑の昇降など、様々な用途が考えられ、ここではいずれかに限定することは難しい。

(2) 川原上層Ⅰ式～2段階

この段階には、微高地上の状況が一変し、全面的に大型墳丘墓が展開する墓域となる。

まずⅠ式1段階には、のちにSZ01のマウンドが築かれる位置に、竪穴住居3棟（SB203・213・239）が出現し、微高地の北西から南東にかけて大溝NR03を掘削する。上記の竪穴住居は日常的な居住のためのものではなく、その後に築造される墳丘墓とかかわりをもつものと思われる。次いで、25×20mの大型墳丘墓SZ02と周溝の一部しか確認されていないが、やはり大型墳丘墓と思われるSZ03、そして、これら墳丘墓群の北西側に祭場SZ05を築造する。SZ02の埋葬主体SK07もこの時期である。

同2段階には墳丘規模が19×13mのSZ04と、SZ06を新たに築造する。SZ02の埋葬主体SK09・10・11もこの段階に属する。

この時期の木製品をみると、3点のうちの2点が掘削具で、弥生Ⅳ期にみられた臼のような生活の痕跡が感じられるものは皆無である。墳丘墓の築造（墓壙の掘削を含む）にかかわるのか、大溝の掘削に用いられたのかは不明だが、付近に生活域や水田域がみられないことから、いずれかの土木作業に用いられた可能性が高い。

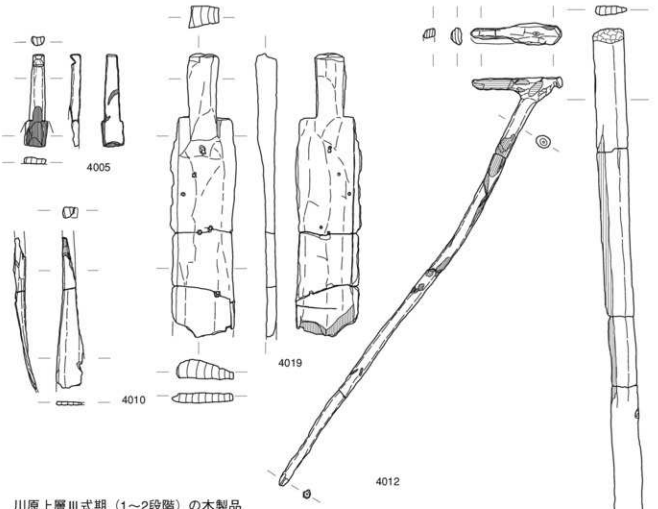
(3) 川原上層Ⅱ式1段階

この時期には墓域を東に拡張し、新たに墳丘墓SZ01を築く。

SZ01は25×20mの墳丘に14基という夥しい数の埋葬主体が確認されている。このうちSK104・121がこの時期で、SZ02にも埋葬主体SK12・17・06を新たに掘削する。また、1段階と2段階の境にはNR03を再掘削する。

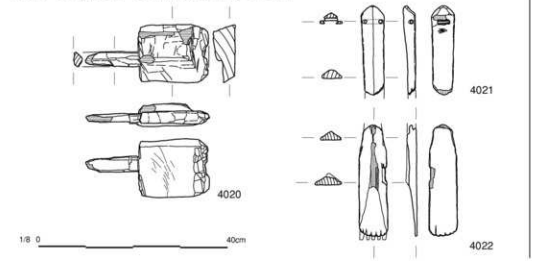
この時期の木製品には掘削具3点の他に、梯子と柱とみられる大型の丸太材がある。掘削具のなかには鍬膝柄があることから、曲柄鍬も用いられていたことがわかる。梯子3点はいずれ

4）樋上　昇・永井邦仁・木川正夫2000「豊田地区出土の木製品について」『研究紀要』第1号、（財）愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター



川原上層Ⅲ式期（1～2段階）の木製品

松河戸Ⅰ式古段階～Ⅱ式新段階併行期の木製品



も大溝の斜面で集中して出土している。SZ01の周溝は浅く、そのほか埋葬主体など特に梯子を利用するような深い遺構はないことから、これらの梯子は大溝の再掘削に用いられた可能性が高い。柱材の用途は特定できないが、直径が27.6cm(4017)・20.0cm(4018)と太いために、竪穴住居とみるよりは掘立柱建物の柱材であった可能性が高い。SZ01・02の墓前祭祀用に仮設建物があったのかもしれない。

(4) 川原上層Ⅲ式1～2段階

この時期も前段階に続いてSZ01への埋葬行為が継続する。 SK120・117(以上、1段階)・105・119・112・102・110・108(以上、2段階)を新たに掘削し、大溝の斜面には溝SD10やシガラミ状遺構SX115などを築いている。

この段階になると、木製品には掘削具しか認められないことから、上記のうち、いずれかの遺構の掘削に用いられたことは間違いない。

ここで注目されるのは、曲柄平鍬の未成品とその原材が出土したことである。弥生後期以降の全国的な傾向として、掘削具の未成品の出土例は、南関東以北の地域を除いてきわめてまれである。穂積裕昌氏はこのことから、弥生後期から古墳前期にかけての段階に、木製品が集落単位でおこなわれる小規模な自家生産体制から、ある一定地域ごとに首長が直轄する比較的大規模な生産体制へと変化したと考えている[5]。この時期に尾張平野部より出土する伊勢湾型曲柄鍬の規格化された形態から、筆者も基本的には穂積氏の説に賛同している[6]。ただし、この川原遺跡から出土しているごくわずかな量の曲柄鍬(と、前段階の掘り棒や直柄広鍬)の未成品や原材が、大規模な木製品生産体制によって生じたものとは考えにくい。むしろ、ここにみる掘削具の生産は、実際の工事現場で必要に応じて急場しのぎ的におこなわれたものであろう。とすれば、弥生中期までの各集落における比較的均質的な木製品の自家生産体制から、弥生後期以降への木製品生産体制の変化は、首長層が直接的に管理する大規模生産と、ここにみるような現場で必要に応じた量のみをつくる、きわめて小規模な生産へと大きく二極分化したと考えるほうがより実情に則しているのではなかろうか。

この段階でもう一つ注目すべき点は用材の問題である。川原上層Ⅰ式期以降、この遺跡では掘削具にすべてアカガシ亜属を用いてきた。ところがこの川原上層Ⅲ式期は、SX115から出土した掘り棒がアカガシ亜属であるのを除けば、曲柄鍬とその未成品および原材のいずれもがコナラ節へと変わっている。おそらく、掘り棒は同Ⅰ～Ⅱ式期の破損品をシガラミに転用したのであろう。とすれば、この時期の掘削具はすべてコナラ節となる(もちろん鍬膝柄は除く)。

NR03の西壁よりとられた土壌サンプルの花粉分析結果をみると(第3分冊を参照)、試料番号9～12(特に9)ではコナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属の割合が高いのに対してマツ属、イネ科の割合が低い。それが試料番号8を境に、4～7ではアカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属の割合が一時期減少し、マツ属、イネ科の割合が急増する。マツ属、イネ科は遺跡周辺の森林伐採が進み、裸地的環境へと変化したためと考えられる[7]。試料番号7におけるアカガシ亜属の減少がこれに対応しているとすれば、まさにアカガシ亜属の伐採によるものである可能性が高くなる。その一方で、コナラ亜属の割合にほとんど変化がみられない点が注目される。

すなわち、川原上層Ⅰ～Ⅱ式期(試料番号11～13)の大溝掘削・大型墳丘墓築造に際して、そ

5) 穂積裕昌 2000「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について」『研究紀要』第9号、三重県埋蔵文化財センター
6) 樋上 昇 2000b「3～5世紀の地域間交流」『日本考古学』第10号、日本考古学協会
7) 花粉分析のデータの見方については、森 勇一・鬼頭 剛氏のご教示を得た。なお、アカガシ亜属が激減する試料番号7は川原上層Ⅲ式期に属するが、森氏によると、植生の変化に比べて花粉堆積の変化は一般的に遅れることから、やはりアカガシ亜属の減少は川原上層Ⅱ式期段階にすでにおこっていたと考えてよいとのことである。

の掘削具を製作するために、遺跡近くの台地に自生していたアカガシ亜属の大半を伐採し、川原上層Ⅲ式期(試料番号4～10)には、掘削具をつくれるだけの太さをもつ原材がすでに枯渇していた可能性が高い。そのために、この時期の掘削具には、まだ付近に自生していたコナラ節を用いざるを得なかったのであろう。

このことから、川原上層Ⅰ～Ⅱ式段階までは、遺跡付近の台地上にはアカガシ亜属が多く自生しており、掘削具製作の際、特に遠距離から原材の調達は必要なかったこと、そして掘削具の製作にはコナラ節よりもアカガシ亜属を優先的に用い、アカガシ亜属がなくなった時点で原材をコナラ節に切り替えていたことがわかる。

(5) 松河戸Ⅰ式新段階～同Ⅱ式古段階併行期

この時期には、川原上層Ⅰ式期の大型墳丘墓SZ02を破壊して、新たに一辺が10m程度の小型の方墳SZ101を築く。SZ101の東西両側には方形の竪穴状遺構SB01・02があり、北側にはやや離れて掘立柱建物SB03を建てる。そして、川原上層Ⅰ式期以来の大溝NR03が埋没し、新たに微高地に沿って幅6～7mの溝SD08とそれに平行する大溝NR01を掘削する。

この時期の木製品は3点で、うち2点が琴(筑状木製品)である。SZ101での墓前祭祀に用いられたことはまず疑いない。金子裕之氏によると、「たまふりの琴」といわれるように、琴には「肉体から遊離した魂を呼び戻し体内に鎮め、あるいは衰えた魂を揺り動かして霊力を復活させる」意味があったとされている[8]。弥生後期以降、墳丘墓の周溝からは琴がしばしば出土し、古墳には弾琴埴輪像がみられることから、琴が墓前祭祀で、きわめて重要な位置を占めていたことがわかる。また、川原遺跡では竪穴状遺構SB01・02や掘立柱建物SB03も、方墳SZ101での祭祀と密接なかかわりをもつと考えられている。

(6) 小　結

以上、弥生Ⅳ期から松河戸Ⅰ～Ⅱ式期にかけて、各段階の遺構群より出土した木製品について、それぞれの時期に微高地上で展開された遺構群とのかかわりから、その性格についての考察をおこなってきた。居住域が存在する時期には臼のような日常生活とかかわる木製品があり、のちに大溝が掘削され、墓域となってからはこれらの築造に用いられた掘削具や、墓前祭祀にかかわる琴が出土するというように、木製品は遺跡・遺構の性格を復元するうえできわめて重要な位置を占めているのである。

川原遺跡出土掘削具の編年的位置づけ

最後に、木遺跡出土の掘削具について、その編年的な位置づけを示しておきたい(図7～9)。

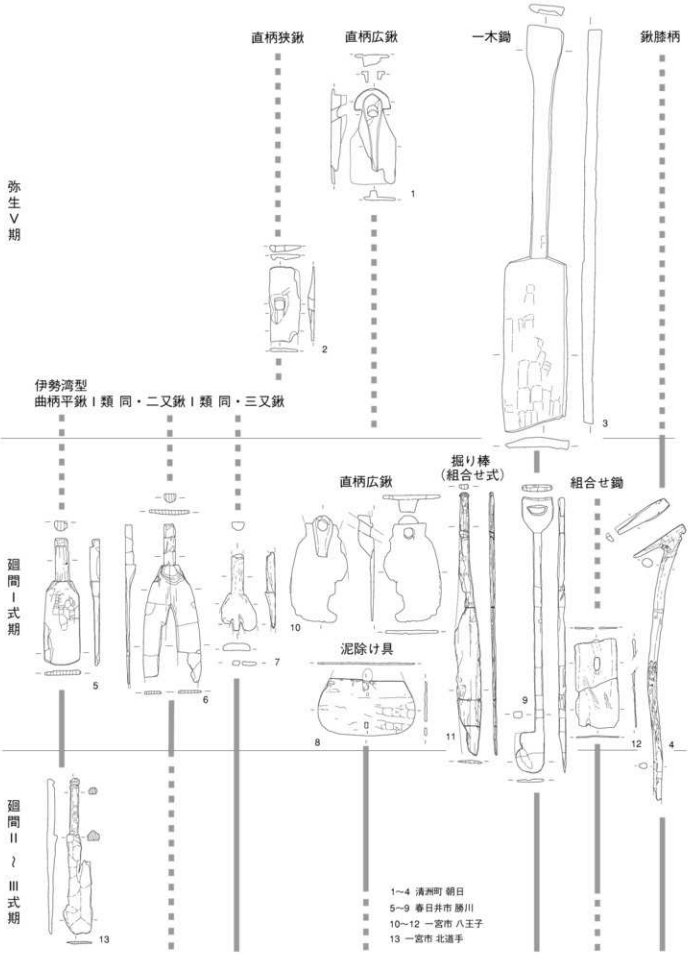
(1) 伊勢湾型曲柄鍬

今回の川原遺跡から出土した掘削具のうち、特に注目されるのは、川原上層Ⅰ式1～2段階の伊勢湾型曲柄平鍬(4004)である。これまで、西三河でもっとも古い伊勢湾型曲柄鍬は、安城市中狭間[9]・桜林[10]・釈迦山の各遺跡から出土したもので、いずれも廻間Ⅱ式併行期に属する。

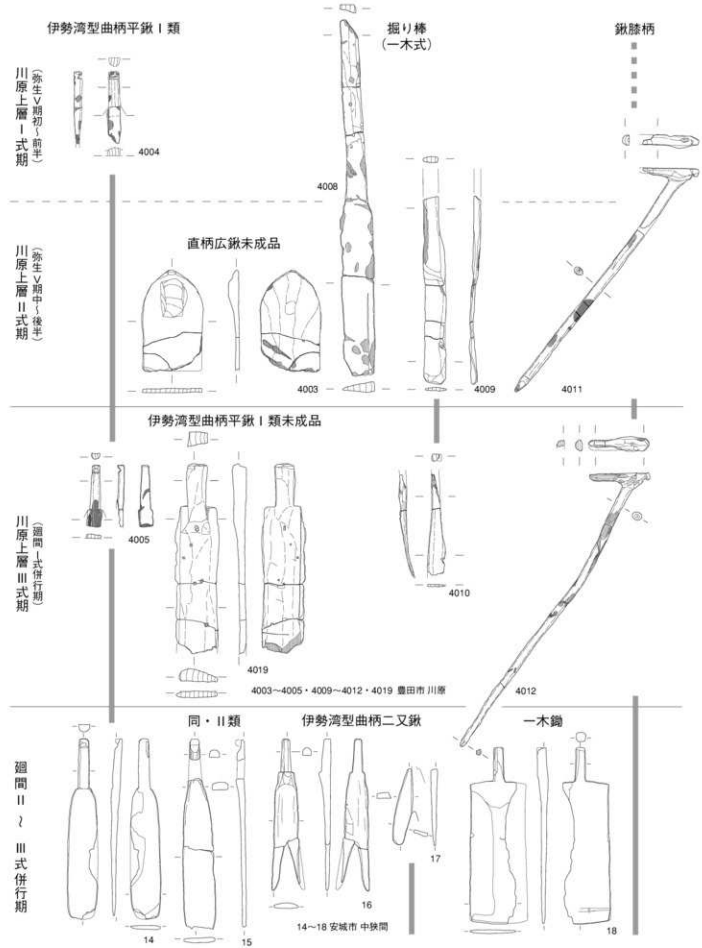
一方、筆者が伊勢湾型曲柄鍬発祥の地と想定している尾張平野部では、現在のところ、朝日・八王子・勝川の各遺跡から出土した弥生Ⅴ期(山中式)後半～廻間Ⅰ式期初頭の例が最も古い。

川原上層Ⅰ式1段階は山中式古段階よりも年代的に遡ることから、現状ではこの川原遺跡から出土した4004が最古の伊勢湾型曲柄鍬といえる。川原遺跡では、前述のように廻間Ⅰ式併行期(川原上層Ⅲ式1～2段階)にも伊勢湾型曲柄鍬(4005)と同・平鍬Ⅰ類未成品(4019)がある。4004はこれらと樹種が異なることから、廻間Ⅰ

8) 金子裕之 1996「まじないの世界Ⅰ(縄文～古代)」『日本の美術』No.360、至文堂
9) 安城市教育委員会 1999『中狭間遺跡』
10) 安城市教育委員会 1998『桜林遺跡』



1～4 清洲町 朝日
5～9 春日井市 勝川
10～12 一宮市 八王子
13 一宮市 北道手


伊勢湾型曲柄平鍬Ⅰ類
掘り棒
（一木式）
鍬膝柄
川原上層Ⅰ式期
（弥生Ⅴ期初（前半））
4004
4008
直柄広鍬未成品
川原上層Ⅱ式期
（弥生Ⅴ期中～後半）
4003
4009
4011
伊勢湾型曲柄平鍬Ⅰ類未成品
4005
4010
4019
4012
4003～4005・4009～4012・4019 豊田市 川原
川原上層Ⅲ式期
（廻間Ⅰ式併行期）
同・Ⅱ類
伊勢湾型曲柄二又鍬
一木鍬
廻間Ⅱ～Ⅲ式併行期
14
15
16
17
18
14～18 安城市 中狭間

式併行期を遡ることは間違いなく、出土層位において混入がないことを前提としたうえではあるが、弥生Ⅴ期初頭に位置づけられる。

では、伊勢湾型曲柄鍬がこれまで筆者が考えてきたように尾張平野部で生み出されたのではなく、この川原遺跡周辺が発祥の地といえるのであろうか。この点に関しては、筆者は懐疑的である。まず、古い段階(廻間Ⅰ式期)の伊勢湾型曲柄鍬がもっとも濃密に分布する地域は、現状においてもなお尾張平野の低地部であり、そこでは平鍬・二叉鍬・三叉鍬とすべての器種が揃うこと。さらにそれらは定型化が著しく、同一生産地もしくは同じ雛型をモデルにつくられた可能性が高いことが指摘できる。一方、西三河では廻間Ⅱ式併行期の安城市域から出土する伊勢湾型曲柄鍬の形態には複数の系譜が認められる[11]ことから、少なくとも矢作川下流域が伊勢湾型曲柄鍬発祥の地とは考えにくい。同じ矢作川の中流域に位置する川原遺跡では、最古の伊勢湾型曲柄鍬が出土した弥生Ⅴ期初頭段階には、微高地が居住域ではなく墓域として機能し始めていた。つまりこの遺跡では、首長層の直轄による木製品製作工房として掘削具を大量に生産していたのではなく、むしろ工事の傍らで必要に応じて原材の調達から掘削具の製作までの工程をすべておこなう程度の規模であった。

尾張平野部において弥生Ⅴ期は、木製品そのものの出土量が、前後する時期(弥生Ⅳ期や廻間Ⅰ式期)に比べて極端に少ない[12]。今後、尾張平野部においても、この時期の遺跡の調査事例が増加することによって、最古段階の伊勢湾型曲柄鍬が出土する可能性が高い。

(2) 直柄広鍬

川原上層Ⅱ式1段階に属する直柄広鍬ⅡA類未成品(4003)に関しては、近畿地方の弥生Ⅰ期から古墳時代にかけてその類例が確認できる。清洲町朝日遺跡でも弥生Ⅳ期の未成品に比較的近い形態の直柄広鍬がみられるが、一般的な形態とはいえない。尾張では廻間Ⅰ式期から、泥除け具付の広鍬(10)に変わる。西三河での出土例はまだないが、静岡市川合遺跡[13]には廻間Ⅱ～Ⅲ式併行期に、尾張と同形態の泥除け具を装着する直柄広鍬が出土している。

(3) 掘り棒

これも伊勢湾型曲柄鍬同様、川原遺跡を特徴づける器種といえる。川原上層Ⅰ式1～2段階に出現し(4008)、同・Ⅱ式1段階(4009)、同・Ⅲ式1～2段階(4010)へと継続する。4008・4009に比べて、4010は柄部の幅が細くなる。尾張では把手と足掛けの段をもつ一木鋤(3・9)や組合せ鋤(12)が主体であり、このような一木づくりの掘り棒はみられない。ただし八王子遺跡には、伊勢湾型曲柄平鍬を大型化したような組合せ式の掘り棒(11)が出土している。全長が82.7cmあり、柄部と身部の境は不明瞭で、身幅は7.9cmと狭く、しかも下端にむかって細くなる。一見、櫂に似ているが、アカガシ亜属を用いることから組合せ式の掘り棒と考えられる。同遺跡ではもう1点これの身部が出土しており、時期はいずれも廻間Ⅰ式期初頭に位置づけられる。川原遺跡の掘り棒との関連で注目される。

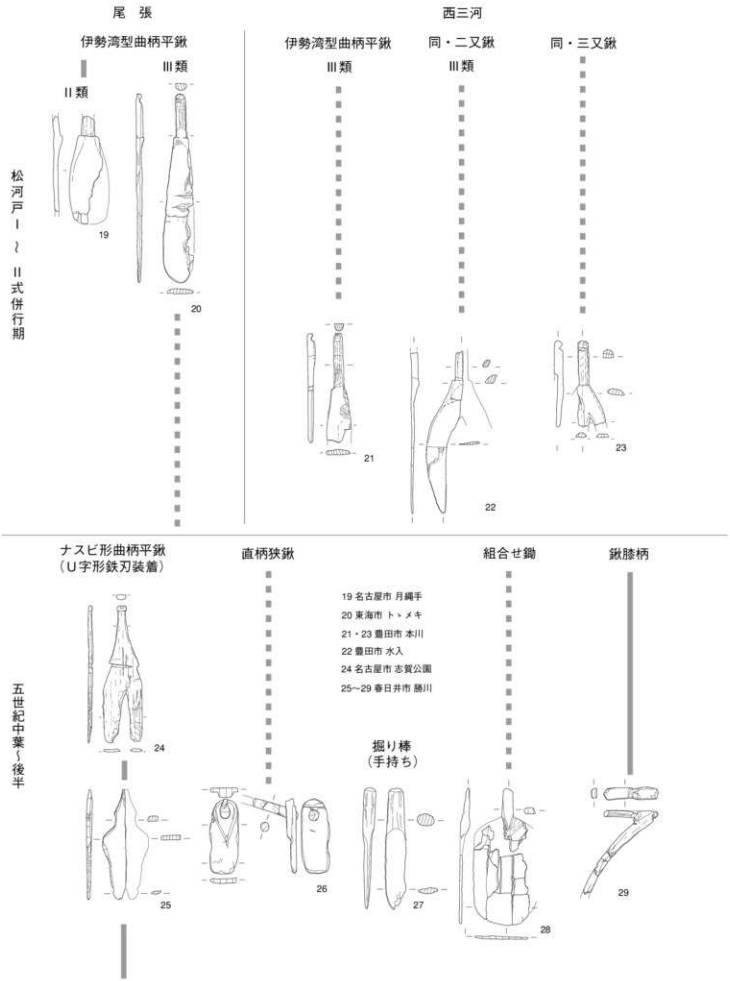
(4) 小　結

以上、川原遺跡出土の掘削具について、その編年的な位置づけをおこなってきた。これまで西三河では出土例が皆無であった弥生Ⅴ期～廻間Ⅰ式併行期の資料がまとまって出土したことは特筆される。量的に多いとはいえないが、各時期における器種組成・用途が復元でき、廻間

11) 安城市釈迦山遺跡出土の曲柄平鍬には、尾張平野部の典型的なタイプと、三重県津市六大A遺跡にみられるタイプの両者が認められる(三重県埋蔵文化財センター2000『六大A遺跡発掘調査報告(本製品編)』)。このことについては、また稿を改めて考えてみたい。

12) 樋上　昇2000c「『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか」『考古学研究』第47巻第3号、考古学研究会

13) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『川合遺跡　遺物編3(木製品図版編)』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1996『川合遺跡　遺物編3(木製品本文編)』

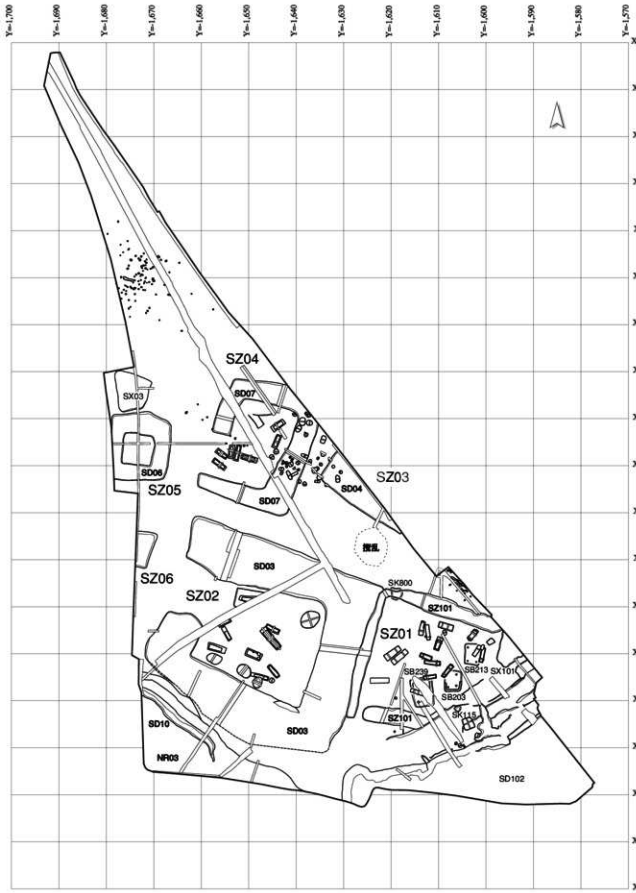

尾　張
西三河
伊勢湾型曲柄平鍬
II類
III類
伊勢湾型曲柄平鍬
III類
同・二又鍬
III類
同・三又鍬
松河戸I～II式併行期
19
20
21
22
23
ナスビ形曲柄平鍬
（U字形鉄刃装着）
直柄狭鍬
組合せ鋤
鍬膝柄
19 名古屋市 月縄手
20 東海市 トゝメキ
21・23 豊田市 本川
22 豊田市 水入
24 名古屋市 志賀公園
25～29 春日井市 勝川
掘り棒
（手持ち）
五世紀中葉～後半
24
25
26
27
28
29

Ⅱ式併行期の安城市域から出土した資料や、松河戸Ⅱ式併行期の豊田市本川・水入遺跡出土資料への系譜が追える点でも貴重である。

また伊勢湾型曲柄鍬の出現期が、廻間Ⅰ式期初頭よりも、100年以上遡ることが判明したのは大きな驚きであった。矢作川中・下流域の沖積地は、これからも木製品研究において特に目を離せない地域といえよう。

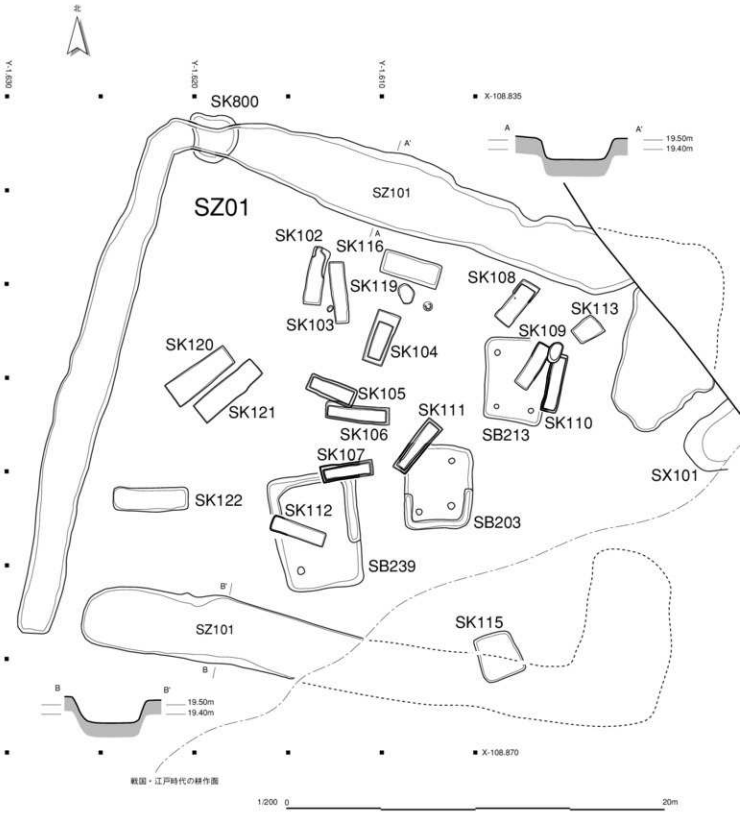
図　版

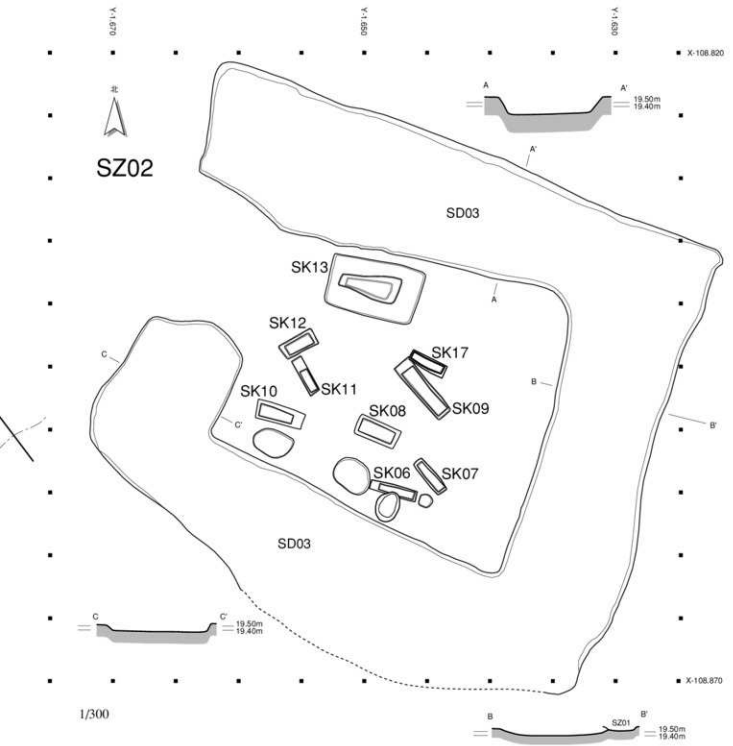
図版117　墳丘墓イメージ


Y=-1,700
Y=-1,690
Y=-1,680
Y=-1,670
Y=-1,660
Y=-1,650
Y=-1,640
Y=-1,630
Y=-1,620
Y=-1,610
Y=-1,600
Y=-1,590
Y=-1,580
Y=-1,570
X=-108,720
X=-108,730
X=-108,740
X=-108,750
X=-108,760
X=-108,770
X=-108,780
X=-108,790
X=-108,800
X=-108,810
X=-108,820
X=-108,830
X=-108,840
X=-108,850
X=-108,860
X=-108,870
X=-108,880
X=-108,890
X=-108,900
SZ04
SX03
SD07
SD06
SZ05
SD07
SD04
SZ03
撹乱
SD03
SZ06
SZ02
SK800
SZ101
SZ01
SB239
SB213
SX101
SB203
SK119
SZ101
SD10
SD03
NR03
SD102

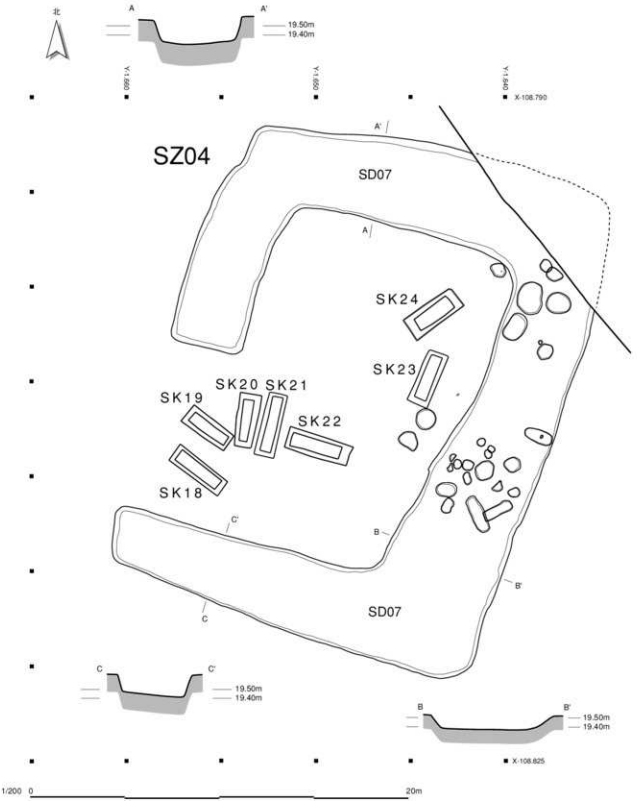
1/800

図版119　SZ01

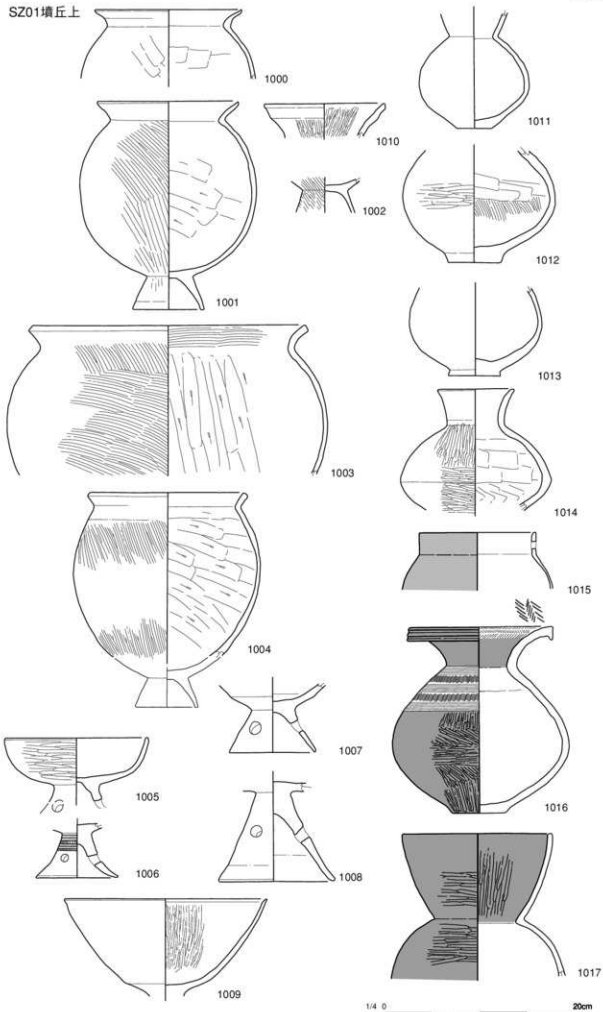

北
Y-1,630
Y-1,620
Y-1,610
X-108,835
X-108,870
SK800
SZ01
SZ101
SK102
SK116
SK119
SK103
SK108
SK113
SK109
SK104
SK120
SK121
SK105
SK106
SK111
SK110
SB213
SK107
SX101
SK122
SK112
SB203
SB239
SZ101
SK115
A
A'
B
B'
19.50m
19.40m
戦国・江戸時代の耕作面
1:200
0
20m


Y-1,670
Y-1,660
Y-1,650
X-108,820
X-108,870
北
SZ02
SD03
SK13
SK12
SK17
SK10
SK11
SK08
SK09
SK06
SK07
SD03
A
A'
B
B'
C
C'
19.50m
19.40m
SZ01
1/300

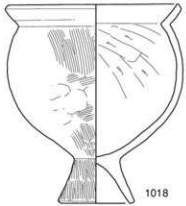
図版121　SZ04

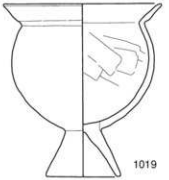

北
A
A'
19.50m
19.40m
Y-1,660
Y-1,650
Y-1,640
X-108,790
SZ04
SD07
SK24
SK23
SK20
SK21
SK19
SK22
SK18
B
B'
C
C'
X-108,825
1/200
0
20m

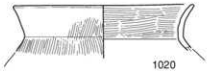
SZ01墳丘上


1000
1010
1002
1001
1003
1004
1007
1005
1006
1008
1009
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1/4 0
20cm

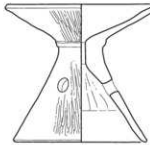
SZ01東溝


1018


1019


1020

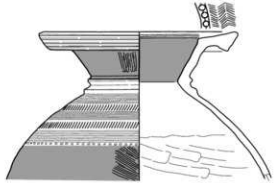
1021

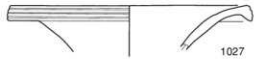

1022

1023

1024

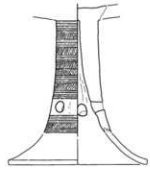
1025


1026


1027

1028

1029


1030

1031

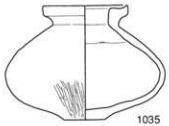
1032

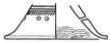
1033

1034

1/4 0 20cm

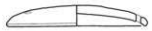
SZ01北・西溝

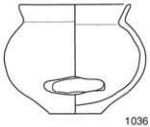

1035


1038

1039

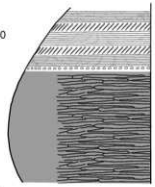
1042


1043

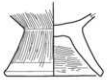

1036

1040

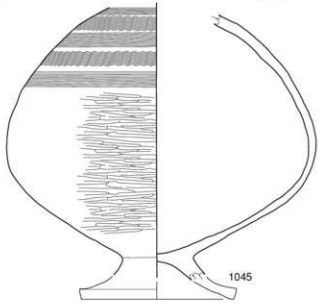
1041



1044

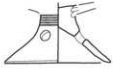

1037

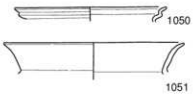
1047

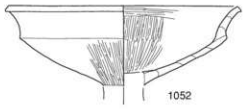

1045

1046

SZ01南溝


1048

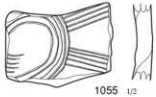

1050
1051


1052

1049

1053

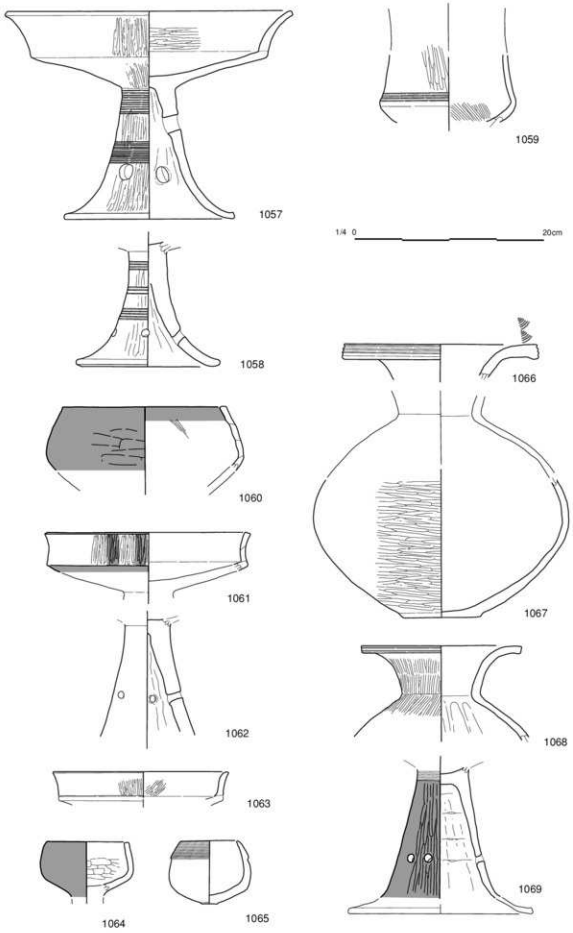
1054

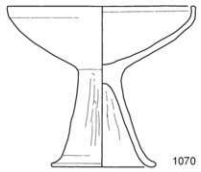

1055 1/2

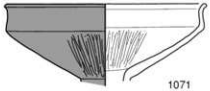
1056 1/2

図版125

SZ01下層・その他

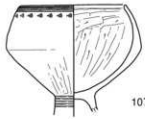



1070


1071

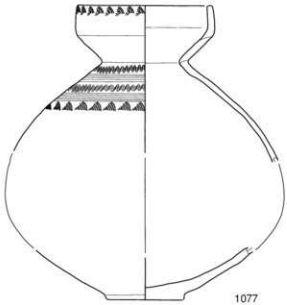
1072

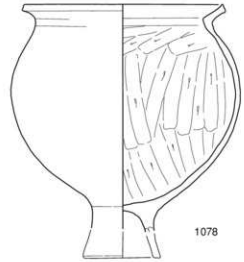
1073

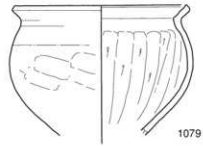

1074

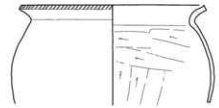
1075

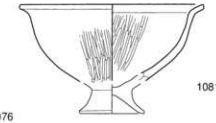
1076

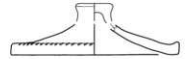

1077

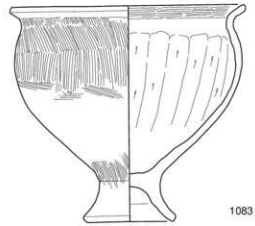

1078


1079


1080


1081

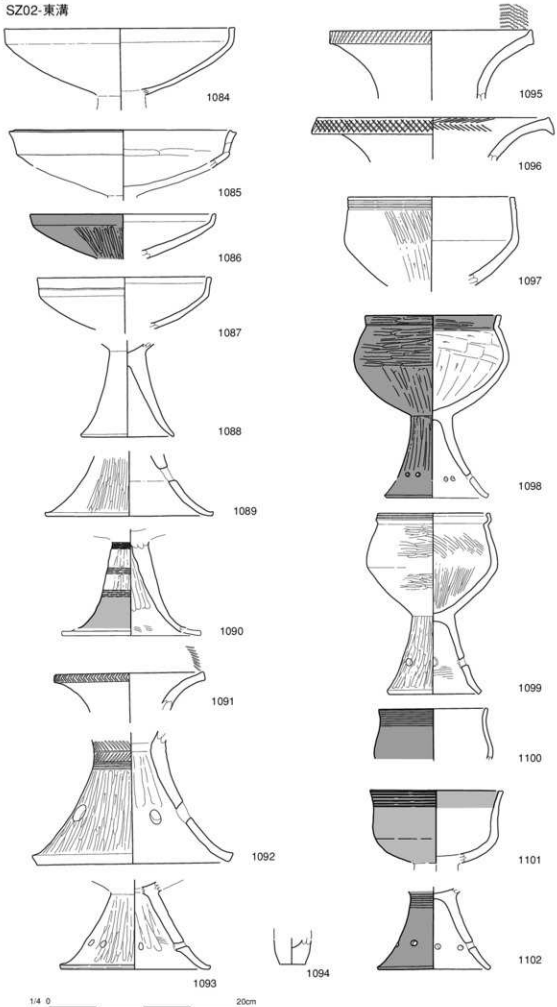

1082


1083

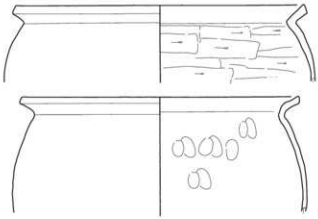
1/4 0 20cm

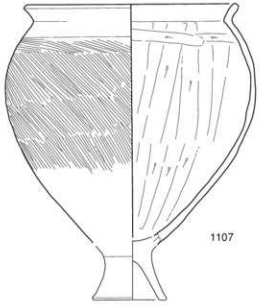
図版127

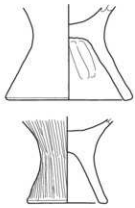
SZ02-東溝

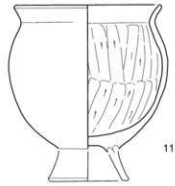


SZ02-東溝

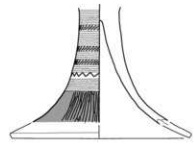

1103
1104
1105
1106

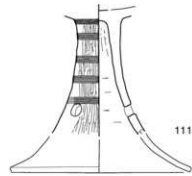

1107

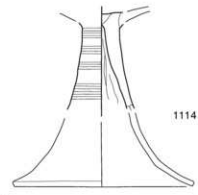

1108
1109


1110

1111

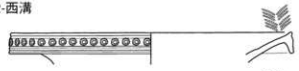

1112

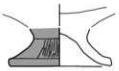

1113

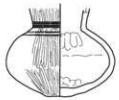

1114
1/4 0
20cm

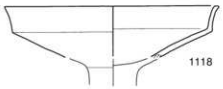
図版129

SZ02-西溝

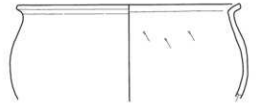

1115

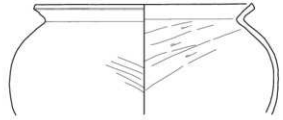

1116


1117

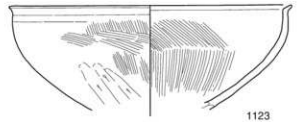

1118

1119


1120

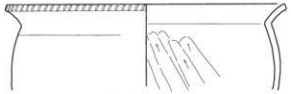

1121

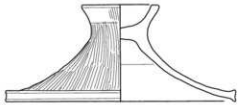
1122


1123

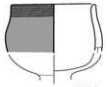
SZ02-北溝

1124


1125

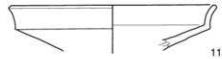

1126

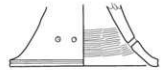
1127

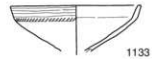

1128

1129

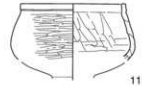
1130


1131


1132


1133

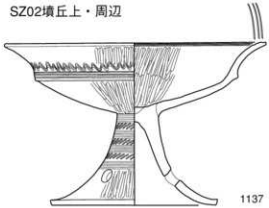
1134

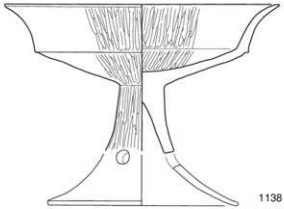

1135

1136

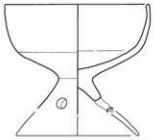
1/4 0 20cm

SZ02墳丘上・周辺


1137

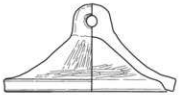

1138

1139

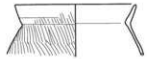

1140

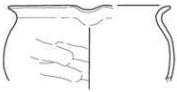
1146

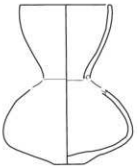
1147

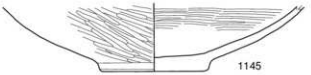

1148

1141

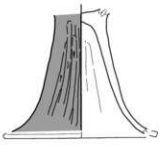

1142

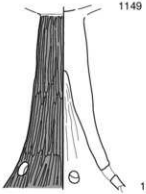

1143


1144


1145

1149


1151


1150

1152

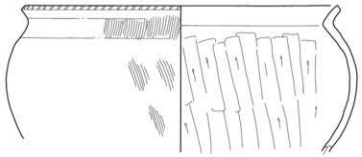
1153

1/4 0 20cm

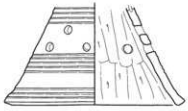
図版131

SZ03

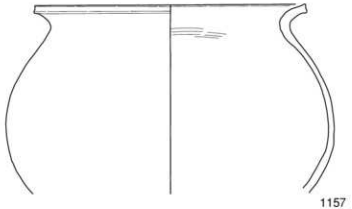
1154



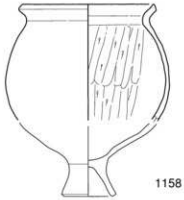
1156



1155



1157

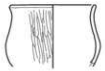


1158

1/4 0 20cm

1159

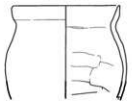
SZ04東溝



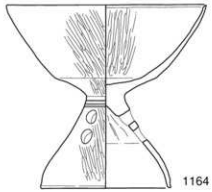
1160

1163

1161

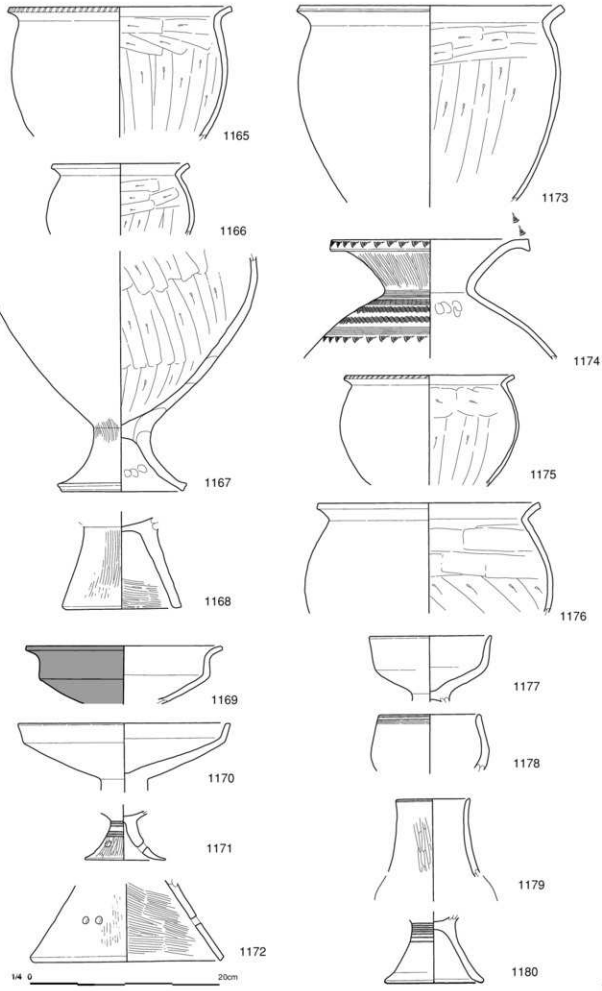


1162



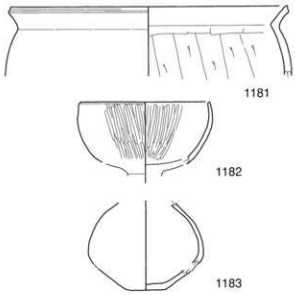
1164

SZ04-南溝

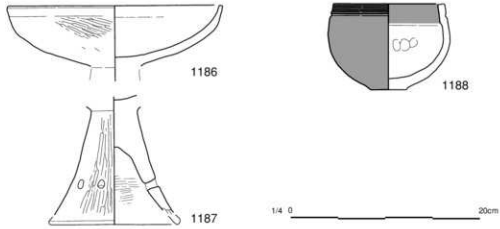

1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1/4 0
20cm
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180

図版133

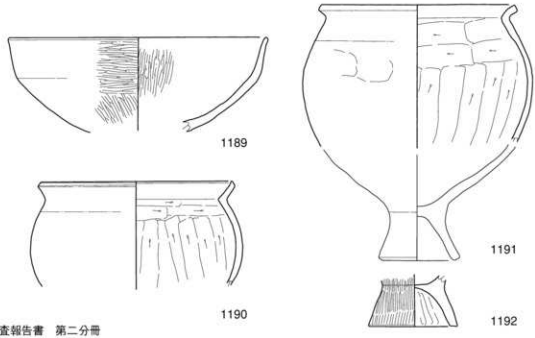
SZ04北溝・その他



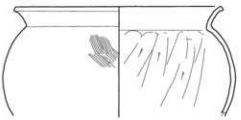
SZ05

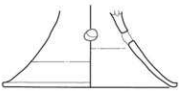


SZ06



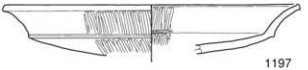
SK06

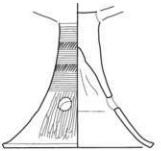

1193


1194

1195

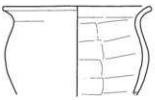
1196


1197


1198

1199

SK07


1200

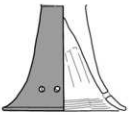
1201

1202

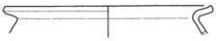
1203

1204

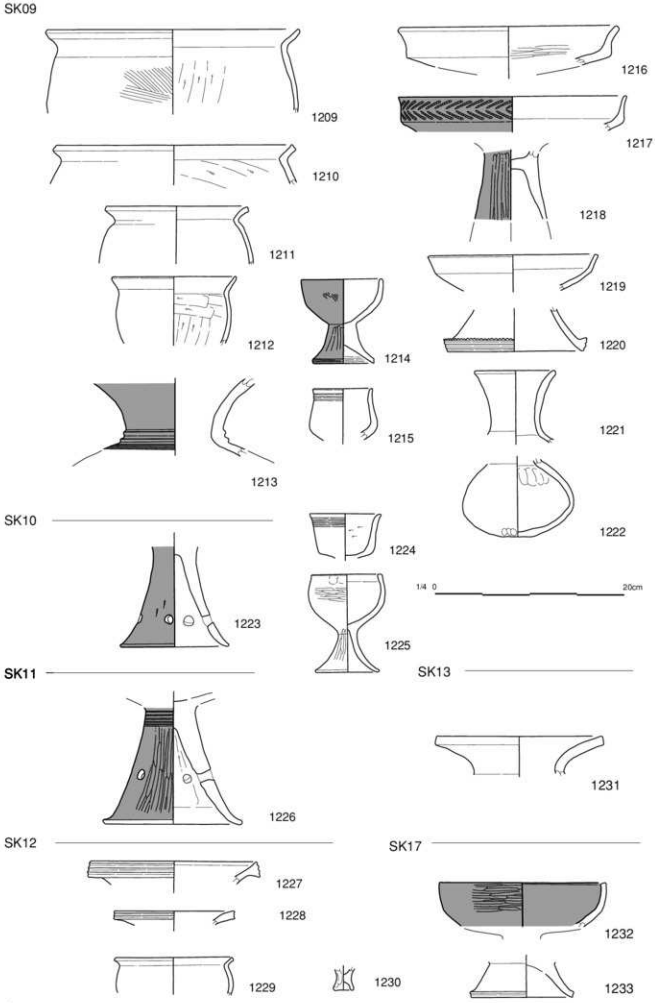
1205


1206

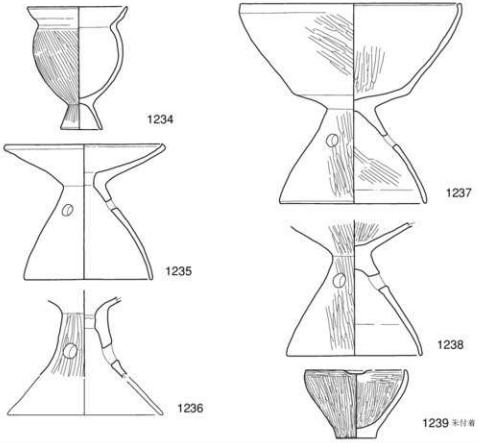
SK08


1207

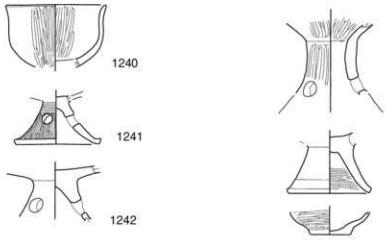
1208


SK09
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1220
1221
1222
SK10
1223
1224
1225
1/4 0
20cm
SK11
1226
SK13
1231
SK12
1227
1228
1229
1230
SK17
1232
1233

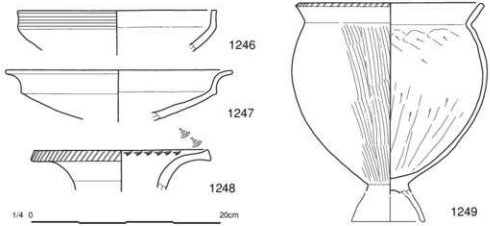
SK102



SK103

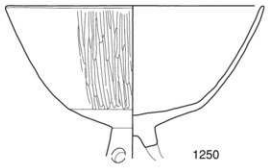


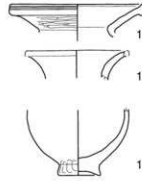
SK104

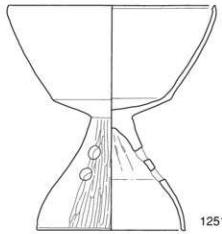


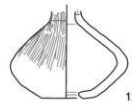
図版137

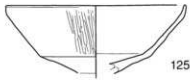
SK105

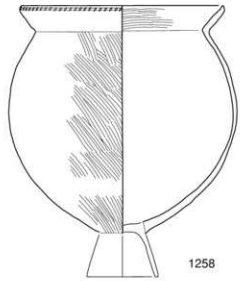


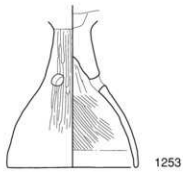


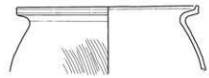


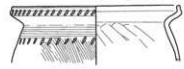




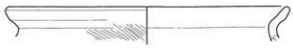




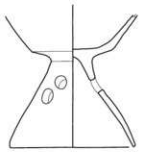




SK109

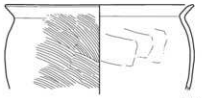


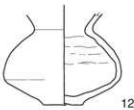
SK110


1263

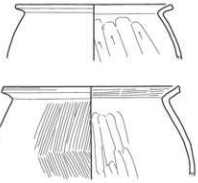
1264

SK112

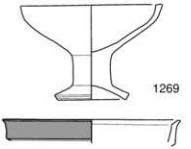

1265


1266

SK115

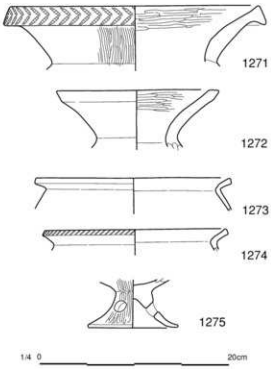

1267

1268


1269

1270

SK116


1271

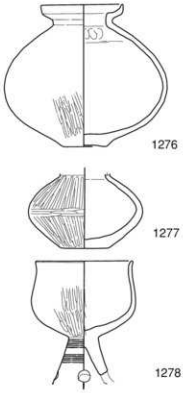
1272

1273

1274

1275

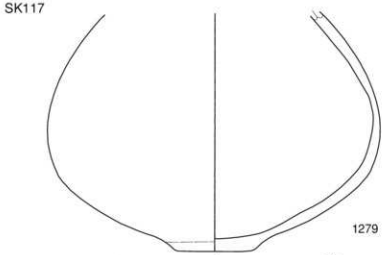
1/4 0 20cm


1276

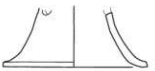
1277

1278

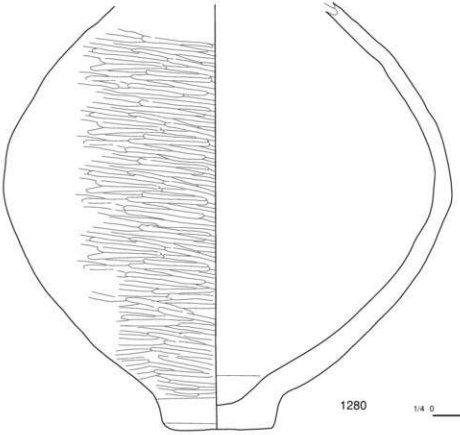
SK117



1279



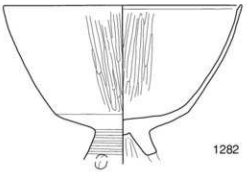
1281



1280

1/4 0 20cm

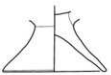
SK119



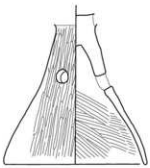
1282

SK120

1283

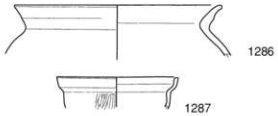


1284

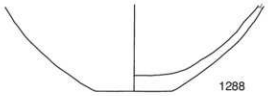


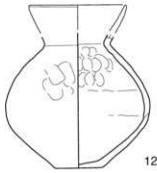
1285

SK121

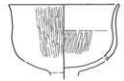

1286

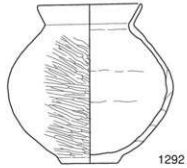
1287


1288


1289

1290

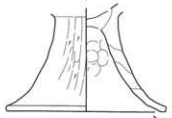

1291


1292

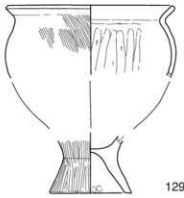
1293

SK800

1294

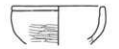

1295

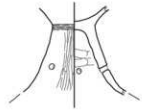
1296


1297

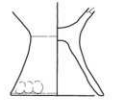
1298

1299


1300


1301

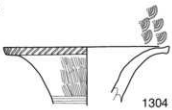
1302

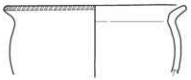

1303

1/4 0
20cm

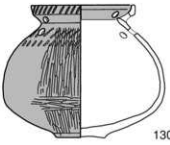
図版141

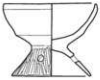
SB239


1304


1305

SD10


1306


1307

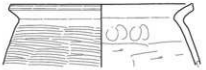
SD102

1308

1309

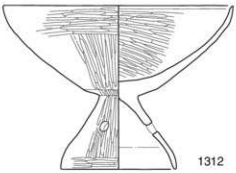
1310

SD103

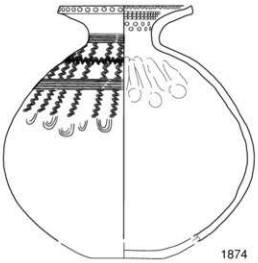

1311

1313

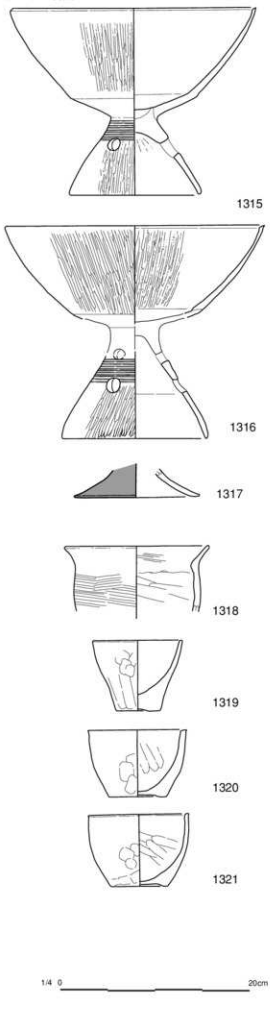
1314


1312

SK20

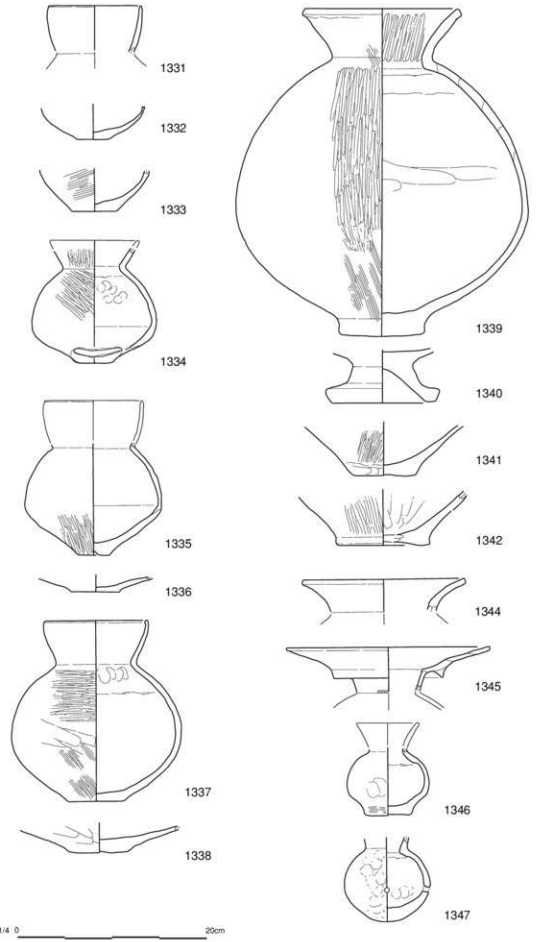

1874

SX101-最上

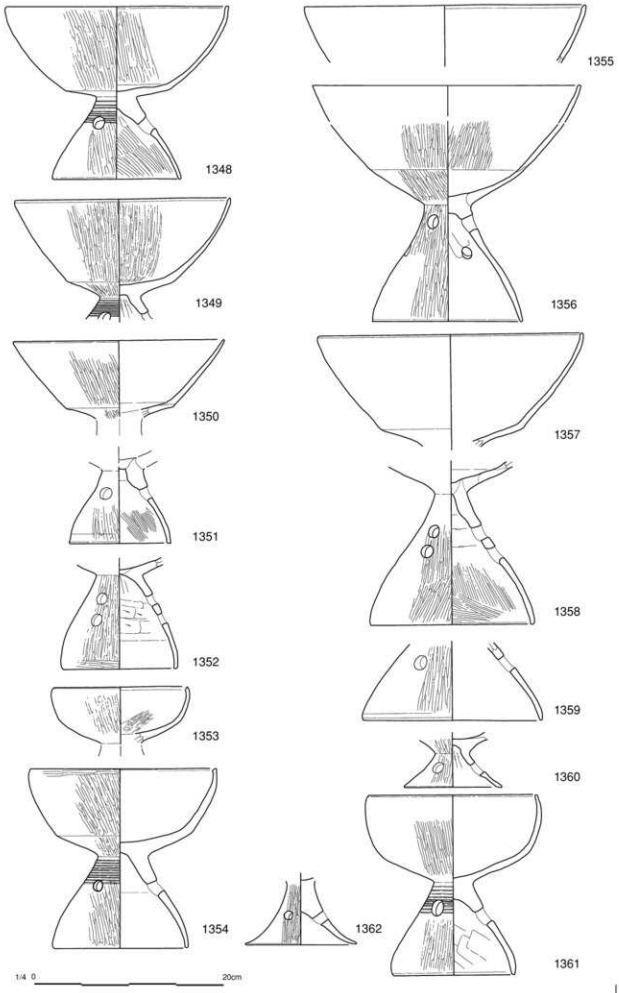

1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
1/4 0
20cm

図版143

SX101-最上

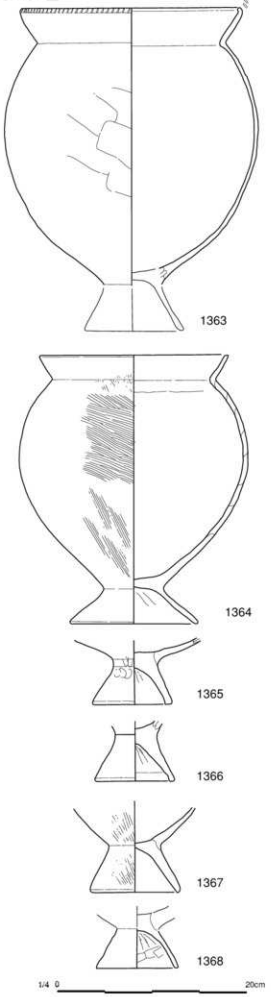


SX101-上

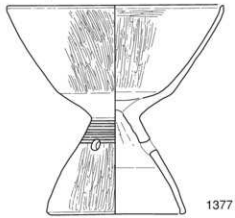

1348
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1/4 0
20cm

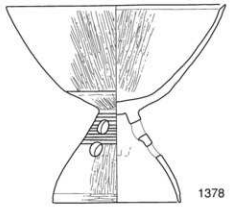
図版145

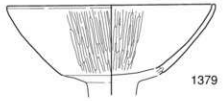
SX101-上



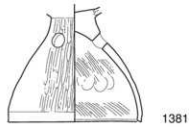
SX101-中


1377

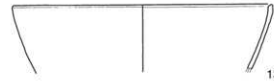

1378


1379

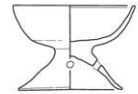
1380

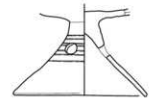

1381

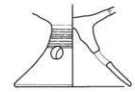
1382

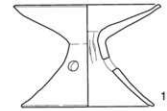

1383

1384

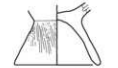

1385


1386


1387


1388

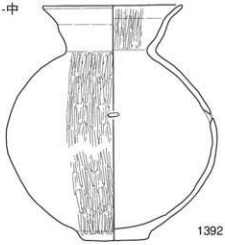
1389

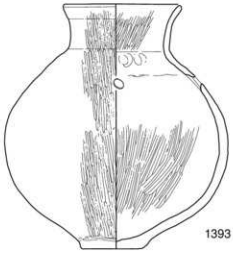

1390

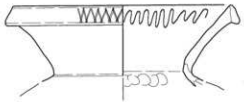
1391

図版147

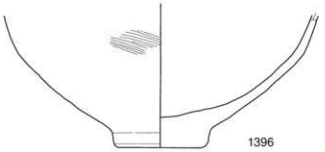
SX101-中

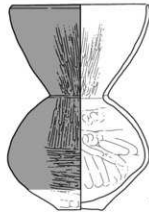

1392

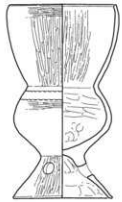

1393

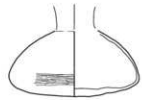

1394

1395


1396


1397


1398

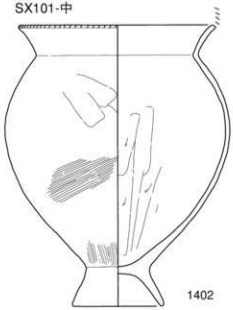

1399

1400

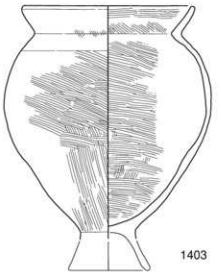
1401

1/4 0 20cm

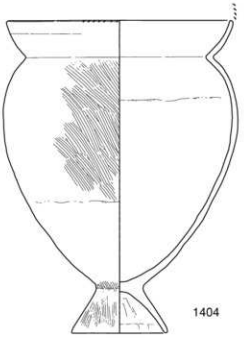
SX101-中



1402

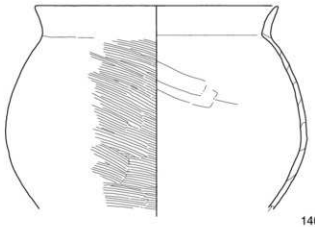


1403

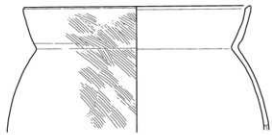


1404

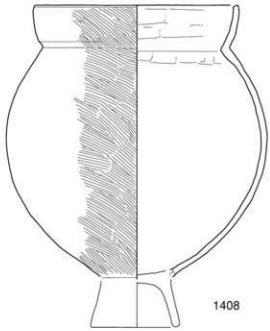
1/4 0 20cm



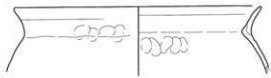
1406



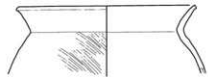
1407



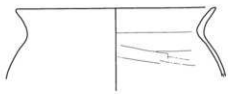
1408



1409



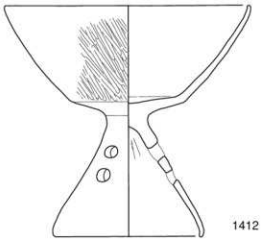
1410

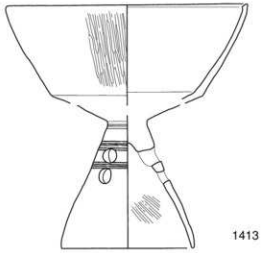


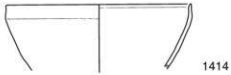
1411

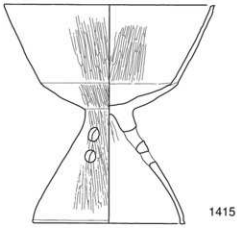
図版149

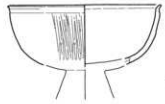
SX101-下

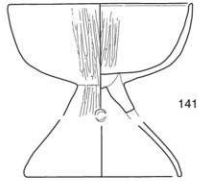

1412

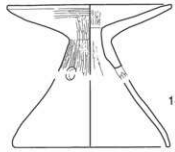

1413

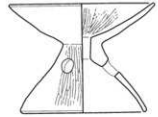

1414


1415


1416


1417


1418

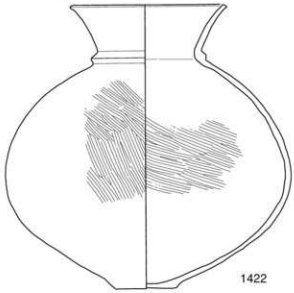

1419

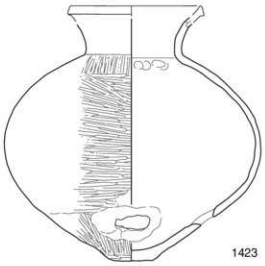
1420

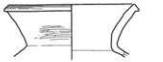
1421

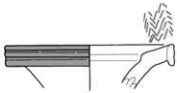
1/4 0 20cm

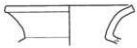
SX101-下

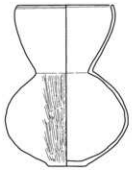

1422


1423

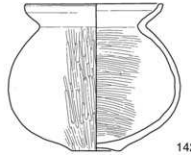

1424


1425


1426


1427

1428


1429

1430

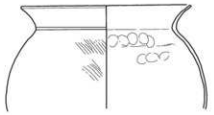
1431

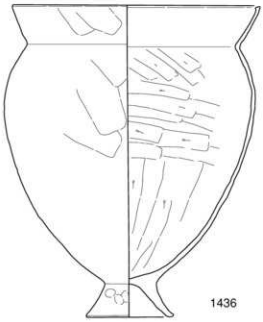
1432

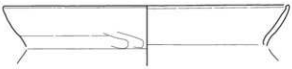
1433

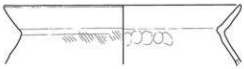
SX101-下

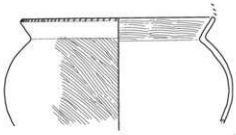
1434

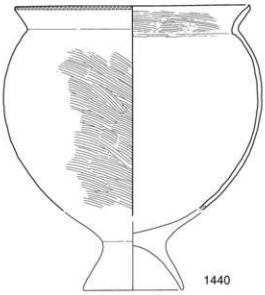

1435

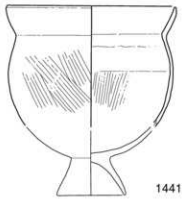

1436

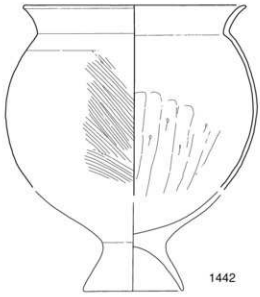

1437

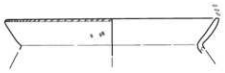

1438

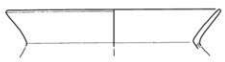

1439


1440


1441

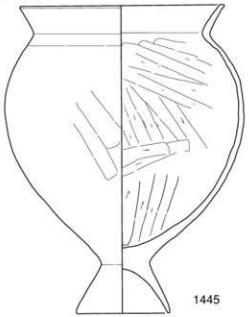

1442

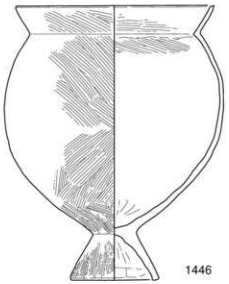

1443

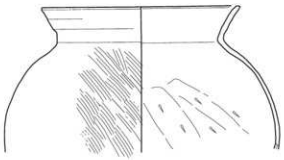

1444

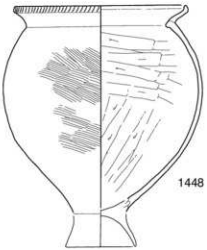
1/4 0 20cm

SX101下層

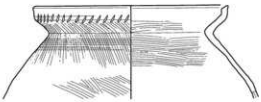

1445

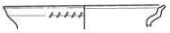

1446


1447

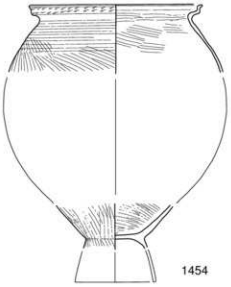

1448

1449


1450


1451

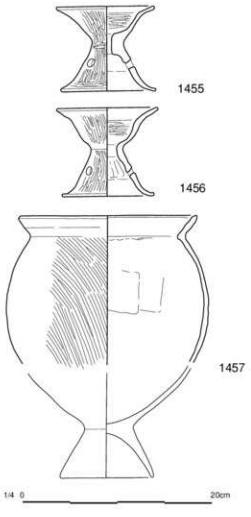
1452


1453
1454

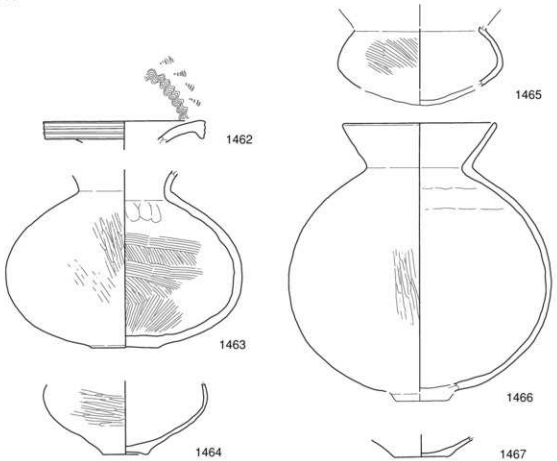
1/4 0 20cm

図版153

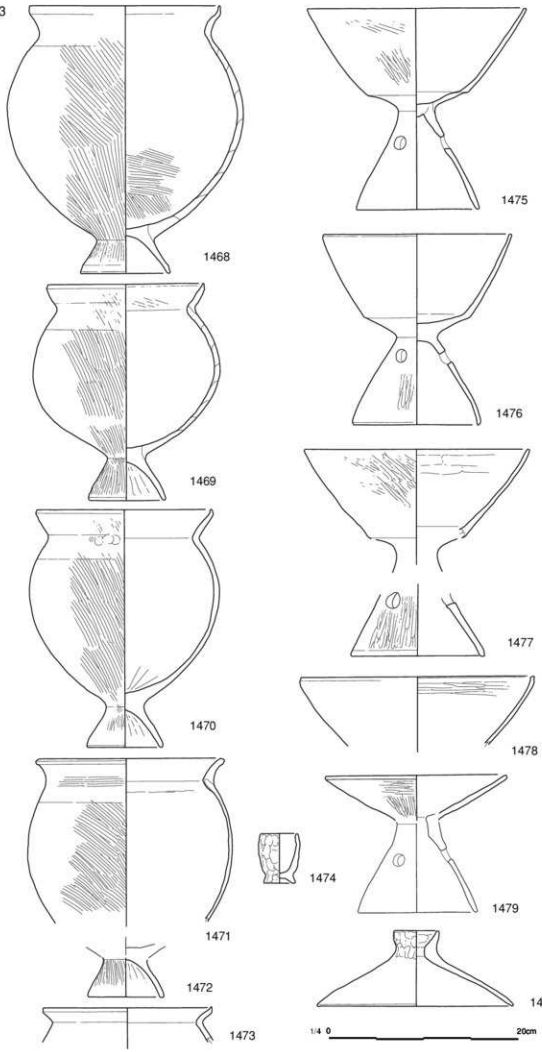
SX102



SX103

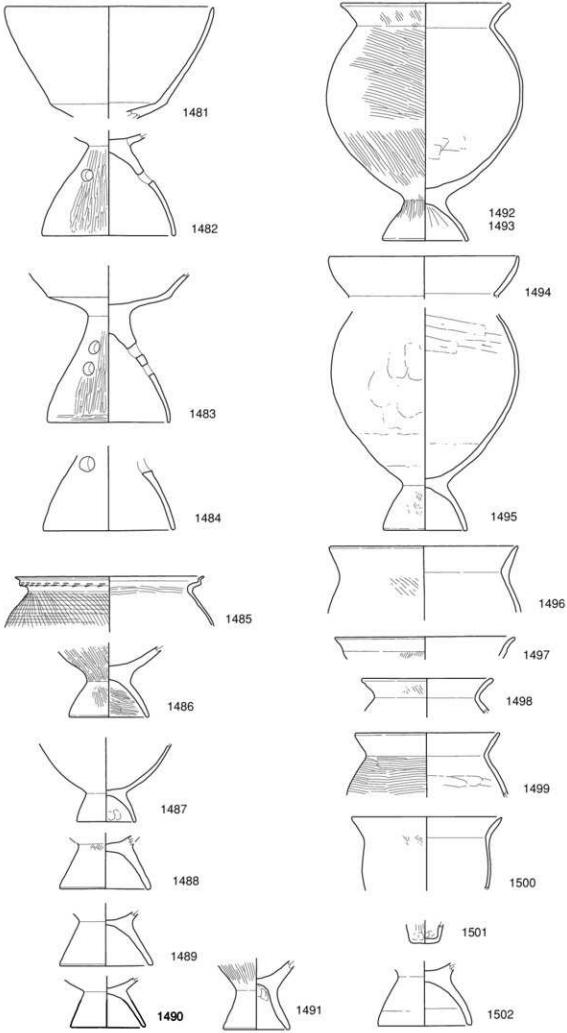


SX103

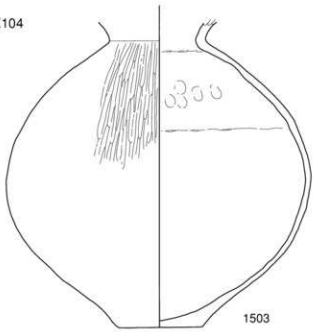

1468
1469
1470
1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1480
1/4 0
20cm

図版155

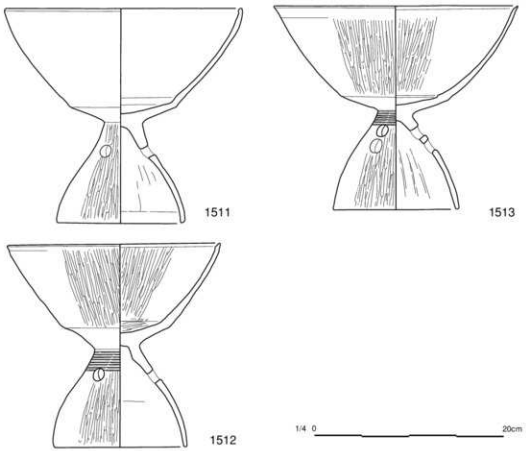
SX104


1481
1482
1483
1484
1485
1486
1487
1488
1489
1490
1491
1492
1493
1494
1495
1496
1497
1498
1499
1500
1501
1502

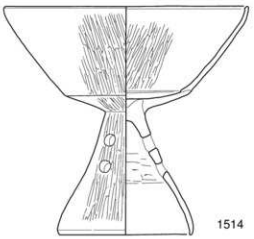
SX104


1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1510

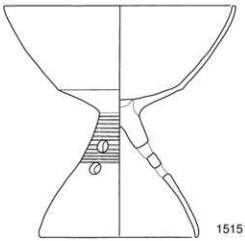
SX106


1511
1512
1513
1/4 0
20cm

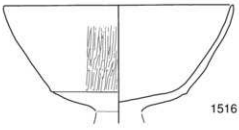
SX107



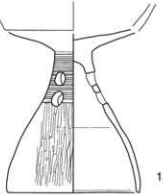
1514



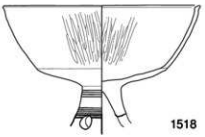
1515



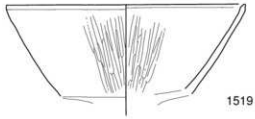
1516



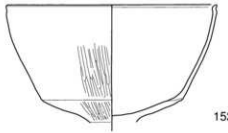
1517



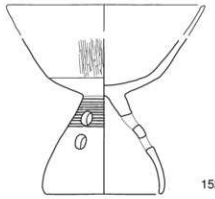
1518



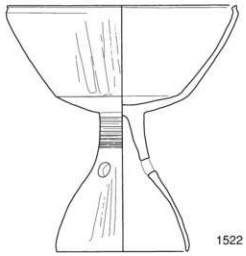
1519



1520



1521

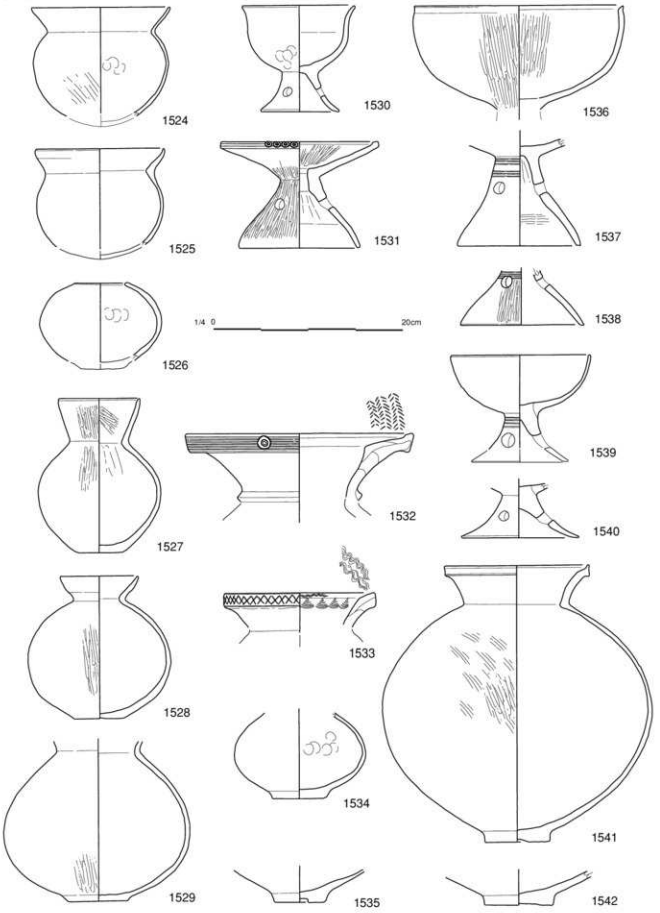


1522

1523

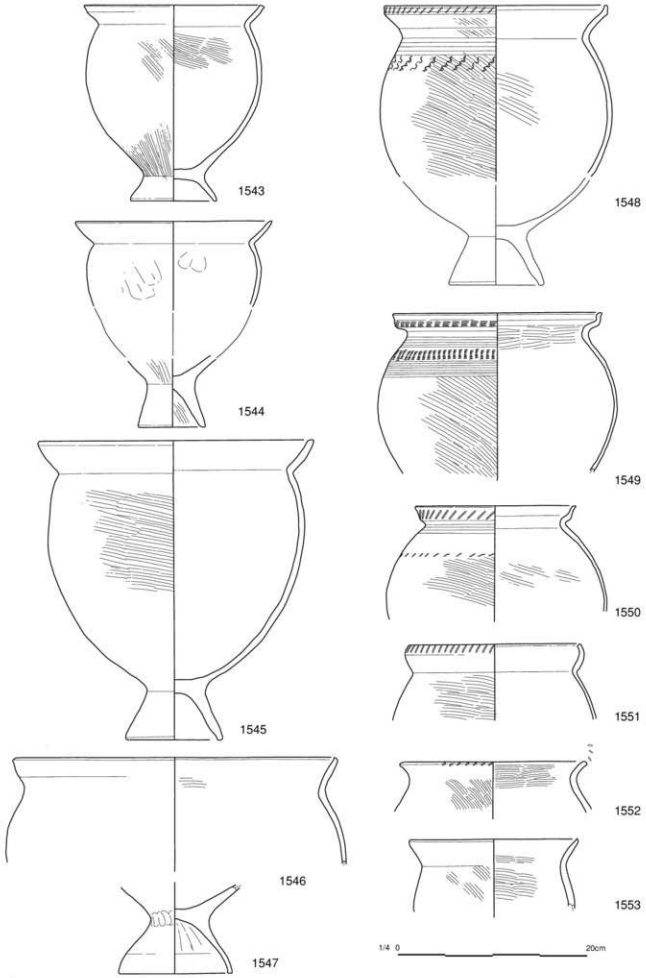
1/4 0 20cm

SX107

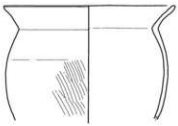

1524
1525
1526
1527
1528
1529
1530
1531
1532
1533
1534
1535
1536
1537
1538
1539
1540
1541
1542
1/4 0
20cm

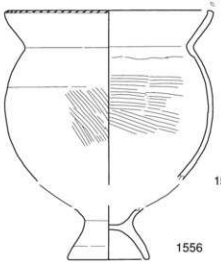
図版159

SX107

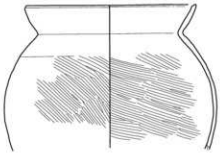

1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1550
1551
1552
1553
1/4 0
20cm

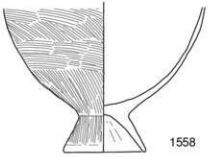
SX107


1554

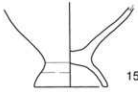

1555

1556


1557

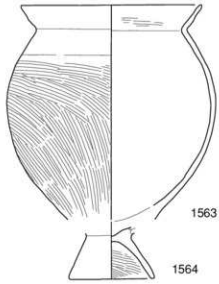

1558

1559

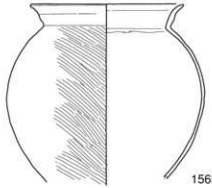

1560

1561

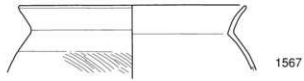
1562

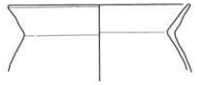

1563

1564

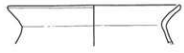

1565

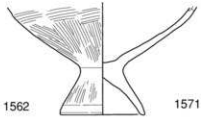
1566


1567

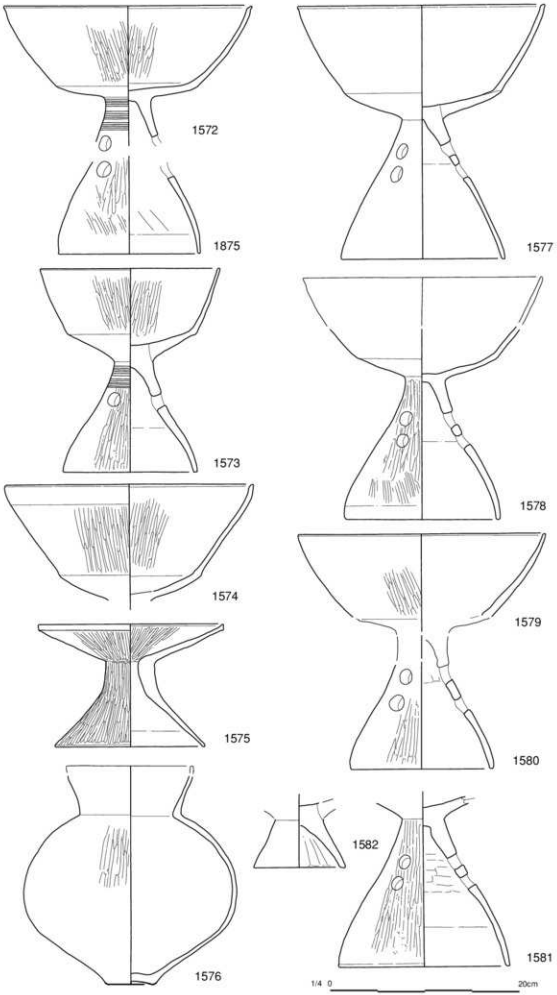

1568

1569

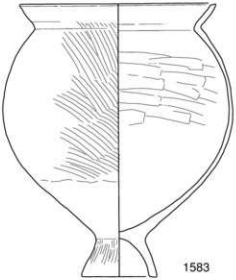

1570


1571

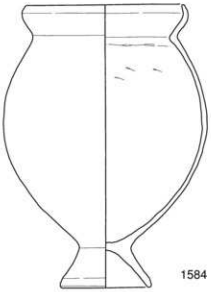
SX108


1572
1875
1577
1573
1578
1574
1579
1575
1580
1582
1576
1581
1/4 0
20cm

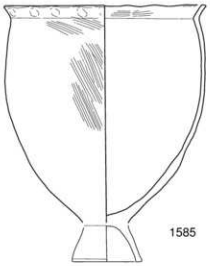
SX109



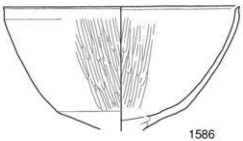
1583



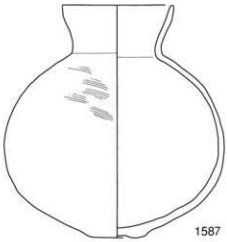
1584



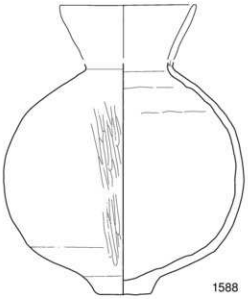
1585



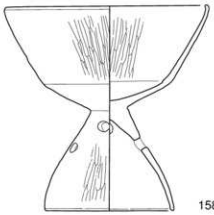
1586



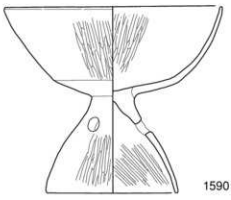
1587



1588



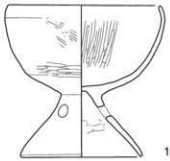
1589

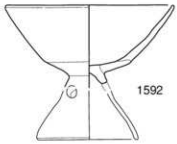


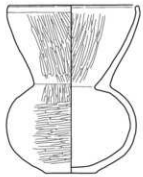
1590

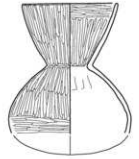
1/4 0 20cm

SX109


1591

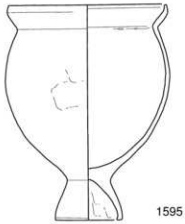

1592

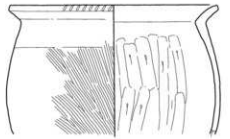

1593

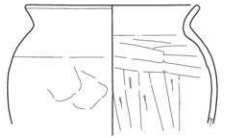

1594

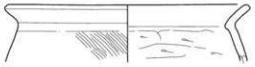
1/4 0 20cm

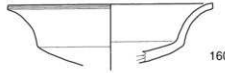
SX111

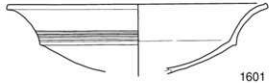

1595

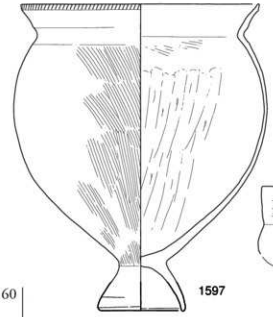

1598


1599

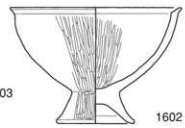

1596


1600

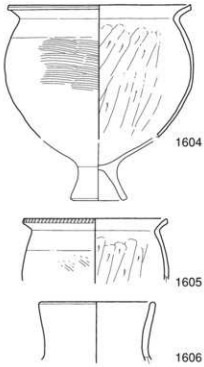

1601

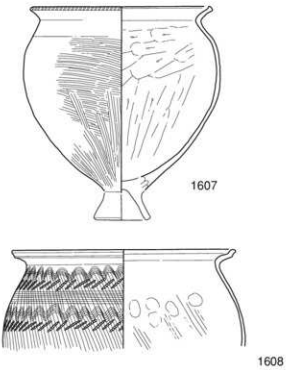

1597

1603

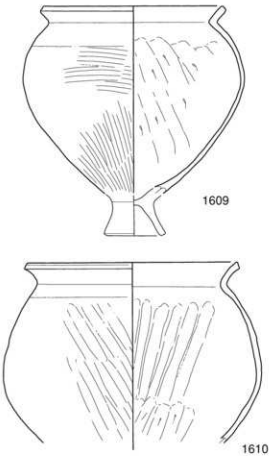

1602

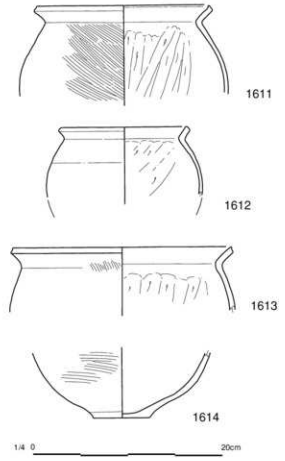
SX110


1604
1605
1606


1607
1608

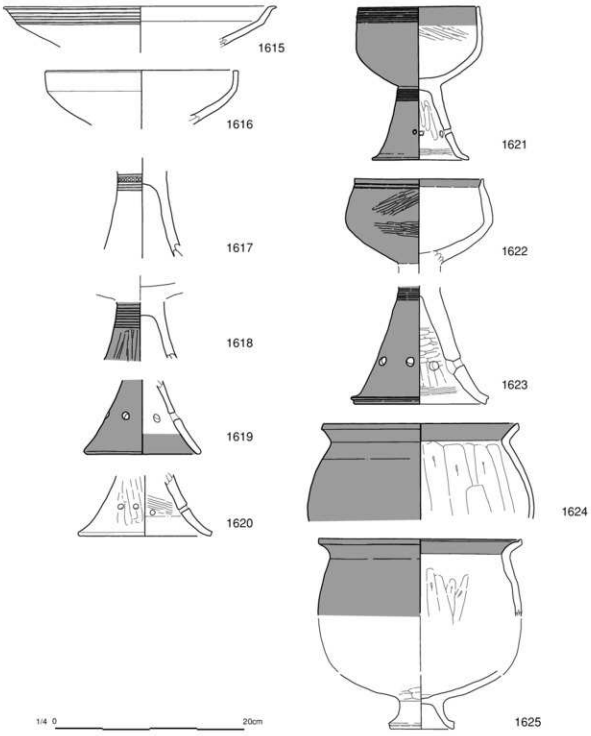
SX113


1609
1610

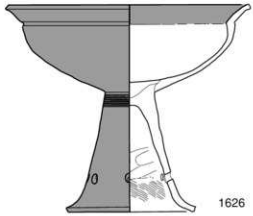

1611
1612
1613
1614
1/4 0
20cm

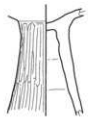
図版165

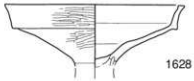
SX200


1615
1616
1617
1618
1619
1620
1621
1622
1623
1624
1625
1/4 0
20cm

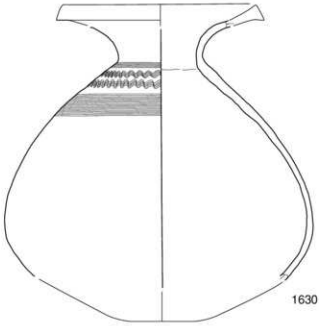
SX201


1626

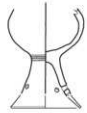

1627

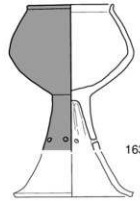

1628

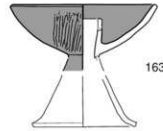
1629

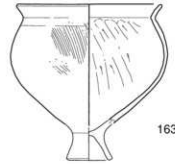

1630

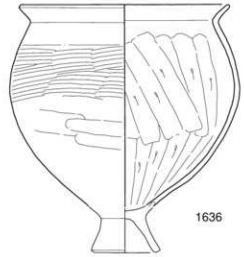
1631

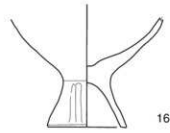

1632


1633


1634

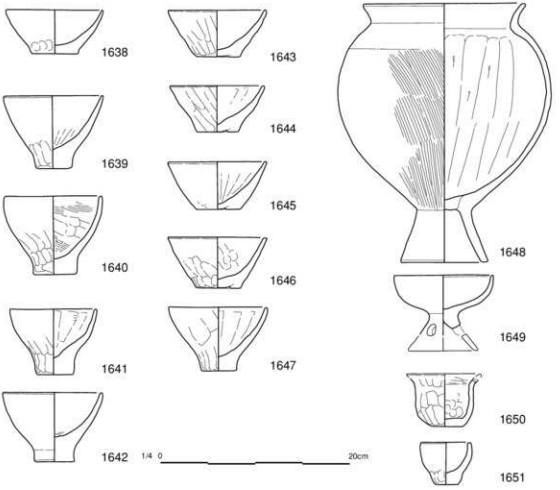

1635


1636

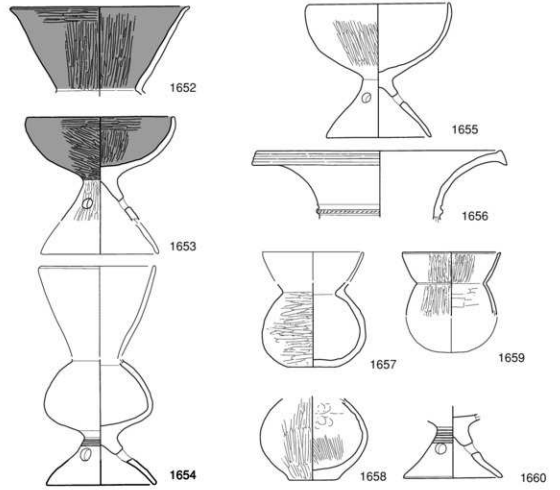

1637

図版167

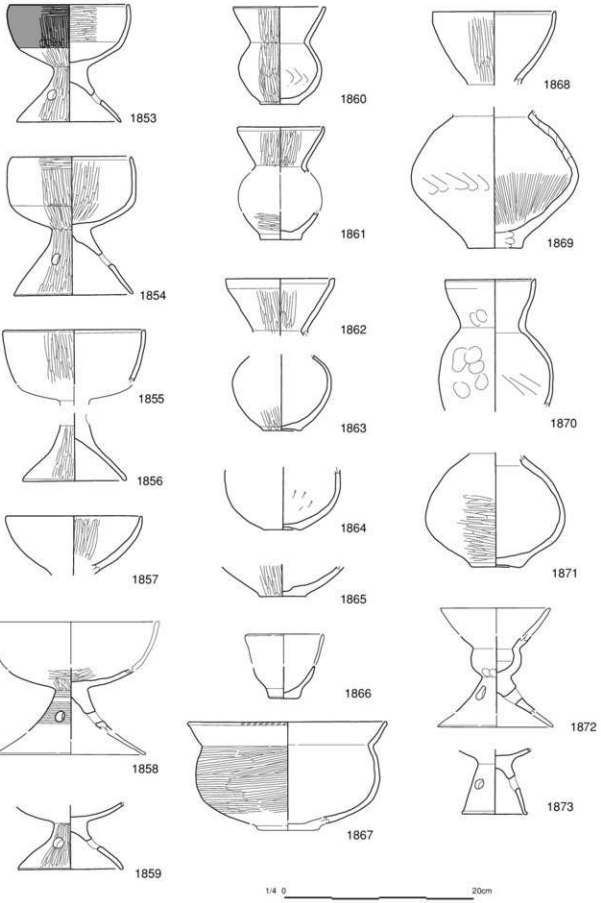
SX202



SX03



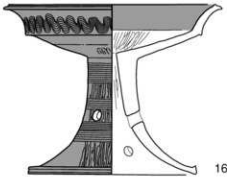
SX03


1853
1854
1855
1856
1857
1858
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1870
1871
1872
1873
1/4 0
20cm

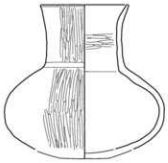
図版169

SX203

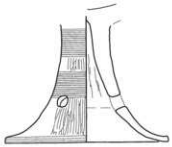
1661



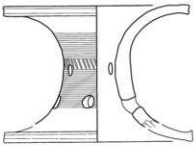
1664



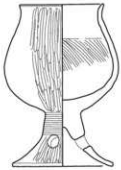
1662



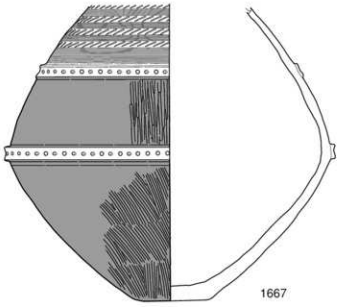
1665



1663



1666

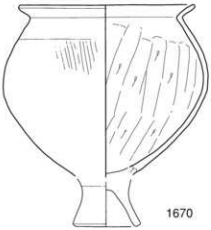


1667

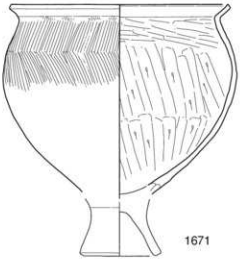
1/4 0 20cm

1668

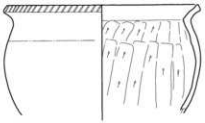
1669



1670

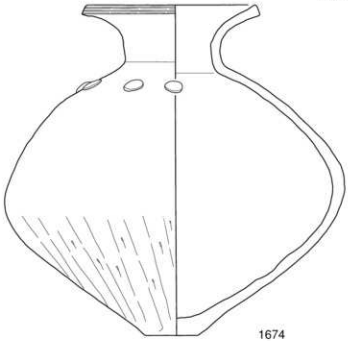


1671

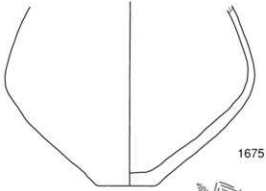


1672

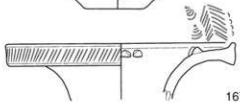
1673



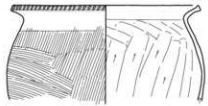
1674



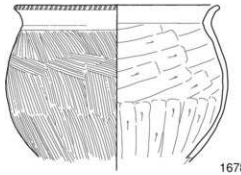
1675



1676



1677

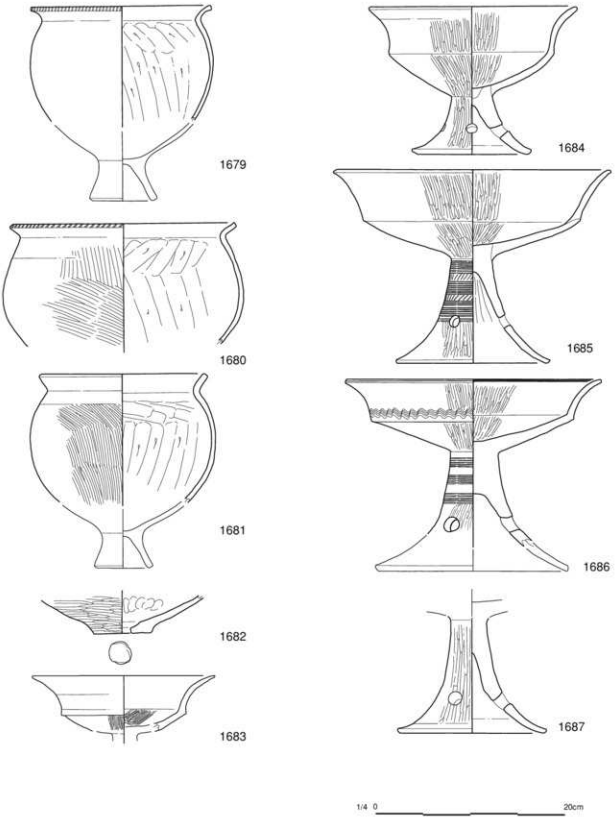


1678

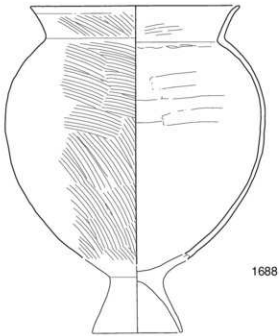
1/4 0 20cm

図版171

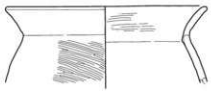
SX205



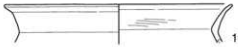
SX206



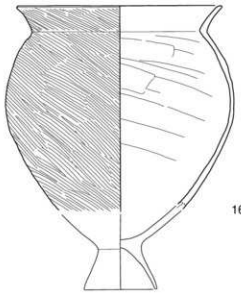
1688



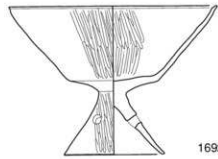
1689



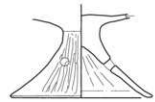
1690



1691

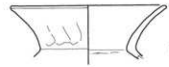


1692

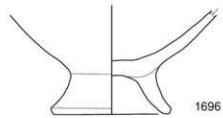


1693

1694



1695



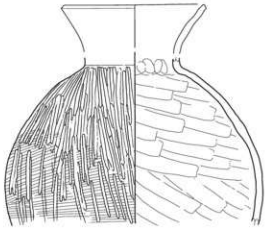
1696

1697

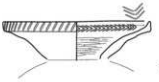
1/4 0 20cm

図版173

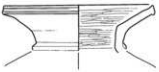
NR03-1. 2 層



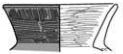
1698



1699

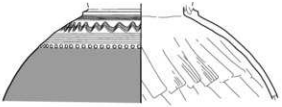


1700

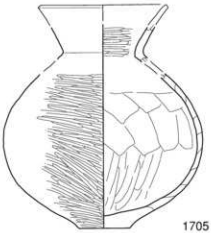


1701

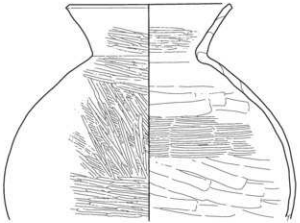
NR03- 3 層



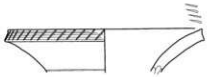
1702



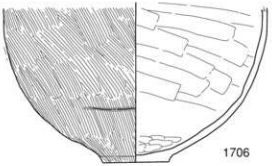
1705



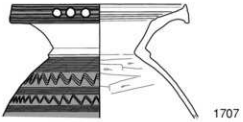
1703



1704



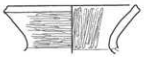
1706



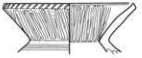
1707

1/4 0 20cm

NR03- 4 層

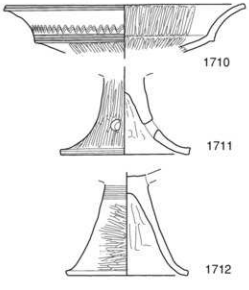


1708

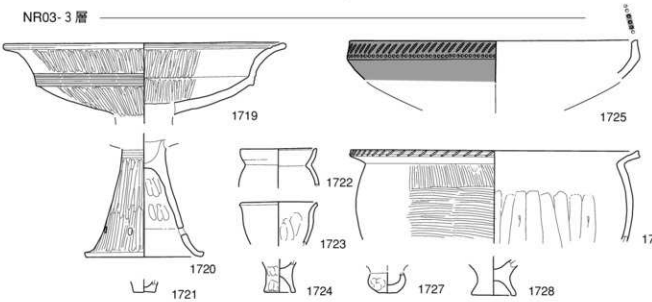


1709

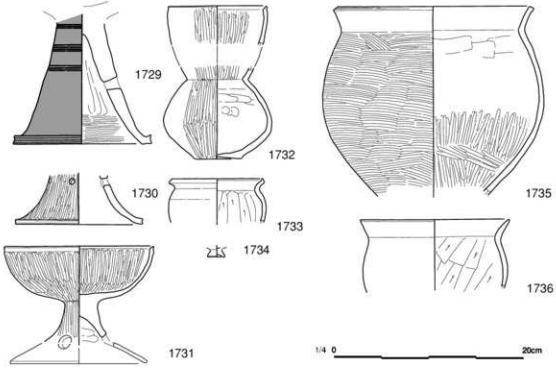
NR03-1・2層



NR03-3層

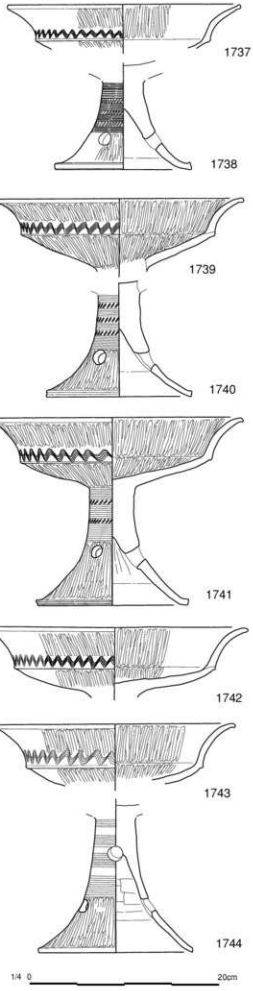


NR03-4層

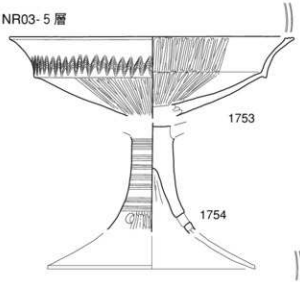


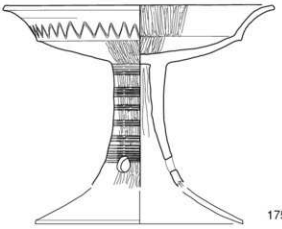
図版175

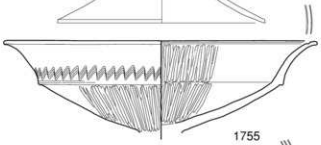
NR03- 5 層

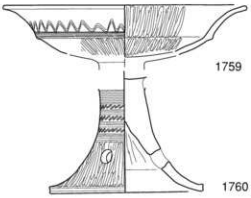


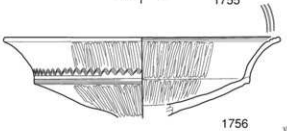
NR03-5層

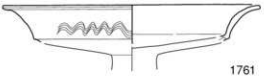

1753
1754

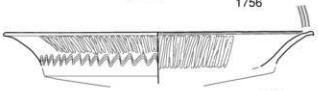

1758


1755

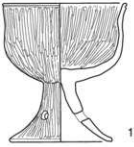

1759
1760


1756

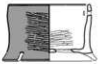

1761


1757

1772


1762

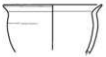
1766

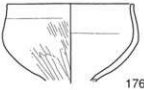

1773

1767

1774

1768

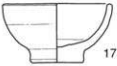

1775

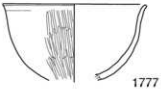

1763

1769

1776

1764


1770

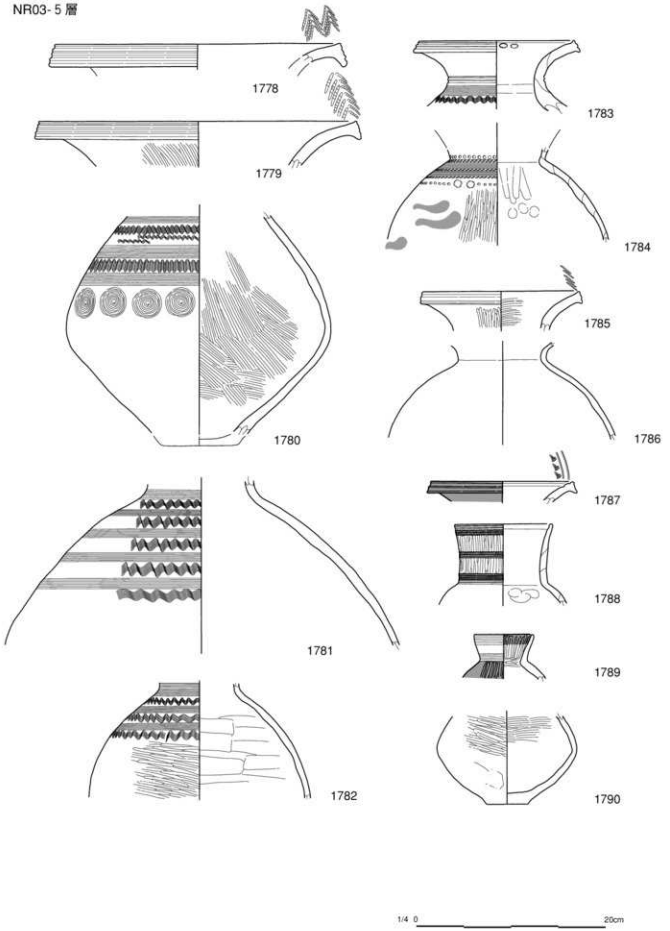

1777

1765

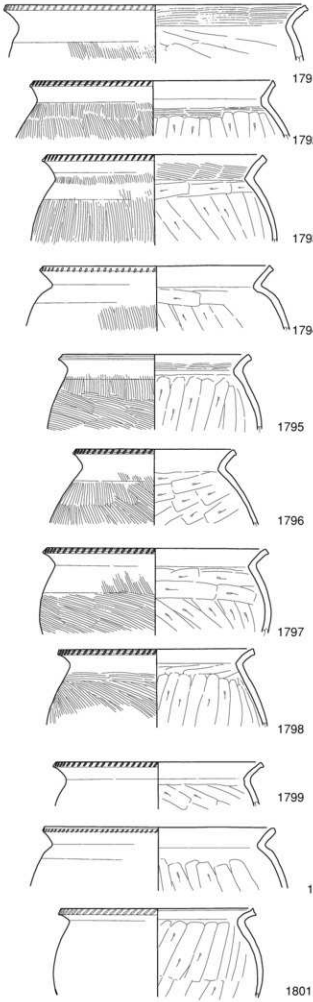
1771

図版177

NR03- 5 層

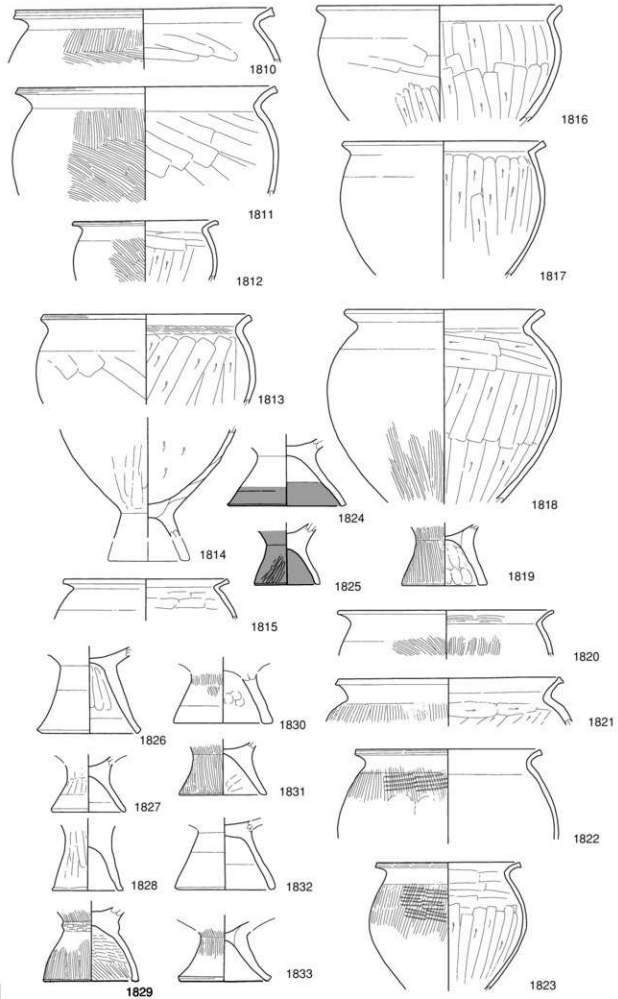


NR03- 5 層

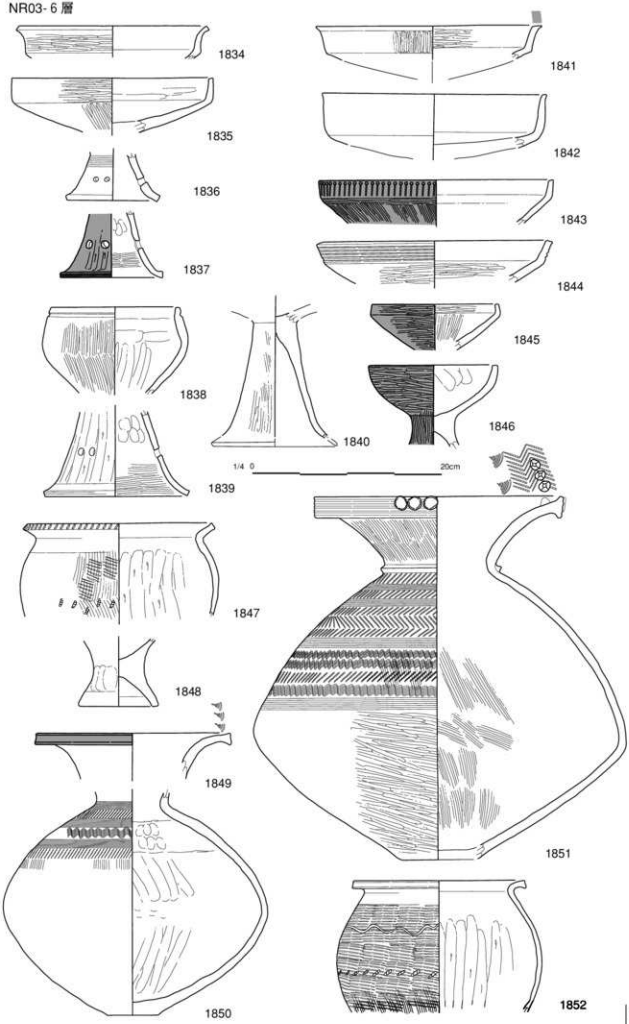

1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799
1800
1801
1802
1803
1804
1805
1806
1807
1808
1809
1/4 0
20cm

図版179

NR03- 5 層



NR03-6層


1834
1835
1836
1837
1838
1839
1840
1/4 0
20cm
1841
1842
1843
1844
1845
1846
1847
1848
1849
1850
1851
1852

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集

川　原　遺　跡

－第２分冊－

2001年８月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印　刷　サンメッセ株式会社